

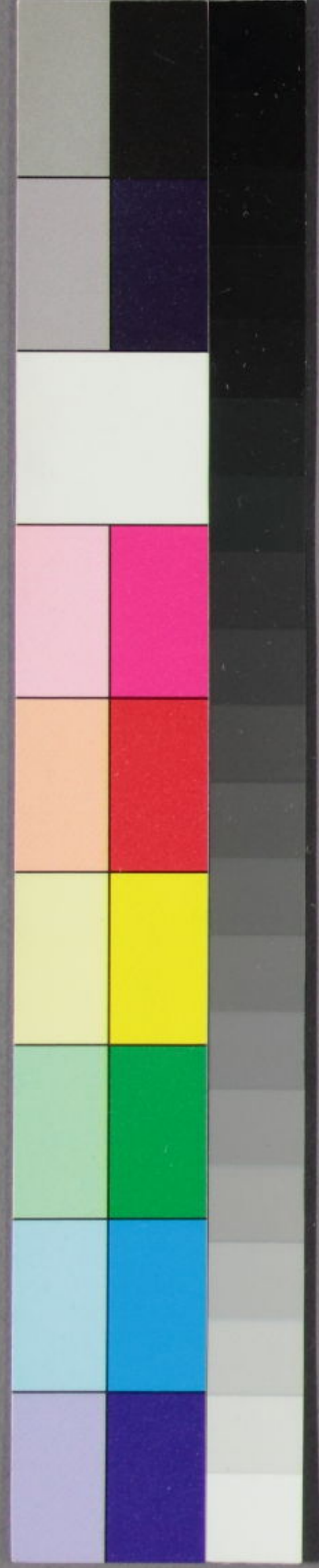
燕石
十種

我衣

初輯

五

33
1冊4
679
4



679
4

和嘉巨路茂序



此書を予初年於以る古元のそ乃語の中耳を中し事
記を去あつむ又古寫本乃中少跡や一せありしあもげ接
写し傳る他人少んをさるありあねバ文字の謬も西の文
乃拙前新をもいともし併此以ハあふ小同傳へる知との足
多能といふまそ紙筆を笑ひまんこのかあさふあや
はし書を

曳尾尾

— 牛王 <small>山</small> 相	— 諸寺引移	— 瀬戸物 <small>倉</small>
— 芝居	— 沢之五帽子	— 役者高給
— 六月 <small>夏</small> 居休	— 安宅丸	— 木馬
— 祭 <small>の如</small> し	— 敵 <small>を</small> あし	— 七損
— 白象	— 竹田近江	— 踊子
— 初物停止	— 一 <small>莖</small> 二蓮	— 同番茶 <small>倉</small>
— 大黒ノ画	— 越彦ノ字	— 右國橋
— 風病	— 豊作	— 享保御 <small>鑲</small> 金
— 能諧	— 前 <small>勺</small> 附	— 三笠附
— 地口附	— ナ <small>ゾ</small> 附	— 毛 <small>ジ</small> リ
— 穴蔵ノ始	— 男女風俗	— 伽羅油
— 油店ノ祖	— 十九文店	— 三井現金安賣ノ祖

— 樽割	— 蓮葉高 <small>ひ</small>	— 男伊達
— 石川 <small>六</small> 多勲	— 木綿合羽	— 羽織
— 頭巾	— 足袋	— 草履
— 雪踏	— 下駄	— 鼻緒
— 加ら <small>々</small> 々	— 蓑	— 桐油
— 繪珍帯刀	— 仁王門 <small>焼</small> 失	— 田向院
— 法思 <small>ノ</small> 名号	— 道連 <small>語</small> 合	— 心直 <small>ノ</small> ば
— 大明頭巾	— 御取立大名	— 刻烟 <small>草</small>
— 三 <small>注</small> ノ撥	— 八百屋 <small>お</small> 七	— 軍書 <small>講</small> 次
— 平家物語 <small>評判</small> 作者		

ト

○牛王賣の比丘尼ハ元熊登牛王宝印（印）賣（出）出（寸）比丘尼（子）
 文庫の内へ入（入）平（た）たせ又腰（腰）勸進（勸）イサ（く）をサ（し）せ米（を）貫（を）
 ハ（せ）セシヨリ修行（修）アリ寛文（ノ）頭（頭）ひん（ん）を（し）た（せ）セ（を）ウ（た）タ（タ）
 キザシ（の）ア（ラ）ハセリ天和（ノ）頃（頃）上遊（女）ハ（つ）カ（い）ス（ル）ニ
 ヨリカヤ（ノ）族（族）賣（女）トハ（ナ）リタリ然（ハ）モ元来（僧）形（形）衣（衣）
 服（は）木綿（を）著（し）たり

○天和貞享（比）ハ浅黄木綿白き布子浅黄も有素足（中）又（子）履（履）菅笠（笠）の（履）
 う（ち）わ（く）く（腰）ハ（し）文庫（ヲ）持（多）り腰（帯）を（も）つ

○元禄（比）より黒棧（道）中（を）若（を）き（り）外（の）此（布）子（を）若（を）き（れ）も（多）く（也）
 を（げ）笠（を）履（き）み（居）る（を）持（ち）

○宝永（比）より比丘尼（ハ）柄（取）を（も）つ（り）元禄（より）中（宿）所（は）是（一）外（也）
 鈴（五）ツ（過）或（ハ）四（ツ）を（限）り（出）タ（セ）ツ（限）る（也）此（宿）の（宿）破（中）少（何）て（也）

他

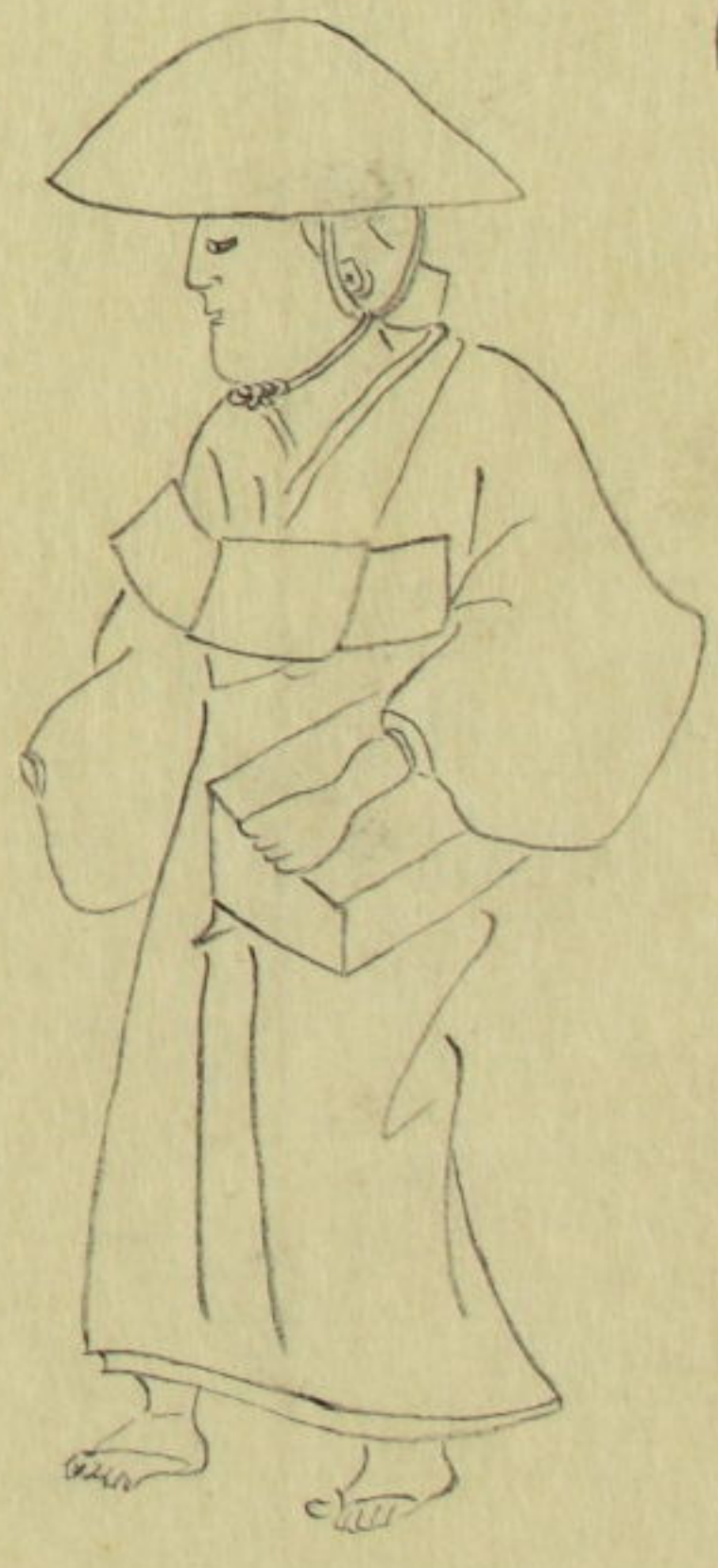
修（り）出（る）事（ふ）し和（水）河（北）側（素）を（も）つ（り）新（道）持（て）大（方）中（宿）所（は）香（法）
 法（印）ト（テ）公（儀）由（送）着（の）所（寄）是（を）香（法）店（と）以（ハ）八（友）河（内）堀（通）り（町）宿（中）宿
 あり（後）京（都）所（寄）あり（心）徳（田）一（葉）場（町）宿（所）出（タ）下（京）保（九）年（小）後（民）部
 及（尾）寄（一）引（引）修（業）六（本）筋（筋）所（中）宿（所）ハ（サ）ヤ（編）緬（字）八（丈）の（紅）裏（裏）換
 振（子）若（を）夏（冬）黒（ち）り（め）んの）模（形）巾（を）若（を）尤（也）長（柄）并（糸）ね（指）女（を）と（し）く
 寄（し）る（ぬ）有（様）也（有）頭（頭）津（子）門（跡）の（眼）法（思）寄（寄）前（中）宿（宿）是（ハ）を（と）り（行）
 宿（津）田（多）所（出）又（深）川（新）大（橋）向（り）出（る）安（宅）丸（の）酒（の）町（所）あり（是）を（を）
 何（り）比（丘）尼（ト）云（ハ）个（品）あり（四）谷（の）早（稲）田（ト）在（在）り（も）出（る）下（り）あり（小）舟（宿）也（也）
 此（の）門（書）或（ハ）寄（合）辻（番）を（新）宿（ト）享（保）十（年）幕（場）所（宿）也（白）コ（シ）長（巻）を（う）
 ハ（丁）堀（和）平（越）中（中）殿（宿）也（北）方（島）舟（舟）宿（所）也（上）を（浦）の（宿）引（こ）を（寛）保（二）
 年（八）所（宿）心（中）出（来）る（公）也（一）あり（つ）賣（女）若（を）落（て）る（中）宿（宿）堅（く）抑（止）
 之（を）み（る）延（享）二（年）まで（津）田（の）宿（を）寄（る）と（云）此（ら）又（ハ）何（方）一（也）
 九（世）来（る）あり

ル

○延享のころより御停止を破るるの^唐とくに成りあり

古来かくること
古風あり

○以中古来ハ後美ノツネテイノ以中ニ
老比丘尼ハ久ミココロナトモツケタリ元
禄ノコロヨリ長クスル



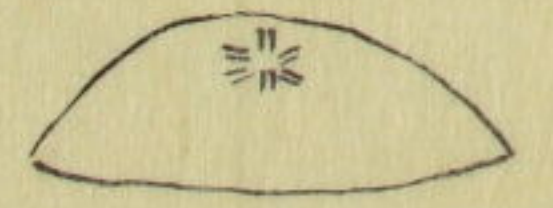
此ギ以中ソノコロヨリモミアゲハヤルユヘ下へ細おきて
新をヲシ以中を升ヲトナル

享保の以より以中若くぬおてらむる女のふよを學ぶ
月代をそらを長クあれはまきみてもみ上帯の所を頭
巾の表へおきてもみよを學ぶむ家取正積ノ以よりそ
是以中こうさうととんどもそつど長クハあり

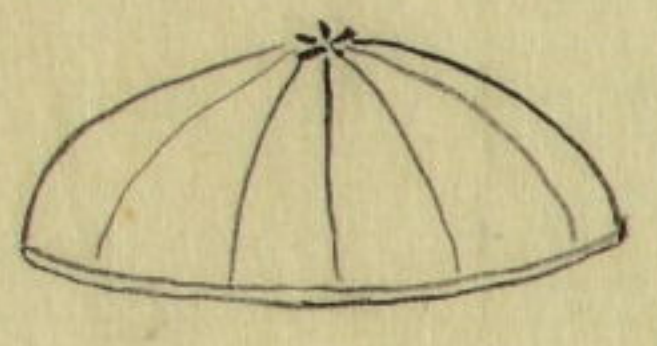


中宿こてを思ぢりめん

古来上總笠元禄ヨリ加賀笠
宝永ヨリ針カネフチノ加賀之



加賀
ヒモワタ入
クケヒモサ
ラシ木ノシ



ハリガネフチ加賀至極吟味より常ヲイノ女ノカムルモノニアラス
ヒモ太キ丸グケカヤ當モ白シ大ブリニスル享保ノ未元文ノ比ヨ
リ笠ノ前ニシルシニ紅ノ切ニテ目通ヘサゲ物ヲスル延享ノ比
ハ比丘尼中宿トメラレテ往來セザレドモ延享五年ヨリソ
ロト前ノゴトクニサリタリ其コロ女ハ淺草小紋中形ハ
ヤル比丘尼モ中形ノヒトヘモノヲ着ス

ト

延享のころより御停止を破る（繪）のよくに成りあり

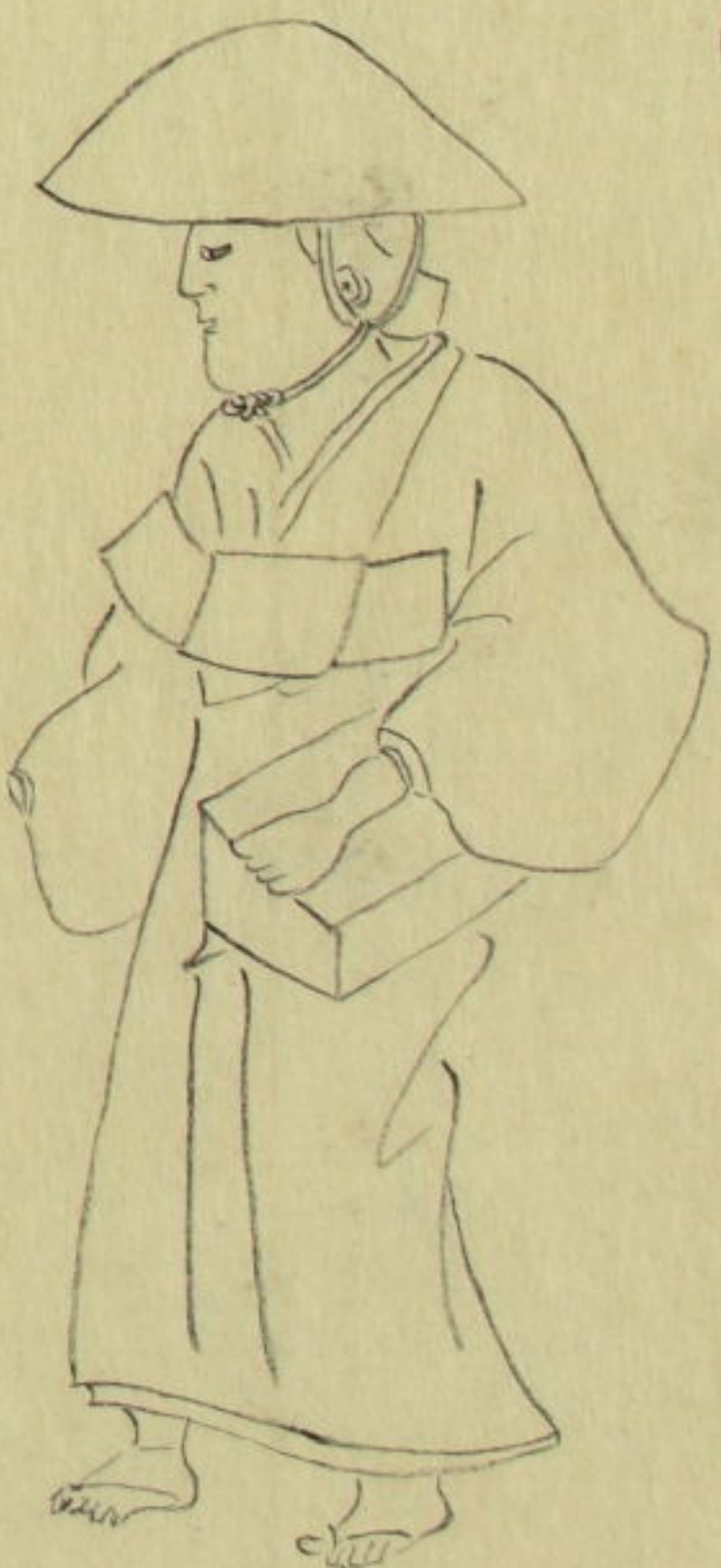
古来かくること
古他あり

○延中古来ハ淺黄ノツネテイノ延中ニ
老比丘尼ハ久ミシコロナトモツケタリ元
禄ノコロヨリ長クスル



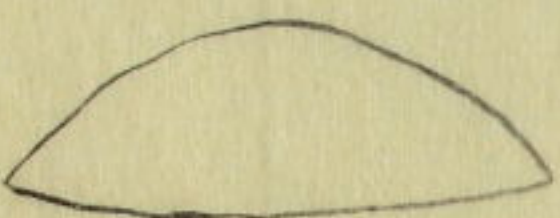
延中ソノコロヨリモミアゲハヤルユヘ下へ細物（繪）
新をヨシ延中を升（繪）をトナル

享保の頃より延中着くぬけおてらむも女のみふを學ぶ
月代をそらを長クあれはまきみてもみ上帯の所を敷
巾の表へ内帯てもみふを學ぶむ室取正徳ノ比よりそ
是延中ころころととどもそむど長クハあり

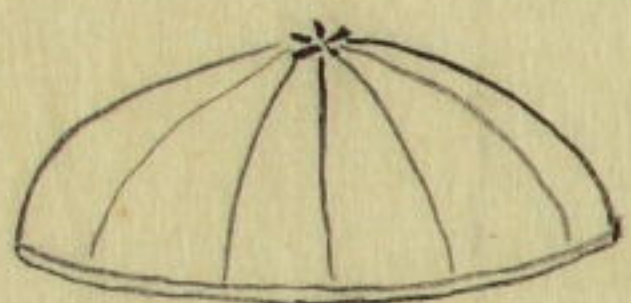


中宿としてを思ひりめん

古来上總笠元禄ヨリ加賀笠
宝永ヨリ針カネフナノ加賀之

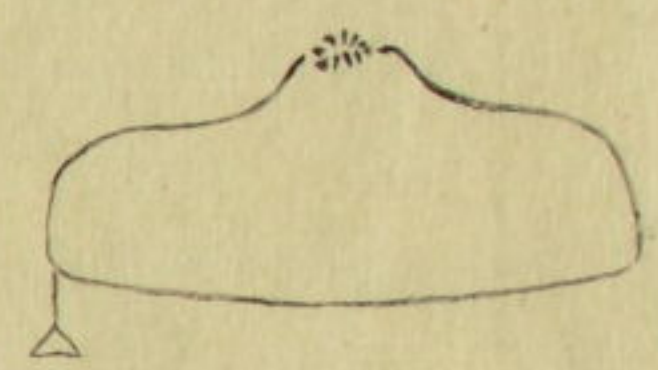


加賀
ヒモワタ入
クケヒモサ
ラシ木メン



ハリガネフナ加賀至極吟味より常ヲイノ女ノカムルモノニアラス
ヒモ太キ丸グケカヤ當モ白シ大ブリニスル享保ノ末元文ノ比ヨ
リ笠ノ前ニシルシニ紅ノ切ニテ目通ヘサゲ物ヲスル延享ノ比
ハ比丘尼中宿トメラレテ往來セザレドモ延享五年ヨリソ
ロト前ノゴトクニサリタリ其コロ女ハ淺草小紋中形ハ
ヤル比丘尼モ中形ノヒトヘモノヲ着ス

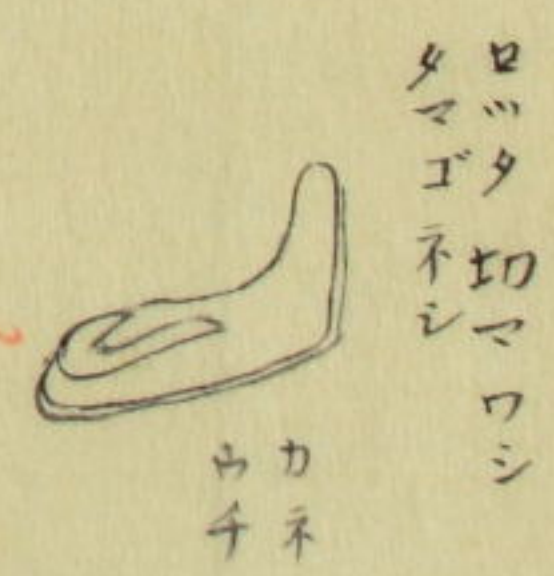
文字
不用



寛延ヨリ木綿ス、竹ニ紋ヲズイブニ小サクツケテ着ス男ハ
ワル比丘尼モ是ヲキタリ比丘尼紋付ヲ着ス初ナリ
宝永ヨリムナ高帯ニスル幅ハアマリ廣カラズ享保ヨリ少シ
幅廣クナル腰帶ハ廣ケ平グケナリ組結ヒ下ゲニハセス

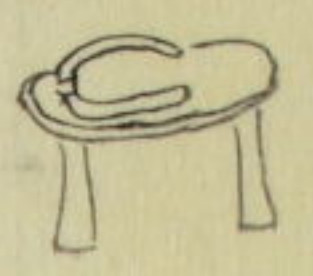


享保ヨリ元文ニ至テ甚シ



ロツタ切マワシ
タマゴネシ
カネ
カネ

○比丘尼雪踏トチ夫尼の皮ソラシキキビスノカクルヤウニシタリ平人ハ不用元
文末ヨリハヤルト



足駄ノ齒如此ミカシトモ鼻緒ハ玉子ネシナリ
塗緒ハハカズ

風俗をあらへて往來する由トハ是れを以て安行を以て寛保御停止トを申す中
以下乃比丘尼古来のことと勅進不出る漸一年の事あり
○夫比丘尼容顏ハ眉をおき齒白く磨きべトを以て白粉を化粧目代を中
々として忌中ト男の月代の如し異神あるもトあり正徳年中中村源左衛
門と云女飛の湯者ありこれ小面より似たる比丘尼の源を命比丘尼ト云名を比丘尼
又宝永ノ以ト鶴と云名をきト比丘尼あり同宿より小鶴と云又人出ト然ト也
宿ト神田トを同宿ノ裏より出火ありト勿論宝永ノ以ト附火の由吟味トす
折中あれハ自火附火の由吟味ありトさふ出火ト怪ト由ト自火やもトあり
是ト方ト也トありト同宿者ト也ト出火ト吟味トありト人彼鶴と
ハ比丘尼ト吟トきトきトてト厨トありト由ト上ト信ト鶴トをト右トと
きト致トせト者ト對ト及トぶト鶴ト中トひトらトきトかトしてト火ト附トのト科ト小
をト火ト罪トふトありト柳トのト事トもト法トをト時トもト出ト来トるト時
法トをト不ト知トをト大ト罪ト行トれトるトはト還ト并ト門トかトらトきトきトるト由ト止

別行
○又宝永ノ以ト鶴と云名をきト比丘尼あり同宿より小鶴と云又人出ト然ト也
宿ト神田トを同宿ノ裏より出火ありト勿論宝永ノ以ト附火の由吟味トす
折中あれハ自火附火の由吟味ありトさふ出火ト怪ト由ト自火やもトあり
是ト方ト也トありト同宿者ト也ト出火ト吟味トありト人彼鶴と
ハ比丘尼ト吟トきトきトてト厨トありト由ト上ト信ト鶴トをト右トと
きト致トせト者ト對ト及トぶト鶴ト中トひトらトきトかトしてト火ト附トのト科ト小
をト火ト罪トふトありト柳トのト事トもト法トをト時トもト出ト来トるト時
法トをト不ト知トをト大ト罪ト行トれトるトはト還ト并ト門トかトらトきトきトるト由ト止

トル

○霊岸嶋 深 大猷院様印代 義彦年中 築之 具岸子 於登上人 開基

四字下

○伊予嶋 河村河 新道 濱町 通入 今 寺 義彦 寺

諸寺引後

○深川 聖光院 法善寺 本坊 寺 馬村 坊 寺

四字下

○瀬戸 物店 天和 寺 江中 寺 寺

トル

○白子 甚多 嶋 坂本 寺 北川 寺 寺

北川平 寺

里

○日中 橋 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○享保 中 寺 神田 寺 白沼 寺 町 寺

トル

○瀬戸 物店 寺 高 寺 南 寺 高 寺

四字下

○寛永 元 甲子 年 寺 山 寺 村 寺

トル

○肥後 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○元文 寺 寺 寺 寺 寺 寺

トル

○南京芝居(大和)上り糸を以てはうり

○芝居衣装ハ宝永のころ結謙(也)令入孺子又七ナリメントミス天鷲絨
然ハ羊天金減重(病)徳打あれども道具立ハ山ミストテスダレ山或ハ
野立浪田家の繪下書てて京名を學びうり正徳享保ニ於て中村
徳七といハ作者(勘三郎)道吳立町亭を始む

トル

○正徳四年繪島及駿初より結衣裳(被)作者

トル

○寛永ノ水木辰ノ巾(ト)以野舞(即)高より下りて丸キヒタイ帽子をけり

漢笠帽子

是より前ハ髪うつらをは紅の地を舞をあらりて後元禄のころ萩
野沢(也)とて京下りの野舞(即)はう帽子を始む是を以てハ帽子と
云又被者惣身べ(ト)て深きう天和年中市川古園十市(始)より元禄
の比古園十市元字金あて給重五百ある定む是高給重の始也(也)後正
徳年中芳沢阿ゆめと云女形乾金千あるト(也)丈子園十市後元名河
老花(ト)云是千ある上ハ給重取上る(三升也拍逆)

徳者高給

トル

○元禄ノ以りて裏新道ハ緋色の干場なり正徳ハ人家百少り享保年中
少りて屋敷野舞(即)屋立並ふ

トル

法名集后上本
三ヶ谷思ト外
題ス二冊アリ

○叔寛永之年より始役者の法名等河老花書集ハ存持を市村竹之丞
元文の比竹子代君様御誕生(也)月字存(左衛門)と記む(法名集后上本二冊アリ)

別行

六月芝居休

○享保六丑年春市川園十市(二代目)大あよりあり依之襖(美)として後地の
芝居(ト)つとめを勤ら御後見して可勤給重(也)あきまの毎年六月申休可
申(ト)き(ト)のあり今ハ是を定とす昔の芝居と今ハ都(也)大ニ異あり○
江戸半右主と云上り元禄年中宇原(左衛門)芝居の向ハ操芝居出しあり
是ハ元肥前太夫(ト)申(ト)永閑(ト)のつきうり門中(也)ハ記士佐よりも古き才子
あり又享保年河老とつと上り出あり半右主ガ才子(也)ハ河老ハ元取川
所出生(也)親ハ天満市十市(ト)云梅前の松年大類(也)様魚(也)用お(也)あ(也)うり
町人あり河老ハ俳名(也)ト如名友十市又名(也)を(也)加(也)と云入り紋ハ丸小横
三ツ引(也)是ハ思(也)を是ハ一流の祖(也)元々の比死を寺(也)築地(也)如(也)地中(也)

小墓あり

貞享の頃よりトテアリ本小田原町より品市有るト云者も之
寛永の頃小山次希と云人形つくりの事やたらを半左史芝居跡として年々
く芝居しつり

貞享よりよりト云事あり加賀が又朗齋と云大ふりたる後肥前
吏出の儀之紀あり

天和二年安宅丸出来長サ三十三尋十二船玉東敷山南光坊大山大院
兩僧勸誘御船あり堀田筑前守解之

享保七室四月廿八日澤左長吏車善七及公事非人車善七を以て後
ん切とあり始のあり

踏大明神曹子谷鬼子母神境因右方よりト云痲瘡の事神傳あり

天和年中菓子店の看板は仙巻糰と大流流と云あり傳り道明ちあり



りしといよめし元禄の頃よりうらま二二三羽の

壺くき木字を失ひよめぬより仙基糰と云判を削て重
言ふありいとを皆中を失ふ

饅頭ハ蜀の諸尊孔明初を作日中をハ塩漬林姑を作塩漬ハ林和諸
の末あり

古来ハまんぢうみせの縁先ハ木馬を以てありあまむと云心を表し
あり元禄の頃

此の頃の事ハ

日神樂を送る用ハ

其形を表し今ハ
たす元禄の頃より初あり享保年中より御停止や多いと云
小席をつくりよそりらんを付てその人形を二ツ或ハ三ツとて又幕
を張るの因ハ鐘太鼓苗の吹物を入て牛車を引り後ハ二

下ル

三間程の大やたいをまつらい牛二疋或ハ三疋或ハ我ガち大形を成る

別行

○町人各様之事貞享年中其ハ夏麻の單羽襖ハいしの帷子いと冬冬上田のつむぎ或ハ羽郡内のふぢり是を智入寺ありもも冬冬常冬冬冬木深布子冬定級を背り是是時時ををいいるる民民もも小小不不奢奢故故温温和和世世上上のの利利もも苦苦ああららをを妻子もも安安くく貴貴いいららいいららいい依依てて賣買ははるるもも此此をを今今日日百百銭の利利をを得得るる先先つつ一一日日のの寄寄ひひははりりとと賣賣のの内内をを高高ををややめめてて又又高高商商出出るる二二月月三三日日のの内内にに高高買買小小出出をを是是にに依依てて人人三三ヶヶ日日五五ヶヶ日日のの買買物物にに悔悔限限りり買買ひひ求求むむ油油取取之之調調ままををととここままるる依依てて高高利利をを賣賣ももありありこれこれ切切れれるる多多くく享享保保のの頃頃よりより世世上上之之者者不不高高人人のの心心ささううとともも夜夜もも元元禄禄以以來來正正徳徳迄迄のの花花簾簾のの世世ををみみるる者者吾吾ああれれババ身身上上ハハ分分限限不不成成小小者者もも好好むむ利利欲欲のの方方智智ををいいふふ

下

敵ば

ららきき多多るるもも此此ハハ金金銀銀ををととららいい温温和和世世上上ををととここああををばばらら人人のの日日々々成成るる

別行

下ル

○寛永より貞享迄五六十間の人の正路ありをを考考ももあありり又又むむささががるる心心もも多多くくあありり元元禄禄よりより正正徳徳のの初初めめ三三十十のの日日のの人人正正路路ああれれもも考考もも多多くくあありり享享保保よりより美美人人心心むむささががるるをを元元々々仁仁のの似似てて不不仁仁儉儉にに似似てて考考もも多多くくあありり正正路路のの人人ももあありりみみななめめ大大名名とといいふふ國國主主以下以下をを下下卑卑をを考考一一とと考考りり誠誠小小世世のの未未成成ああるるのの

免免れれるる心心のの盜盜賊賊のの多多くく是是をを元元ををききひひとと苦苦めめるる未未をを因因るる元元もも多多くくあありり免免れれるる心心のの盜盜賊賊のの多多くく是是をを元元ををききひひとと苦苦めめるる未未をを因因るる

故

科

朝

徳

強

元祿室永の^此惡所の^此極樂の如く^此龍宮界の如くと
いり諸國の^此味先は^此地を^此遊妓伽陵の袖をひく^此遊客の他人百金をついやせ^此我を千金
をついや^此多くと多くついやせ^此以里のきちと^此享保より他人十金を
は^此いせ^此我を五金をついや^此て^此世智糸を元^此心^此得^此元祿の人
の^此惡所の金糸を^此捨^此す^此不捨心あら^此ば^此地^此へ^此是を^此入^此る^此の^此何^此を^此と^此思^此ふ
一り又今の世人の^此心の^此惡所^此あ^此る^此是を^此入^此る^此の^此還^此て^此人の^此程^此と^此思^此ふ
人^此笑^此り^此て^此見^此る^此程^此の^此多^此く^此も^此あ^此る^此是を^此見^此る^此の^此不^此見^此ふ^此不^此知^此

道明寺の河内國の^此寺あり^此然^此る^此干飯を^此道明寺^此住持^此道実筑
前^此一流人と^此成^此す^此死^此所^此へ^此毎^此日^此陰^此膳を^此食^此ふ^此飯を^此干飯^此として引
り^此多^此く^此を^此食^此ふ^此は^此ち^此の名を^此呼^此ぶ

傾城傾國^此唐^此の^此美人の^此を^此日本^此の^此賣女の^此を^此唐^此の^此賣女を^此唐^此の^此妓女と^此す^此○上^此帝^此の^此諸侯の^此仕女あり^此賣女の^此女^此と^此す

賣女の^此波世の^此あ^此め^此美^此目^此よ^此れ^此女^此を^此買^此取^此て^此白^此粉^此紅^此粉^此を^此ぬ^此り^此其^此色^此を増^此
玉^此綾^此羅^此を^此ま^此き^此て^此人^此を^此ほ^此む^此き^此香^此具^此を^此帯^此て^此臭^此氣^此を^此き^此り^此諸^此人^此を^此驚^此かし^此穴
へ^此入^此れ^此一^此生^此を^此何^此を^此ま^此ら^此せ^此或^此ハ^此命^此を^此も^此損^此す^此不^此仁^此ある^此家^此積^此世^此の人
別^此として^此交^此ら^此を^此是^此を^此亡^此ハ^此と^此云^此者^此弟^此忠^此信^此義^此廉^此恥^此の^此ハ^此ッ^此を^此忘^此れ^此る^此人
と^此唐^此人^此を^此戒^此あり

魚の^此一^此片^此の^此餌^此を^此見^此ん^此釣^此の^此有^此る^此を^此し^此ら^此を^此珍^此ふ^此命^此を^此失^此ふ

鳥^此歎^此を^此お^此こ^此穴^此へ^此入^此れ^此多^此く^此を^此もち^此て^此こ^此の^此ら^此め^此ゆ^此ら^此り^此如^此し

傾城^此賣^此女^此小^此道^此付^此モ^此七^此損

主人^此の^此操^此嫌^此を^此憂^此こ^此あ^此ふ

身上^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ

邪^此智^此を^此増^此し^此正^此智^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ

正^此し^此き^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ

孝^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ

人^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ

右^此に^此内^此命^此を^此そ^此こ^此あ^此ふ^此事^此志^此の^此何^此り

夜深^此く^此り^此歎^此入^此行^此とき^此解^此ね^此の^此あ^此め^此又^此ハ^此物^此取^此追^此落^此し^此あ^此ら^此ふ

色て死をるもの何事 心中して死をるもの何事 是れハ驚く 其書を

○御公儀の(吉宗公)御意悪し御法ありて近年少く心中と唱ふものハ

○酒食を過し或ハ瘡毒或ハ眩目虚ありて死をる

○往來駕籠を夜駕籠より多くハ悪者あり是の爲に 死をるもの何事 船を往來するハ慎みあるよりあれとも早船切て 船をる事も何事 送風を舟をるより死をるもの何事 如きはあま

白象

○元文五年御濱御 御所の白象中野と云村より出拜領を奉 象飼科小物入多きハ儉約 付中野の者ハ出拜由ハ飼科付中野 名主 象飼出象飼十六文ツニ賣りてせり後西成の年ハ死すト云 死をるもの何事 大象トありて是文二三尺長廿四寸と大ありお死し動

如御濱にて御所の者常御上より御書を減りて書ひたり依之象彼 飼者を鼻を以て投殺り倭臣を知りて不通と云こと減あり能理非を正 象の糞六牛の如き生きてゆく下を極小洞と云 二云 瘡瘡の薬とを賣りて功を見たり 瘡人も無し賣りて功 淡あり

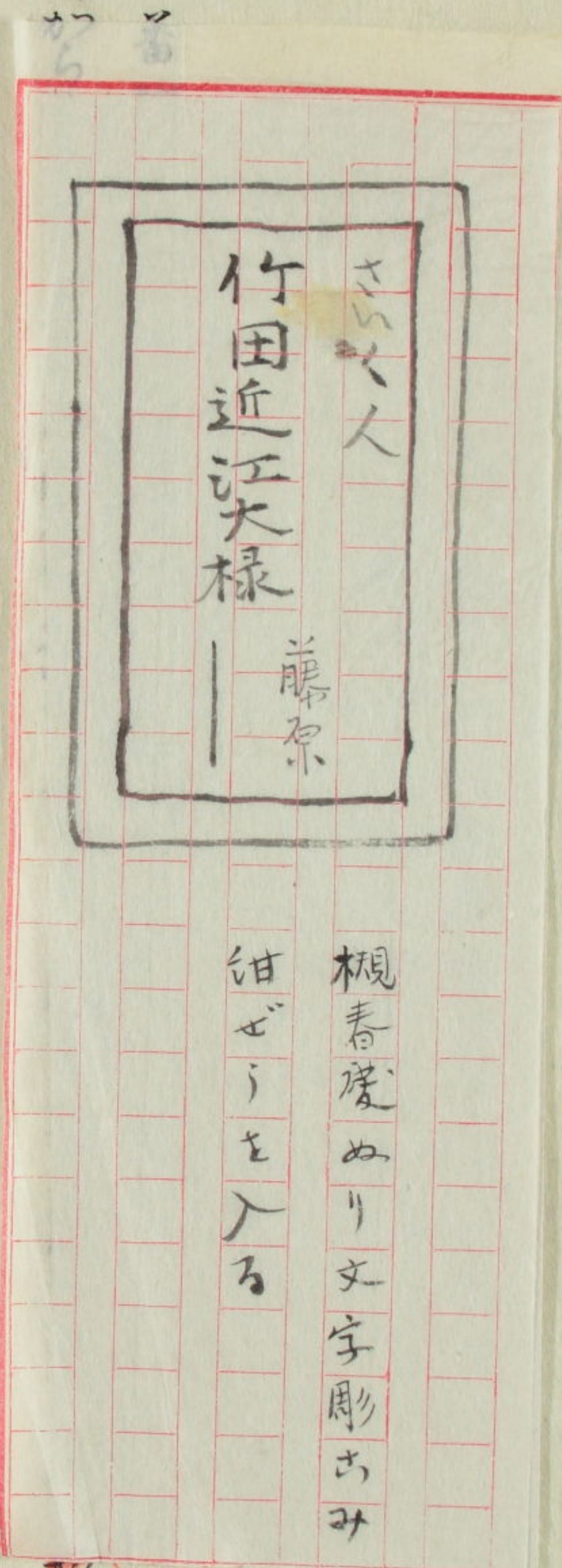
○寛保の江將軍吉宗公御之男從三位右衛門督宗武公近臣小悟て曰元文 分十歳を以て一尺三寸定より依て是此用元通室を築る事御て大申小の不 同 何れを申すと定べきと進り 但徠中あるを用ひて日過不及ふ 不審して曰く夫吉宗公を製する事役人の命し下民 令製然る民小 砂を申して大砂をくら思ひ 極大砂を申して次第 小砂を申して次第 砂を申して次第

くを伴ある近侍は我如き山身あれどもをと下侍の通をさる
不能とて皆感心をしり

竹近江

○寛保元回三月より九月此迄大坂竹田近江大塚堺町勘三郎並其の向
此からり并に子供程を令見之

裏の方左右小竹二本植額を正面小



放す

○五寸斗の子供人形三味線を強く大つみ小つみをうり ○狂言三条小鍛冶
四方後の人形枡弓を射るうり ○狂言化物を遊ぶをいらぬの人形

○春日宮殿灯籠火をおびつる燈をからり ○狂言大塚宮 ○
船のうり機通のうり右貴姓老翁群集を初日よりうりのる

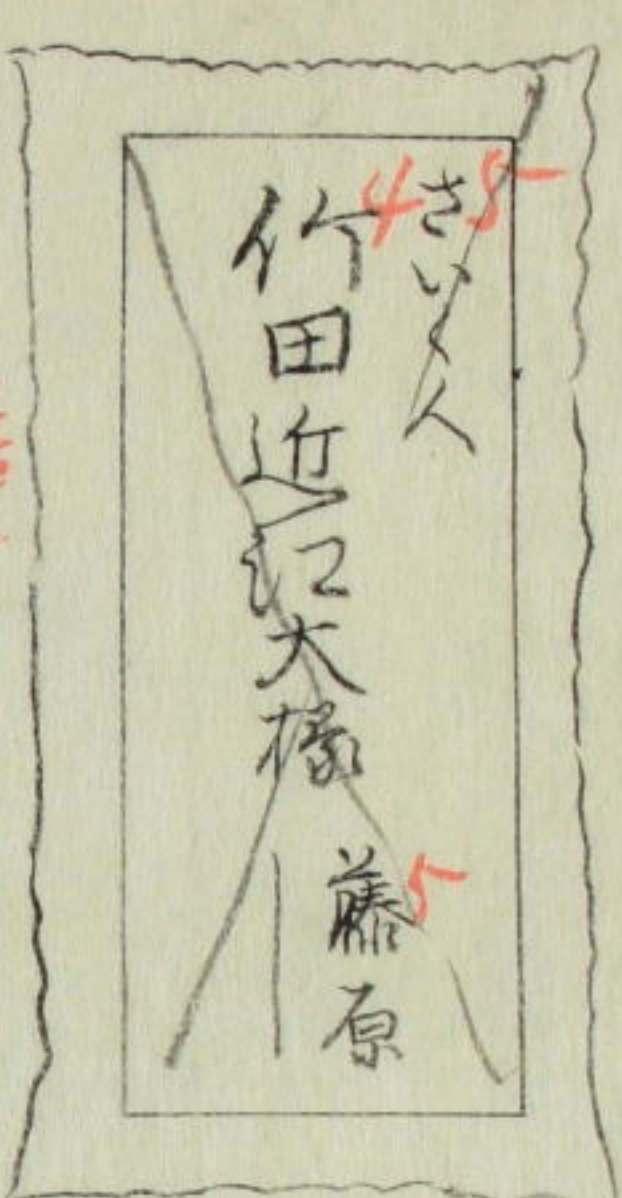
○寛保元回年世上 雑説はゆる又此年をく銭を以て誘ふ又
こあうをおうれと云言葉はゆる踊り止舞子の弦を所くやと

○享保七寅年三月内裏雛七寸以下に穴成帝仕込なる大雛忍びて賣る
此取上らるる上過科之捨費文出是より大雛を尺五寸金を賣る

○寛保二戌年秋明より早き食内止

竹田近江大塚

竹田近江大塚 裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の
裏の方左右の竹二本植額を正面の



番附子供ね 位者をとり
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指
からくり三寸斗の子供人形 指

○五寸斗の子供人形三味線を強く大み小つとをうり
四方装の人形 柳弓を射るうり
○狂言化物をあそびいらぬの人形
○狂言大塚宮
○春日宮殿灯籠火をおづと燈をからり
○狂言大塚宮
○寛保元年世上 雑説はゆる又此年をく銭を以て誘ふ又
ごあうをおうれと云言葉はゆる踊り小信止舞子と弦を
つる内小遊女といふ教をももの多し 依て其の停止
○寛保七寅年三月内裏離七寸以下に穴は帝仕込なる大離
此取上らるる上過科之指貫文出
○寛保二寅年秋明より早き食内
○寛保二寅年秋明より早き食内

二 字	
真菜瓜	六月節より
初茸	八月節より
鮭	八月同日
竹子	四月同日
瓜茄子	五月節より
鯉	五月同日
水鳥	十月同日

有増如斯魚類節前未多付時は又そ後一様物又野菜初出を切らむ
 寛保三寅年五月末其此を賣ふる者有尾法何人神田人戸

一光及紅明送料

○諸寺前の縁方よりを送送にバ同屋仕多り元文二年の頃より多登十
 石極めを有類を賣買師の例の方七八軒あり漸く物何二丁目横

所税町田須田町

○寛保二戌七月雜波理瑞龍寺池中一莖二蓮の花咲く後考之位湖大水
 出四五寸の踏初やふる是を地中水気盈多る此水芋如形異形生と云

別行

○寛保元酉年少も深川橋江の寺小一莖二蓮の花開見物群集せり翌戌
 年大水あり地中の水気上へ如豆異形の水草咲出さるふ審然らば銀
 の水草も異形ゆづり然れども天地の気候又理あさるう何れハ押て云

トル

○寛保三寅祭秋卯大名屋敷留居役の内徳由之銀を借用し
 後露顯して右役人切腹或は人切腹腹の者有之或ハ死罪共為

圓番茶屋

法小納小右の仲り十人余と圓の位圓番茶屋修止被作解用番
 茶屋と云三十年余りこの方流りしてや小出束ありそ其ハ毎之是ハ屋
 敷を振振時ハ物入多子或ハ茶屋或ハ吉原芝居茶を留居會

銅

有之いつとなく屋敷振振お止み留居役の者令之法取右の場場
 光道をもて魚押底の時焼物と名付或ハ小鴨を引或ハ大鯉節二或ハ
 青洲二百疋お引結部等ハ重箱も子其土屋子を様不行跡子
 あり行々依々右の悪もをも巧み出しあり

を得るもの障のさへ送る是を越るといふと物語さるあり越るのみを

兩國橋

延享元五月始ある橋船を柳直る是ハ寛保二壬戌八月一日二日
より吉達大水之兩國橋船多し此大水の節より新大橋西橋尾より
十五より先大同七年など行橋船より甚危し大丸三印を右の舟をふき
地橋を狭くして通路を西橋掛直り成就して後其押舟舟六新地
名町人内中流人河尻宗と行橋善治一往來しむ
母堂桂昌院様御願
掛りてあり

風病

延享元甲子六月申より七八月迄の頃必大小風病をふり了人の四九
十九多人に及ぶ(享保元酉年三月ヨリ凡病添初)

豊作

同九月能勢高田市及河津新被作舟付町人男女鎧笠衣後長福
本年豊作有秋米是石三斗之あり(葉は籾ハ文金もあす)
本居園宮新ふ及子別買上米の炊評定ととも沙糖毛事也

奉行役有徳の町人九人買上の民内新ふ伊勢町成井善三郎小形河村田七
右の茅場町冬米万石新地冬米長年次小綱河天野善右衛門何某新
河津保米多割曰三谷三九節飯田河万石伊多高善被買上米あり
不及力といども公儀の御威光を是を名斗あり又其傳り河津何
某高部修理を更及の仕依り伊米拂付米名斗あり又其傳り河津何
く暫米高買お止みり米又其番の五徳者五十八人買上米被作舟何少
し宛の事也米多きあるは詮方あしきりき被作舟有九斗二
升小あり九人の賣米不及中後五十八人の買米は町奉行封を封を封を不
許貯之千石二子以上の町人も中吟味有者其承之書上り江戸京大坂
宗長埋如新三十日余世名大不強勅十月廿二日
○(此町奉行能勢甚高力及をも
おま) 病氣とて引込り

○天下の御法事心徳年中上學増上寺とも小栗部之享保年中吉宗

公千部を御法子有り 有章院様御代 文照院様の御三四忌の節増上り
其為御部御作有者御飯五千石並多し

享保御護金
同九月公方吉宗公御隠居廿五西の丸へ御移り 家重公御中丸を為入 吉宗公
を御稱大御所様 家重公を御稱上様 將軍宣下の後御稱公方様此付
御讓金二倍何百金あり 同四その御中之家御門在御代法役人御讓物御等
御刀御多御をびくしき事ありと御

延享三丙寅三月中旬御得済 御出子年以來金銀貸借先自より御毎月
裁許あり七ヶ年以來御二季の裁許ありより七月切重御作付十二月
右切重御持系御極月延引御輩御御多御成り依て御代御不宣

俳諧
御誹諧ハ貞享の口芭蕉大 流行を門才を角嵐を 御少し下御あり併
口古面白く云 御世ふよと世よふの又五色墨流と云ハ点式五色の墨を
以てありあり御沾徳沾洲青娥一品御流之夕凡十御人上り又享保
の御素人少く百里白雲 墨之只尺御所上り 享保末より大名御此道を行

む人出来り町人百姓尤多し七八も上りあり 蔓草屋の墨洲と云ハ尤風流
あり者也 墨居も此少く市川團十郎 沢村宗十郎上りあり是
御享保末より延享御の内御大名 内若御後書安後對馬御上り也
御旗本御大勢有り

前句付
貞享御より正徳享保の末まで町々小前句付冠付と云 占者より題を出して
つぎを宜しハ御賞つらり高御を 御御小甲乙者て出を占者を 叔月と云
御水墨ハいらぬ事 ありとも
流りの御御如御出重あり 前句の仕方 御御何千御百と
記又 御科 十六御

下字
△あらぬ 御こうふり
△あらぬ 御いぬこひの細作り
△にわい 御をん
△あらぬ事 御うあ
△あらぬ事 御入と御

何某
御御
御御
御御

雛(有)の元来是ハ博奕ノ取巧出ル多ク有リ

三下

△大賽の目ハ一の裏ハ六合テ七ツ二の裏ハ九合テ七ツ三の裏ハ四合
テ七ツ都合ニ七七一あり一より六ニサハアタラヌモノナルニ増テセ
一アタルマシ其上三勾組合タレハ九五百六百ニモナルヘシ
タラハハハナリ當ルハ大ニ間違ナリ今日本橋其外所高札場ニ
モ三笠ノ点ハ最貴而法度ヲ由別ニ御高札出シラミルヘシ

地付

○享保八年の比地口附と云こぞ付はる是ハ長者より題もわさど附るもの思付

三下

書を書つるを長者其宜を取勝と云
褒美或ハ物物望相道具多葉新入等也地付早に絵を書き
その言葉を書きを長者其宜を取勝と云

梅花を
何々に
あはは
うせは



赤付

○その後地口附御停止也又寛保元年の冬ふを付とて付はる長者より題

三下

赤イものハ
四角ふものハ
赤イものハ
黒イものハ
ぐるものハ
ぐるものハ
車てをる物也

加ふあるふ十種をツツ書てしるもありとも心付る題へ付る料十細
を番勝る也またた々トル是も赤葉紙も有様たとへハ

赤イものハ
黒イものハ
ぐるものハ
ぐるものハ
車てをる物也
久七元結の尺八の音免

△今様ある物ハ付ハ今ハ七八才
の小児も云々此時代の是の
歌

モジリ

○享保十年のモジリト云却てえや字モジリ本モジリハ両説アリ是ハ

近所の俳諧トドスル人々トモ甲乙モ分ハハ懐紙をツカフス五人三人

赤いものハ
黒いものハ
ぐるものハ
ぐるものハ
車てをる物也

勝ハ懐紙をツカフス五人三人

七人^{（みても）}一人^{（かまひかし）}敷^{（し）}カマ^{（を）}トシ^{（を）}先^{（を）}題^{（を）}出^{（し）}一^{（を）}句^{（を）}附^{（る）}一^{（を）}句^{（を）}の^{（の）}終^{（り）}又^{（を）}題^{（す）}一^{（を）}句^{（を）}
 今^{（の）}の^{（時）}の^{（に）}付^{（け）}て

字モジリ 題丸カブリ

字モジリ 題丸カブリ

又^{（を）}改^{（を）}を^{（を）}題^{（を）}し^{（て）}う^{（け）}て^{（し）}下^{（五）}字^{（を）}を^{（を）}別^{（を）}よ^{（を）}云^{（い）}題^{（す）}

ムスメノ子

髪梳
カミスイテイル

前^{（と）}同^{（し）}

本モジリ 題年市 △白アリ 杵アリ 兎モアリ

題兎モアリ 細長イ耳ヲアラレニキル

此外^{（に）}レ^{（リ）}五^{（五）}字^{（字）}等^{（等）}あ^{（い）}れ^{（し）}七^{（七）}果^{（果）}す^{（す）}文^{（文）}字^{（字）}理^{（理）}と^{（と）}云^{（い）}て^{（可）}也^{（也）}

國書刊行會

地中^{（中）}考^{（考）}初^{（初）}め^{（め）}の^{（の）}類^{（類）}と^{（と）}あり^{（あり）}け^{（け）}九^{（九）}た^{（た）}る^{（る）}は^{（は）}福^{（福）}多^{（多）}なる^{（る）}丈^{（丈）}夫^{（夫）}の^{（の）}浪^{（浪）}人^{（人）}お^{（お）}り^{（り）}と^{（と）}云^{（い）}ふ^{（ふ）}

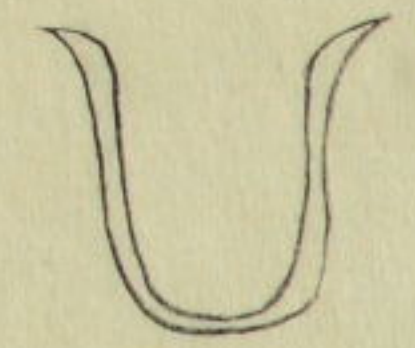
寛文^{（寛）}七^{（七）}丁^{（丁）}未^{（未）}年^{（年）} 信^{（信）}士^{（士）} 和^{（和）}泉^{（泉）}屋^{（屋）}九^{（九）}た^{（た）}る^{（る）}
 六月三日 是^{（是）}ハ^{（ハ）}ナ^{（ナ）}ナ^{（ナ）}ニ^{（ニ）}記^{（記）}ス

筭^{（筭）} △明^{（明）}曆^{（曆）}の^{（の）}遠^{（遠）}ハ^{（ハ）}女^{（女）}の^{（の）}多^{（多）}ク^{（ク）}ハ^{（ハ）}鯨^{（鯨）}の^{（の）}棒^{（棒）}々^{（々）}と^{（と）}云^{（い）}ふ^{（ふ）}也^{（也）} 寛^{（寛）}文^{（文）}の^{（の）}こ^{（こ）}ろ^{（ろ）}より^{（より）}鬘^{（鬘）}甲^{（甲）}を^{（を）}人^{（人）}も^{（も）}巧^{（巧）}に^{（に）}髪^{（髪）}を^{（を）}束^{（束）}ル^{（ル）}也^{（也）} 是^{（是）}ハ^{（ハ）}内^{（内）}室^{（室）}ノ^{（ノ）}下^{（下）}女^{（女）}ハ^{（ハ）}か^{（か）}う^{（う）}が^{（が）}い^{（い）}か^{（か）}る^{（る）}也^{（也）} 早^{（早）}正^{（正）}徳^{（徳）}の^{（の）}結^{（結）}ハ^{（ハ）}下^{（下）}女^{（女）}も^{（も）}鬘^{（鬘）}甲^{（甲）}を^{（を）}さ^{（さ）}し^{（し）}て^{（て）}結^{（結）}ス^{（ス）}也^{（也）} 是^{（是）}ハ^{（ハ）}時^{（時）}の^{（の）}先^{（先）}を^{（を）}及^{（及）}一^{（一）}角^{（角）}也^{（也）}



宝永マデ
カリノ如シ

髪



カウカイノサキ如斯
正徳ノ比若キ女ハカ
リ髪凡ヲ用ユ



古風ハカタワケノ元結上ハ
ムスビ上タリ枕ヲ用ユ



享保ヨリカクワケ下ハ
結下ケル或ハ内へ結フ



七人^{（みても）}うち一人^{（かまひかし）}先^{（つ）}題^{（を）}出し^{（し）}一句^{（を）}附^{（る）}一句^{（の）}終り^{（を）}又^{（を）}題^{（し）}して
 つける^{（つ）}今の^{（の）}修^{（け）}け^{（を）}

題	丸	カ	ブ	リ
本	子	ジ	リ	
題	丸	カ	ブ	リ
本	子	ジ	リ	

完蔵始
 △夫江戸完蔵ノ始ハ明治二年丙申年本町三丁目和泉屋九左衛門云
 号服をり始^{（し）}て^{（は）}以^{（て）}皆^{（は）}人^{（は）}ヤクカイヲナシケル翌丁酉ノ火災^{（は）}御城^{（は）}焼失^{（す）}
 たり^{（し）}彼^{（は）}九左衛門が^{（は）}因^{（り）}て^{（は）}完花大洞法^{（は）}あり^{（し）}多^{（く）}を^{（は）}そ^{（の）}世^{（に）}上^{（り）}と^{（し）}る^{（も）}
 （此九左衛門ト云人は古ノ筆^{（記）}一^{（冊）}あり^{（し）}人の母方の祖父也と書多^{（く）}を^{（は）}東本願寺^{（に）}納^{（め）}り^{（し）}）

地中^{（に）}穿^{（り）}たる^{（は）}花^{（と）}あり^{（し）}は^{（は）}九左衛門^{（は）}は^{（は）}福^{（多）}なる^{（は）}丈夫^{（の）}浪人^{（なり）}と^{（し）}云^{（ふ）}
 寛文七丁未年 信士 和泉屋九左衛門
 六月三日 是ハ千ナニ記ス

筭^{（ト）}明曆^{（の）}頃^{（は）}遠^{（く）}ハ女^{（の）}の^{（は）}多^{（く）}ハ鯨^{（の）}棒^{（を）}う^{（ぐ）}也^{（也）}寛文^{（の）}ころ^{（は）}より^{（は）}鼈^{（甲）}
 髪^{（は）}風俗^{（を）}を^{（は）}人^{（も）}巧^{（み）}に^{（な）}り^{（し）}片^{（は）}也^{（也）}是^{（ハ）}因^{（り）}て^{（は）}下^{（女）}ハ^{（は）}か^{（う）}が^{（い）}が^{（ら）}も^{（も）}早^{（に）}正^{（徳）}の^{（は）}
 頃^{（は）}下^{（女）}も^{（は）}鼈^{（甲）}を^{（は）}さ^{（し）}り^{（し）}結^{（也）}也^{（也）}此^{（の）}頃^{（は）}より^{（は）}か^{（い）}の^{（は）}先^{（を）}を^{（は）}及^{（し）}角^{（を）}を^{（は）}
 結^{（ふ）}



宝永マデ
 カリノ如シ



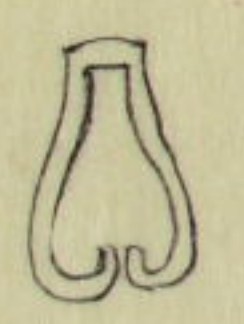
カウカイノサキ如斯
 正徳ノ比若キ女ハカ
 リ風ヲ用ユ



古風ハカタワケノ元結上ハ
 ハスビ上タリ枕ヲ用ユ



享保ヨリカクワケ下ハ
 結ニ下ケル或ハ内へ結フ



○宝永迄ハ結ビ髪結ビ遊女を専とともみ上は付始る



長ク下ケル下へ
引出スタブ
ガシ
元文ヨリ百金口ヘトリ上テ
結フ目ラツリ上ルタ
ブモナシ



享保中コロマテ中アシ
ニ結ブ丸タブカシ短シ

○延宝貞享ノ比ヨリ遊女洗髪ヲ水ヲ
シボリテ髪先キラ紅羽ニ重ニテ包テ
下ケタリ元禄ヨリ結ヒ上ル

延宝まてハ有合の結切て包むあり元禄より白キ晒し木綿少しなり
其後むきふ是風延享の比用田その外此田も多し何れ元禄結髪
く多きを良とを
愚業
△崎田ト云風ハ氣急の比駿州崎田の駿旅籠屋の女始めては風結
下

別行
字

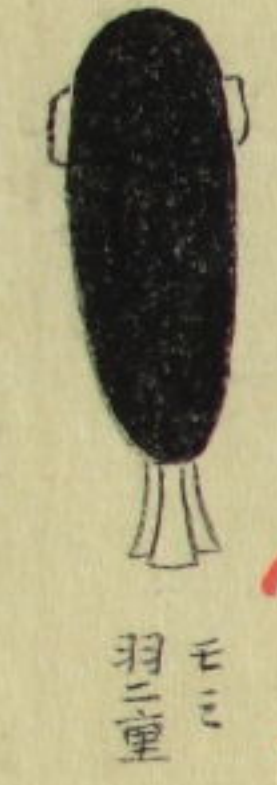
下界多風ありしをいつら風ふ他今ハ高貴の娘も皆は風あり
結心と云風あり宝永の始ふ大坂より結心漢と云是女形なり始て
髪を大輪小結より是風を結心と云後立結心結心又云布ト云
又元禄の比より末吉原の遊女結心始て大輪小結びては風流あり



△此風天和頃ノ本ニ見ユ
若手ノ傾城買風ナリ



天和頃ノ傾城ノ全盛
ニミユ



モミ
羽三童

男女心の如きハ形トル頭コも然レハ形ハ恥ケレ其レ心レを頭レをレ如し多
 ちありて寛文の頃男伊達もよくとも勇氣のあきまうして強きを
 えとを敵も敵も多し結ひしれども内していつらうを内ふ仁心の
 至て和ヤウラみあり享保末より髪カミの結ひすたじやくよくして志もきやう
 なくみ寛保以来ハ根ハ和ハふ見ハざるハづくハいふ見ハ是皆勇氣
 りて仁心あく人邪見あり多し印形頭ハも是亦あま事也女ハ柔弱ハ
 若しうらぶ多し柔和をよとを然る邪見ありて髪形ふつらハを
 如何ぞや心のきつめあきまを起る寛保の頃頃よりいよく甚仁のそ
 るはけあきま



寛延ヨリタブ短シヒナラ横へ出ス片
 ワゲノ尻ヲ上ル櫛カウガヘ大ナリ銀ノ
 カンザシヲ用エケンドンナルナレドモ
 前ヨリハシヤント見ユ

男女此髪時々愛ル事

上古は髪ハ付油或ハハこき元結ハと云ハこやあハ老若共ハ胡麻油
 少ハてハ梳ハてハこよハ元結ハてハ結ハり月代ハ織田信長公ハの時ハより多ハく
 そり多ハりあハ不ハ殊ハ有ハ髪ハなり麻上下ハも時代ハよりハ信ハも三間柄
 小ハ多ハり



蟬折トテ
 ハヤル
 元禄頃御旗本
 ハ何レモ合セビ
 ナナリ

寛永
 頃如斯

寛文ノ頃黒糸ニテ
 髪ヲ結コトハヤル好色
 ナル者ニアリ

貞享ノコロスキ油ニテスキ毛筋ヲ
 通シテ奇麗ニ結申ソリナシ入髪
 モナシ





上ルリ大夫
江戸半大夫ハハ
ハケ長タテカケト云
中ソリ有宝永年中



享保未元文始
マテ此風ハヤル
入カミナリ



元文元年ヨリ上方上ルリ大夫ノ髪ノ風
ヲ学ヒテ油ニテ堅メ毛筋ハレノナシ
元結少シ巻入カミナリ入都古路
凡トモ文金風トモ云



享保ノ比辰松八郎兵衛ト云人形ツカイ
此風ニ結フ辰松風トテ又ハヤル

○芝有賣日傭取ナド正徳迄此風ヲ
用ユ三折カヘシト云元結一寸巻マゲ
一寸ハケ先一寸三ツ折ル故ナリ



○元禄始中村傳九郎イトビ
此風ヲ始ム後甥ニ傳セト
云者ナマシメント云風ニナラ
ス江戸半大夫カ風ヲダシ直
シタルモノカ



元禄頃材木屋風ナリ
ツコミト云中ソリアリ



髪ノ根元ユルク
シテトル

右の外色々髪 揚髪者もさきどもひつきり 若紫の致を所あり 國
々大名の家中ハそ家々の風儀古来より 髪山家信長ハ心旗ハ元と
可も物好き可人百姓の若き族なをそ事あり 信臣
女中も物好き折々超るもの也 上古よりいワゲをよとを 解
るる別々ハ髪髪ハあふたり 解
り袖ハ吹田あふり ちまら節上とあり



延享年中此風ハヤルタグラナクシテ横ニピンヲ開カセ
マケナイサク百會イタギキへ上テ結ヨリヨゴレサ
ルヲ第一トス

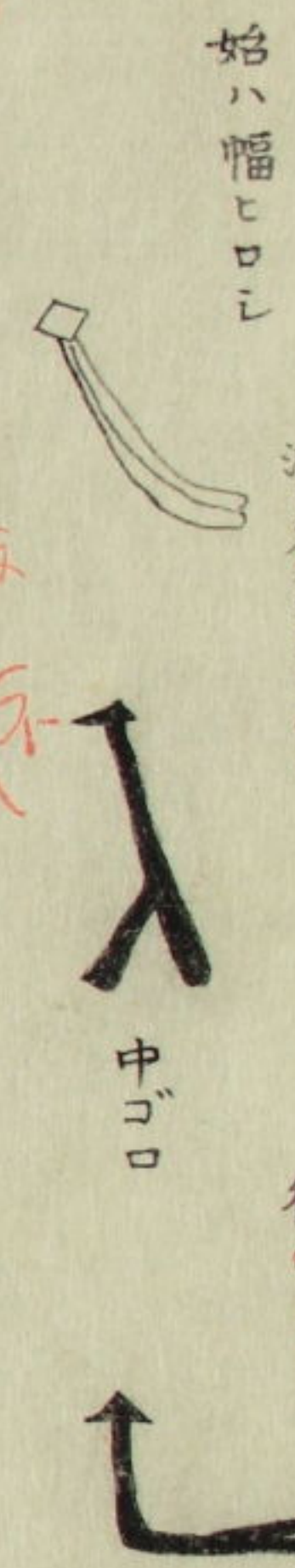


辰松シマダ
享保年中
ハヤル

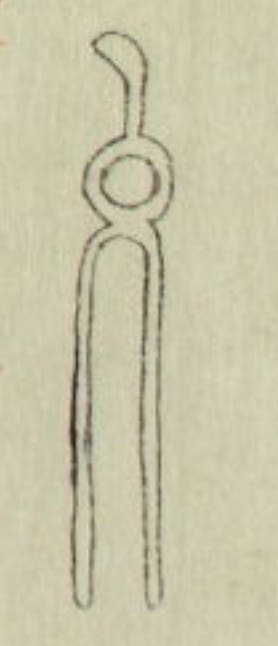


始ハ幅ヒロシ
油カタカミラガル
後クナル
享保ノ末ヨリ延享迄ハヤルピンカツラ
古来ナシ宝永比ヨリ始ル

青桐宝永ヨリ後ニ出ル可考
享保頃ヨリカンザシト名付ル物



元文寛保ノ頃ノ舞子金銀ノ梅枝ニ色紙短冊ヲ付テサス往
来スルハ音ノスルヤウニコシラヘタリ延享元年金銀ノ御筭カンザ
シ堅ク御停止其後象牙ツノベツカウ錫等ヲテロモラヘサス寛延
ヨリ御停止ニカマワスサスナリ



ノ高下
其後木の薄柳ハ明暦年中迄ハ大名の奥方
敬電甲ハ不用遊女トモシケレバ御鯨の棒
元禄の比ヨリ世上活達
極品下享保頃
敬電甲の上品五兩七兩



トナル依之常躰の女求ニ不及カ木の梯ニ色々の時繪切金等ヲカセ百疋
二百疋ヲ求ムレテ寛保年中ヨリ細工人ニ上手出来テ水牛の色
敬電甲の黒斑ヲ入テ上敬電甲の賣道モ始ハ廿目ホドモ致シケル
梯筭トモニ上手ニ似セタリ
心徳の頃厚ク木ノ流行棟金銀粉ニテイソカケラセタリ甚宜
見ヘタリ享保ニ至テ木梯大方薄手ニ成リ皆時繪有リ元文中ヨリ
象牙ノ梯カウガイノヤル男女トモ身の飾リ奢リハ享保以来甚
元禄ヨリ心徳迄廿余年の間ハ世上繁榮ヨリ奢リ民奢チ不
享保以来上御儉約第一ニ被遊トイヘトモ下の奢上古甚し考
享保年中ヨリ儉約ヨリトモ米穀多ク諸色雜用下直故
朝夕イトナミ心安カリ故身奢リタリト見
○伽羅の油ハ古来カシ寛永ノ末ニ神明前ニセムニ表たると云者花
の露ト云薬油を製ス面部のふきかおより面ツヤを付る白油

伽羅油

三子下

大坂落城の時本村長門も成河内着て討死し必死を極め首を切られし
井伊掃部頭内安藤 伽羅 胡麻の油 煎髪 家康公其必死極めたるを感し
長和末村を討 多しにして印褒美の印詞ありし事 諸書少しの遠い所は伽羅の
油の始ありし

油店ノ祖

寛文年中旧本村家所奉丁目へより尻方中村数馬 伽羅油の見世を出さず
し前ニ稲所へ谷崎よりといふ女方油見世を出さず是油をの元祖
とし少々席を一々進ハ又少しす好ましく此武士の油を介れども所
人百姓ハ油元結を不用儀を遠方にも買ふ事久を用の席 油を
求めふ事ハ正徳の 蛤貝小巻あり入らぬ入曲物五あり

中村 数馬

上油 壹五 斤代廿二文 極上白白油 壹五 斤代廿六文
極上 馬白油 壹五 斤代四拾文

右ノ角ノ所賣ニ是買人多ク旬端蠟ハ十直あり而ハ極吟味致し唐
貝を入以梅花 結ハ直に致し直ニ 宝永年中より 髪結席を晒臘

斗の油をつらあり 十五あり百二三十銭也 長くして残小包正徳より
世上蛤貝を不用皆く包紙あり油も席あり 四あり五ありと云 價 買半或ハ
五十五或ハ百文ハ十四あり賣あり

○宝永より油元結の人世多く出たり元禄前より元結引玉と云とも 買入
稀あり 四多くあり

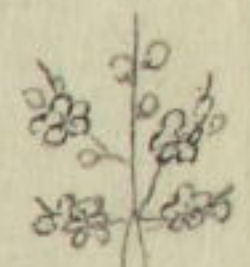
○女子此掃箒寛文の 類ありその後髪甲の落く馬きをとり出さず
いさ或ハけられ雪あはれを細ふせを 極上せり 後麻の角を獲

極上 乾日 掃箒と云 上品 極上元禄年中高級細工之 銀を
角切ぐの四或ハ丸の因 種 級を剛をうしうして 髪甲の取ふ

極の極も 取ふて 梅の枝或ハ唐草あををうし かのやうふはあつり
重き也 髪甲もとて 後ハ不用 享保末より びいどろの 并をうす 茶の軸のや

うりして 五色の 結を入り 後ハ びいどろを 掃りて とうびいどろを
元文中 中三味線 根緒 けすんむを びいどろ かつがいの

この如く格へうぐいしを又元結を糸を結る



貞享天和迄ハ鶴の腰骨のうぐいし最上あり享保よりハ倍を

女ハ不用老母など因あり元文の馬の骨を鶴のようハ格價十涉位

る田舎出の下女あど用る降津香或ハ竹ハ銀箔を並ある筈も付あり下

府繪掃箒の類享保より延享まで多く仕出

享保八九年の掃箒三ツ一紋一掃其ハ女子小道具を現金掛

十九文店

て後あり可くけて上物をも並べをき廿八文一通只十九文或ハ十

三文一箇帯粒多並べ小口は多將茶碗三味線道具鼻吹入

結ハ魚塩物きせる後刺刀人取馬の類も右の價より

少くも利ふ成るもの何れも並きり賣り見物の人多く珍しき由

潤人多くいふ鯨骨一あり

三并 現金安賣掛直

○現金安賣掛直一根本元元禄年中越後屋八筋左の云号級や町を仲

るもこのも此ありこれより河町本戸際小間口ハ物ハ多新十町など

小住ハ細那内棧苗本跡漆の類を仕上物ハ一上物ハ本町を潤る

あり然るも町人男女共衣裳能き物ハ止り解き帯妻の

あれハ年終出する能那内を人ハ求め多右越後屋ハあきあ小

那内寺の安物多く仕入多れハ出帯格ハ別下馬ハ人ハ越後屋ハ

る大鯨骨のようハ見ゆる後ハ具負出きて同直販少くも越後屋

て大鯨骨を享保六年焼失して呉橋店ハ成る地ハ店通室町三丁

目角道一見世あり切れたの方面ハ六七番程寛保三ノ度廣る本跡居元

文五年東ノ十間布と廣る于後家城ハ伊豆院日富山日塔ノ家承より

現金掛直ありとあり若谷川町ハ若谷日如格奉丁自白本や皆ハ越後

小原ハ享保十年本町越後屋新屋出元文の通所ハ本町二丁目

番字ハ享保九年延享元年迄ハ出正徳年中尾張所賣屋龜屋濱田

春 此等享保の事見附の略元文以来傳馬河大初延享二年
本郷伊豆花十一屋の享保年中芝四國町産出見世元文中
以後は類軒も出たれども中々越後屋小不及

△白木やハ古来九尺店小多物同倉ありき世を多く仕込て利を
二得たりは子別傳あり

△富曆元年大丸善清成乾大丸八元と少き自拭店を有りし
借金多くとも角も月上まづく今より五代の祖妻子を捨
て上方へ欠るを祇宗川を登船を喰ふとき少き蟬蛇足の上
小登り拂へバ又の初事初合と常々昆州門を信傳を此付き
つと思案を極め又江戸へ取て返し同倉向きへ取を立借金を云

下 沢夫より身上取直し大見世とありありと借る人より家
至會新道より、其家の娘の今ハ殆余を存命を借るりと
伏見屋産る物諸あり享保の始の事あり

樽割
又物類ハ現金安うり掛直あり諸合奏切悪あり取直と申也
名産仁丸丸元祖元文元文小出と又二年の後本郷河並女ヶ京
小名ごや久次と仁丸丸小出らむ大商賣大小はる久次宝曆
八年七月よりより河へ店をわす

○前より酒樽割樽割と一樽賣の代物割を以て奉合或合の山賣
を或ハ上酒より次酒に價下直書付を回しより出るとも尚分
斗少き赤い外の酒店かやうやうあり元文元年強倉川岸豊崎屋
と云酒見世を大に介より樽割直賣多り毎宜樽十十を小
賣ありて明らむと小酒ハ元直販を樽をさうらり子以樽賣あり
或成子よりさうらり子仕をみる片ん世も豆府商作の酒店を田樂を
やく豆府商一丁を十四小切り買ひ大きあり豆府商ハ一賣らむ
豆府商丁より廿八文是も元直販少味嗜も人も嗜り物ありはれど
も酒のゆくを肝要とまき田樂を大きき安く見世酒も多かつき安く

賣入（寄附） 賣入の前後 商人（中） 馬士駕籠者船（頭） 日備倉（類） の類多くして
 門前の賣物を下しをきく（酒） 酒をのむこれよりして堅菜（葉） を求めんと思ふ人
 皆（豊） 豊島屋が元世先へ移る（頭） 頭のものゆくも自ら見世先人多き思（住） 住
 車の人にも多き内にていそいで解留ありと所法を後より格賣成ハ五斗
 三斗の圓格を求（子） 子 寛保の味ハ大府の内用（程） 程を求 作付（程） 程
 飛小没人中の寄入人も必そ豊島屋の格あきりあり夫更程河田谷者心
 中（香） 香 小石川（香） 香 少川町辺の格あきりある方を昔もせど少く向車力馬
 足少く後送る所の酒屋（子） 子 格あきりある酒より格を評判を得り
 新堀新川の酒屋も金廻り豊島屋ハ元直販を引ても豊島屋へ
 後送る何（送） 送 酒屋も格あきりある間酒も寄入を借つて是の形次第
 酒をこききあきり格あきり借入も酒屋も格あきりある十日昔（年） 年
 まき酒をハ格あきり直販格別（引） 引下が豊島屋送るふ一ありの内六飲を
 ともせり 格あきり格あきり後追隣ハ酒屋も格あきりあると云ふ事

豊島屋（不及） 不及 是格酒油ハ直販一安賣の元祖あり
 寛保年中日本橋南二丁目西の新道角一現金安賣掛直販の相（桐） 桐
 相見ゆかより少く安賣一と云ふ物要一
 元文年中安賣小澤物（類） 類 日光物（馬） 馬 現金安賣より見世出さ
 墨筆（類） 類 酒屋ハ寄入格あきりある格あきり安賣の代酒札（子） 子 子
 直販物え不用（子） 子
 延享二家所三丁目一越（後） 後 東を出さり安賣掛直販ハかより少く安
 一（西） 西 直販物え不用（子） 子
 今ハ本町二丁目ハうつさ
 右の寄入（目） 目 寄入の表方札格あきり格あきり入中んが安賣札（早） 早 有之
 多とも不（守） 守 知めことふあきり安賣札（早） 早 の事ハ家永（早） 早 有之
 有之 西橋も有る寛保より二年札（早） 早 有之 有之 有之 有之 有之

○家承初中その端色を直に買入るのことも有り思ふに用弁ど
くを悦び之を承買あざらぬと申すは是の儀の御金少く多く
なり或家町人百姓とも少多銀多きとあれは出入入るも重
銀のより田も過あり享保三年の儀は儉約厳しく被視作依之自然と
公儀は御金絶てなかり自然と金銀ひびきくは諸商は應年
申中り御金少く金を一箇と見合を内元もなき有り候は儉約
されども不及これより買べきものも不測の間合も時代あり一向高買
といふ事ありぬ明地明地店仕家承場所宜敷所多きあり
場所の店賃安き所といふなり我儀ふけねあり少も元をこせ買入
を介りたりとこれ御高買を由諸元互取きのづも素金よき
候は之も直に石買方柳直あり此より御金有り然れども米なり直あり
町市より町人も御金有りつきなり
○正徳此より五節句の御金も切れは此有て持てる商人は大利を得

連葉高

是は人正路ありてお例を不違お事半道奉里の由へと尋ねて
依之古来より五節句の入用物書を連葉高いと云は連葉高は四五節句
賣切ときは一葉十銭九銭と賣つり多き自ハ半銭も不成切川一打込
あまひぬ享保よりいある付ハあるありきあり候は調りぬ五節句の
用物も多し仕込五節句物ありより多し候は調りぬ五節句の
ありき入合あり候はあれ候は危角御ふあはれ多くハ仕込を依て御年
よりきれものあり
○天和貞享は町人ハ方々奢りをせど高買多くもせと後世も苦言を
教ふと申し
○元禄の頃より町人を多し然れども金銀多し利倍多し心上品あり
○享保の頃より町人甚奢りつり物多き由利倍多し由奢りぬへらしあり者ハ
身上をつり御金有り依之心甚下品あり多し△小人のころ下をみざる
みたりらむと後御金をなま△君子豊多しと不奢小人ハ御金有りゆりあり

トニ

どと云り 滅小天和貞喜の町人の君子の心少ハ云下 喜保以来の所
人の小人の中の小人あるべし

男伊達

○西保慶安の江戸中武家不乃中町人とも小判類
 依て男伊達と云ふは伊達と云ふ人の御仙巻が士多ハ人の目主衣
 町人とも武扁を立切喧嘩愛ふ所ハ大小の神祇廻を
 名義町人とも一つは組合何人とも云ふを不知又白柄廻
 白一糸切多ぶを取色の用心一を紙隔面白綿入事
 長き大小常し柄系下緒何れも白一皮道者流ゆる
 多事を死とも或ハ菓子や酒や茶や事も宜後
 子時今日の掛ぬると云商人不苦いと程
 いかい云云ときも此を身上仕舞程ありんが
 て云云云云と云ふは人の喰物多しと云
 程小廻
 一宿小廻
 又ハ三里のサ下
 下下
 流ゆる
 宜後
 程
 不苦いと
 程
 ありんが
 云云と云ふ
 人の喰物多しと云
 云云と云ふは

慶長金百足或ハ赤もあげり先以過か

立腹も又他人をもしふりりも

命を捨ても及故

仲入をもしき

仲入をもしき

別度

二十年

解由

寛延年中

寛保始

古来の風流也

○寛永十六年迄の武家の格別町人百姓とも衣服相違あり女も町人
の妻あはれハ頭之正保書事年々キニテ軽キ負家の妻娘

家一寺公に出る次あり二立身し上方の御服をも拜領し我が家
も右の拜領を著し見物山祝儀ありも一ツニツ有るものを
多し相ふ自ら世上の女子目を著せ有徳家の妻あり自ら書を拜
領物のころくあらく右の御服を忘れり然れども数多く
著し直あるとも下女ハ夏冬を衣のまれ者も明暦三年酉
年大失事江戸御城焼失を以付 養正院殿十七歳の御歳日
御粥を被下り 鷹町人の妻娘為宣此粥を被せり 養正院の
妻女ハ不及ぬせり寛文年中より男女の衣服せりをぐる歌
馬あらばいづらはねん丑の年ぬもなかり寛文元年
七字下

石川兵衛

○寛文中より寛文子此の袖を着る地白編子或ハ紺緋紫の結縷子
惣地編子尤結縷縷小舟町自石川と云者の妻者あり女常小
女編子ちりん編子の教を著るせんき所ハ純子縷子金入等を著る
常憲院殿上野一始て 御歳の時延宝年中彼の六ヶ御成をぬき小黒門前
小棧敷をわけ御着を以て 養正院殿を著る蘭書 左右小女の
切禿人緋編緋の大振袖を著せ其申の御通りの御着を著る
て拜せり是 東照宮御地界以後漸 四十余年の出来あり小坊て 御城ハ
明暦小出焼失問もあく御三代の御代移りそかき由井丸橋橋寺天章章
そか名く天章集有もそ 御代は 下町人御粥を被らねり
ども石川御粥の御粥の女房女房を著る上を著るを忘れ放等り
あり事也ひのき等御事子有方のを限を忘れ放等り
の心ありその時の上事等は何れの大名の奥方等やあまり結縷成物あり
られ尋すその歳命を別町人妻のよー上は是よりして町人吟味の上

本綿合羽

石川夫婦遠き所 伴付所とあり 金入の少袖斗着も此不久の多
 とあり 六巻鬪たき 若くも 若くも 町役人これを止めぬ 此等心あき事
 若あり 是より町人 此男女の衣 被の衣 止り 寛永の衣
 此より止り 遊女も 純子を 純子を 純子を 純子を 純子を 純子を
 此より止り 遊女も 純子を 純子を 純子を 純子を 純子を 純子を

男子本綿合羽 着る事 寛文の 寛文の 寛文の 寛文の 寛文の 寛文の
 の三人も 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士

羽織

○元文より町人の羽織 丈は 長く 長く 長く 長く 長く 長く
 西武とも 小若より 長き 長き 長き 長き 長き 長き
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士

羽織

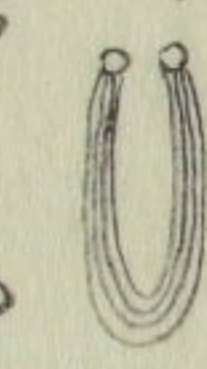
○羽織ハ 禮服ハ 非を 非を 非を 非を 非を 非を
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士

福より 京大坂 羽織の 丈は 長く 長く 長く 長く 長く 長く
 此より止り 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士 紳士

三宅四宅の吹き定中あれハ舞昌世界ニ及ぶ者ハ一重粒重粒をまゝ
若き代ハ我ハ思行^行と重粒^{銀座}ハ思^思所^思てモ^思尊^尊敬^敬ハ^{銀座}解^解解^解
客を我一トモ^見を世上人量^見を^見ら^見み^見を^見形^形重^重を^重不^不解^解中^中モ^モ神^神長^長
く^くと^とを^を打^打神^神短^短く^く袖^袖小^小等^等し^し花^花より^{より}短^短神^神短^短く^く袖^袖大^大長^長く^く始^始
の^のあり^{あり}保^保短^短短^短大^大元^元ハ^ハ中^中分^分元^元久^久ら^ら上^上方^方より^{より}都^都古^古路^路豊^豊後^後縁^縁と^と云^云
淨^淨熾^熾理^理語^語り^り下^下る^るハ^ハ一^一流^流皆^皆相^相長^長元^元久^久より^{より}ハ^ハ風^風世^世上^上少^少せ^せり^り先^先つ^つら^らう^う
我^我身^身ハ^ハ字^字を^を世^世の^の身^身あ^あれ^れハ^ハ一^一字^字を^を学^学ぶ^ぶ若^若き^きハ^ハ是^是を^を宮^宮古^古路^路風^風不^不解^解ハ^ハ短^短
も^も長^長く^くせ^せり^り後^後ハ^ハ字^字ぬ^ぬ人^人も^も短^短長^長く^くあ^ある^る
○[○]紐^紐ハ^ハ元^元末^末とも^{とも}切^切て^て短^短け^けり^り十^十徳^徳の^の男^男之^之天^天和^和ま^まて^てハ^ハ打^打也^也真^真享^享より^{より}平^平打^打廣^廣一^一
元^元禄^禄進^進用^用四^四宅^宅永^永より^{より}ひ^ひら^ら打^打牡丹^{牡丹}ハ^ハ二^二徳^徳思^思く^く短^短せ^せり^り若^若き^き若^若ん^んが^がけ^けは^は短^短長^長短^短
打^打武^武家^家用^用の^の享^享保^保末^末より^{より}短^短た^たく^くし^し短^短く^くあ^ある^る元^元文^文短^短き^きひ^ひも^も四^四重^重ふ^ふあ^あり^りたり^り
より^{より}短^短た^たく^くし^し又^又結^結ひ^ひて^て帯^帯の^の短^短く^くあ^ある^る若^若き^き若^若ん^んが^がけ^けは^は短^短長^長短^短市^市村^村短^短
左^左ハ^ハ短^短元^元短^短た^たく^くと^と云^云者^者短^短短^短短^短短^短を^を繩^繩の^の短^短く^くあ^あひ^ひて^て牡丹^{牡丹}若^若き^き若^若ん^んが^がけ^けは^は短^短長^長短^短

世上お初ものあり寛保三年より世も遊ば延享小玉を糸を作て居
へ出ー並あり

用 古来ハツ打細クミナカキ黄ガヲ茶後ヲトク 元禄比平うち幅こ
宝永ニハボタ 宝永比平打出幅せまみくわんか若をとり茶多くハ馬し
綾打宝永より出亨保 ぶとく長く先きと若ら思ふ用 亨保
文比ニ都古路風ノ思ハツ 其後思ふニテ少細キハツヲ四重ニ取り左より右りけ
打イッル長紐あり 片はも小まらもものも短り又若り



○[○]慰^慰斗^斗目^目ハ^ハ元^元末^末恰^恰を^を短^短き^きを^を綿^綿入^入ハ^ハ思^思之^之腰^腰り^りり^りも^も短^短き^きハ^ハ大^大紋^紋の^の短^短
若^若を^を古^古来^来ハ^ハ少^少袖^袖を^をつ^つき^きか^かへ^へも^も若^若ハ^ハ質^質素^素を^を元^元と^とを^をつ^つき^きあ^ある^る

別行

別行

其頃或ハ

方

元

結

織

短

長

短

長

下

あつを知らぬらんうあり

○羽織（織）の天正年中より始とみたり茶人の服ありて婦のひびきを元とせり下
袴より始（袴）ものふ形を又礼服ともあり 両居（居）のとき ● ちりめんの上（上）を

をりて窓の対面をさしき 雁（雁）を置き置きあり 羽織（織）のあきも後ふ書出

しちりめん（長頭）の心安（心）人の羽織の傍を対面しちりめん元末ちり

よちりめん（類）の衣（類）よちりめん（類）の儀約を心づきあるも此ありつもの此より

か下郎も上も礼服（服）のやふ思ひて後（後）のちりめんをさしき羽織を仕立或ハ袴絲

入（入）ちりめん（袴）袴を著して 公儀を（知）あるもちりめん（成）なり

△上古羽織の拜領ありてその後一級の際をわど切れを（雷）きりぬる

襟の垢付をいとしして仕出（仕）ちりめんありまはし近きいびりちりめん（緋）

ちりめん（袴）のつりをさしき 結（袴）袴をさしき今（結）ちりめん（袴）をさしき黒袴（袴）やも

ちりめん（袴）後世ハ礼服の因も入（入）ちりめん（袴）の笑（笑）なり

下下

集

木綿合羽前と云貞享（貞）比進（進）の女あま合羽（合）の着るものあり 袴（袴）は袴（袴）衣（衣）を
さみぬ元禄の比（比）ちりめん（袴）の女あまの合羽を帯（帯） 袴（袴）もさしき 袴（袴）の同（同）もさ
ちりめん（袴）のちりめん（袴）といひぬ安永（安）出（出）ちりめん（袴）の女あま合羽をさしき 袴（袴）
ありちりめん（袴）九（九）袖あり袴（袴）東（東）の思（思）びりめん（袴）のちりめん（袴）

其 畵



サヘリ皆モギ

△今田舎の老女（老）下（下）着（着）又合羽（合）は

袴（袴）装束の裏（裏）ハ皆金襴（金）用（用）

江戸（江）モ宝曆（宝）の未迄（未）是（是）ヲ用（用）ユ

安永（安）の（は）ハ（ハ）黒（黒）サヤ（サ）イ（イ）エ（エ）リ（リ）カ（カ）ト（ト）

ボタンガケハ少クナリシトゾ

正徳（正）末（末）ちりめん（袴）の木綿合羽を著る袖（袖）ハ内袖を緋袴（緋）子（子）ひどん（ひ）を
ちりめん（袴）のちりめん（袴）ハあり元禄（元）子（子）始（始）ちりめん（袴）上人の娘ハ駕籠（駕）ふちりめん（袴）あり

あやを知らぬらん為なり

○羽織の天正年中より始とみたり茶人の服ありて織のひやを元とせり下
廊より始まるのふれを又礼服をいふ一因縁のときもさるものの上を
をりて空ふ対面をさし置き一服を置き置きあり羽織のめ字も後ふ書出
し多し一層長髪より心安ん人か羽織の終を対面し多し元末あり
よもして衣類よもんぬるよもふ條約を心づき多し此ありしつゆより
か下郎も上も礼服のやふ思ひて後へるをもれ羽織を仕立或ハ袷綿
入もして着袴を著して公儀を初めり

二下
集

△上古羽織の拜領いふそそりて知る
△寛政の末より女の児の育りの後一紋の隠しわざ切れを著し是ハ多
襟の垢付をいとしして仕出し多あり丈夫に近きハびろくぞ織
ちりめんのつりをやり結縷をるを今羽織を著しを著し是も織
けり是も後世ハ礼服の因も入きりて笑

木綿合羽前と云貞享は違ハ女あま合羽着るものあり袴袴綿衣を
きみぬ元祿の比多あり女丈夫の合羽を著し袴着るものあり是も合羽
ありありと云るといひぬ室永は出き多あり女木綿合羽をこころと著し
ありありし九袖あり装束ハ思ひろくぞ小あり

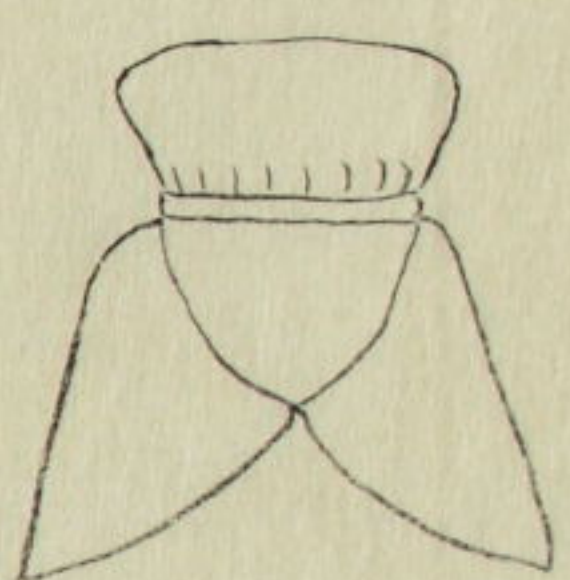
其 畵



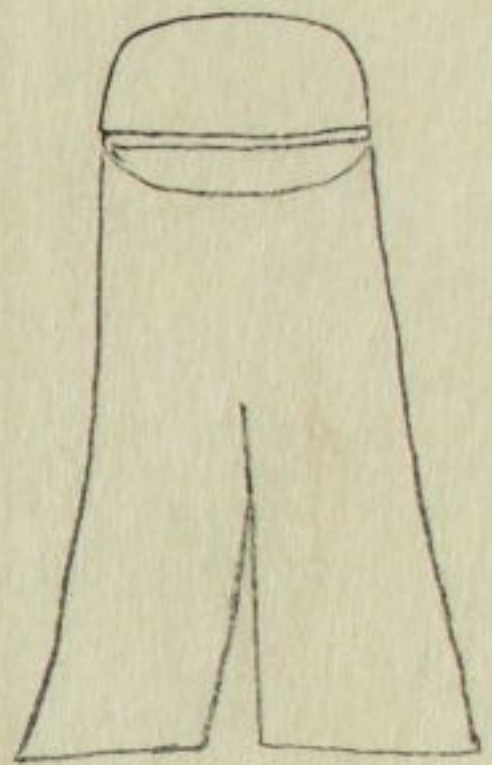
サヘリ皆モギ危

△今田舎の老女ト著合羽是
装束の裏ハ皆金襴ヲ用
江戸モ室暦の末迄是ヲ用ユ
安永の比ハ黒サヤキナリカケテ
ボタンガケハ少クナリシトゾ
くふりしとぞ

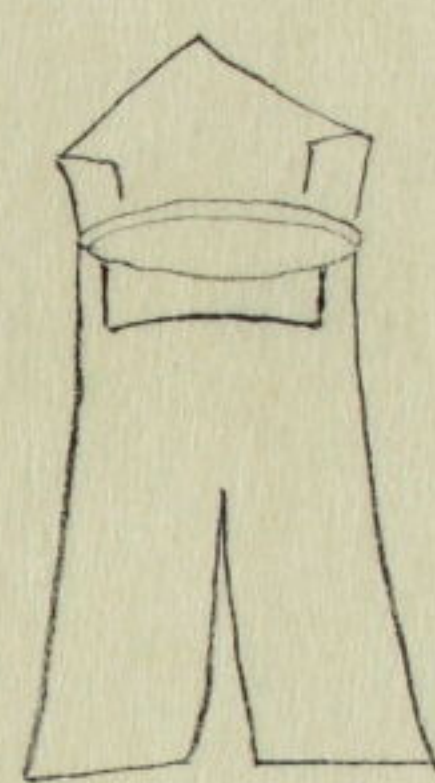
正徳末より袖の木綿合羽を着る袖長内袖を緋縷子いどんを
ありありと云はあり元禄子始り上人の娘ハ馬籠ふあり事あれハ



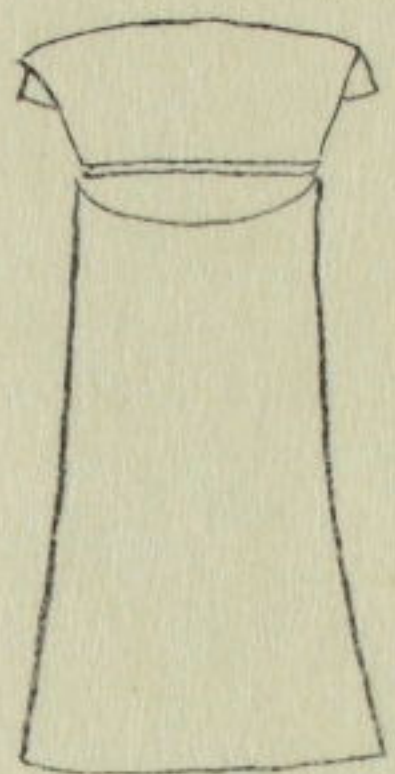
此政中の道心者或ハ出家あどのちりめん等こ
らうむりうり 享保 ありて武士町人共うむり然
ともあき者ハ角巾中うり 可也以上用之



○元文中より志ころ長きものなる態故と云
ちりめん裏紅背の紋志ころあきと云

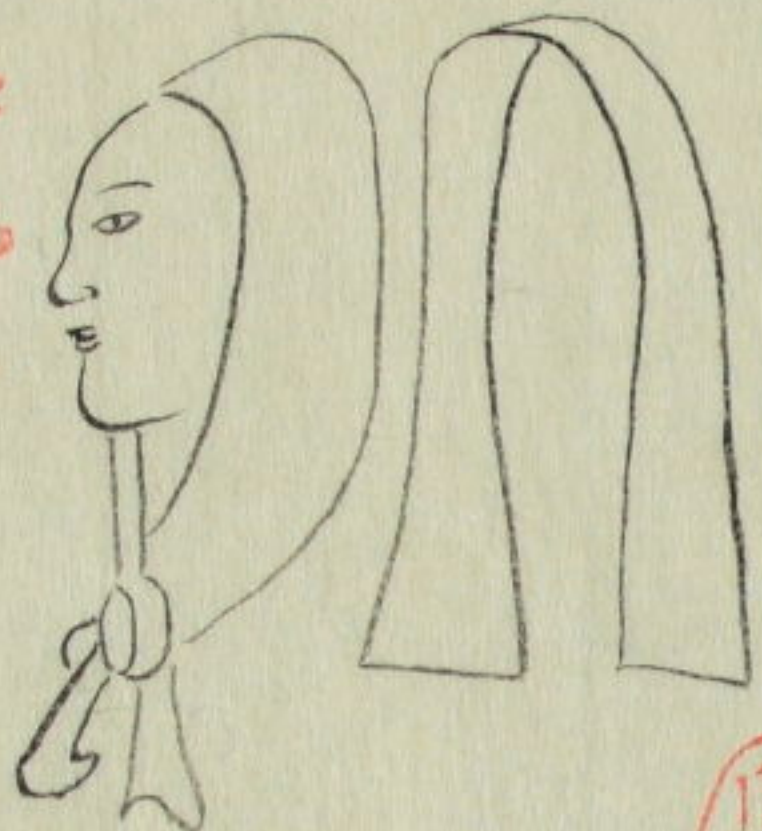


○寛保より鼻口の所へおこ切を何そ目斗いづそ
づきんちやれ
志ちりめん裏も志ころ九寸八寸余きやうづ
たんと云



又、^かやうかを一幅しして目のあへまをひ
らきあをもれ一様はる

寛保三年盜賊 改 藤掛伊織火方の吟味強く都 冠り物をさすも此をさすら
へて吟味を角巾中等と^か中をもを頬もりきやう巾 等は付も信止



ほ^うかむり 表 小紋或ハ黒緋緬紅裏 三尺余り頬カハリニミチ下 結び下ダ

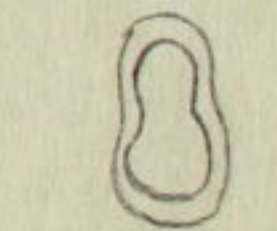
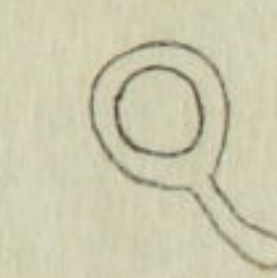
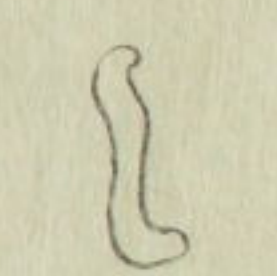
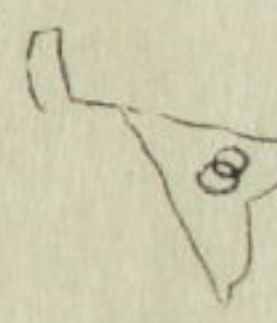
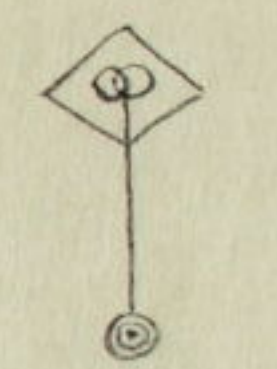
如^此の^如冠りものも町人百姓 舞子 町人とも男 舞子 町人の不用思行へ通ふ 舞子 悦 破りの馬鹿者あり
延享二年五年より 舞子 有の如くはむり物用 舞子 事あり
三尺帽子と本 舞子 頬もりし又帯も用 舞子 古より有る
舞子 色も 舞子 色も 三尺と云 舞子 先福より 舞子 五尺と云 舞子 あり

今の腰帯これあり

○男女ともいふりあき合羽をとりて幸喜保七能晴宗色着始

○元文より女多く着たり堀河辺の者多し角又水牛を始す正

徳比より真瑜のうかも此或いはあらぬ



カナ物

寛文頃より元禄迄は合羽の六はせ
熊ふり夫より

○古来より頭巾と云ふことあれども享保のやうあつたをいふ寛文付

代男輩の頭巾ももうむものもいふ事あり

○ともいせりあきあふ勇氣いさゝと不止治世の寛て勇氣衰へむり物

て此面を風を防ぐに全陽氣の不足とみたり去るふ依て近

足袋 ○足袋は古来より有る也寛文の比女は草履あつて是れを筒足

白く草履草履の白繻子
古来足袋本綿を元とを
如此筒あり。あつたも是れを是年
も二年もききうまて用



天和の比より本綿のうねりの足袋を男はうと足袋を
はとむ十一月より二月まであつて止

△白水り我母尚文化二丑年七十四歳生國常陸水戸あり

足袋の上より年々我がはき料と十月の始より彼らねるの足

袋を是れ給ふる勿神あり

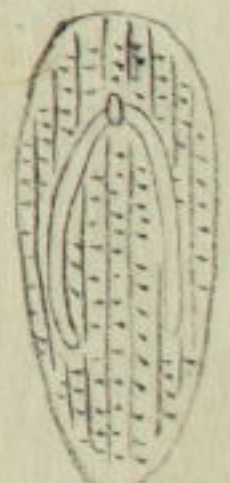
も年々是れ給ふるは方足袋へ給をうをく入れしを本

見て堀河町中総屋利多衛山柳所池田屋之九希

多くは不用よむく 浮気ものれさききりあり



古来の草履 今も其の形 草履の形は 今も其の形 草履の形は 今も其の形



草履は 涼しい 三十六銅 本は 小柄の竹の 皮で作る



元禄のころ 相州辺 出る 草履の形 表裏の形 表裏の形 表裏の形



鼻緒は やるい 鼻緒は やるい 鼻緒は やるい 鼻緒は やるい



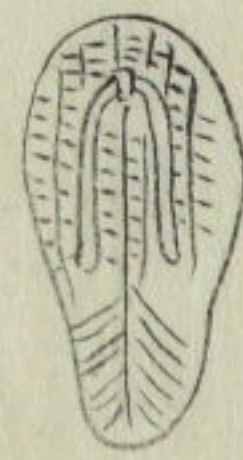
あわをうり 皮の 皮の 皮の 皮の



元文のころ 表裏の形 表裏の形 表裏の形 表裏の形

裏附草履 古来の形 草履の形 草履の形 草履の形

延喜始より 本強切を以て 延喜始より 本強切を以て



金剛草履 草履の形 草履の形 草履の形 草履の形



草履の形 草履の形 草履の形 草履の形



草履の形 草履の形 草履の形 草履の形

一行

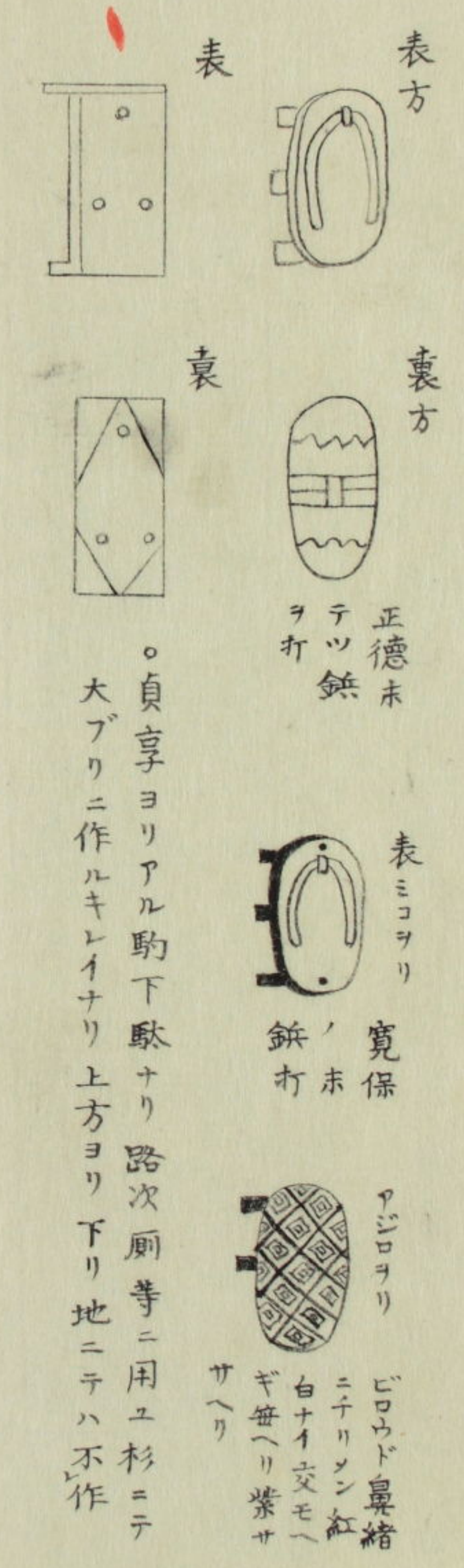
小唐櫛櫛のごとくはあをあらわす櫛櫛 前もきんとう革も水牛之尻尻 漆を
うり代元字金十五位より或は朱朱 是より上方せつこもあつて
あつた扱扱一登せ然然 重し重 重人重のいうあり
元祿家永小あて緒の腕腕こまをさすも切切の雪踏踏ふくを櫛櫛
足袋足袋はうぬものを好革編の加廻出る出 足袋足袋のきの方
をぬらをも白革白革を半分をぬらも又白皮一色もの 鼻緒鼻緒白うの
よりあり

享保の末末を切切を切切を切切 馬塗赤赤よりの 緒緒同同
切付雪踏踏ものありあり 鼻緒ものああととはく
元文より女雪踏踏小小ののもの作作ままよりより 上方より右の地雪踏踏を似
ててもも新新丁丁よりより 出出を細工細工をとりてを 近近年年雪踏踏
上上るるよりより 切切ままよりより 玉玉子子柄柄或或ハハッッ打打つつてて 是是よりより 雪踏踏のの類類
宝永宝永よりより 切切付付のの上上雪踏踏三三百百羽羽又又ハハ或或百百半半又又丈丈よりより 下

別行

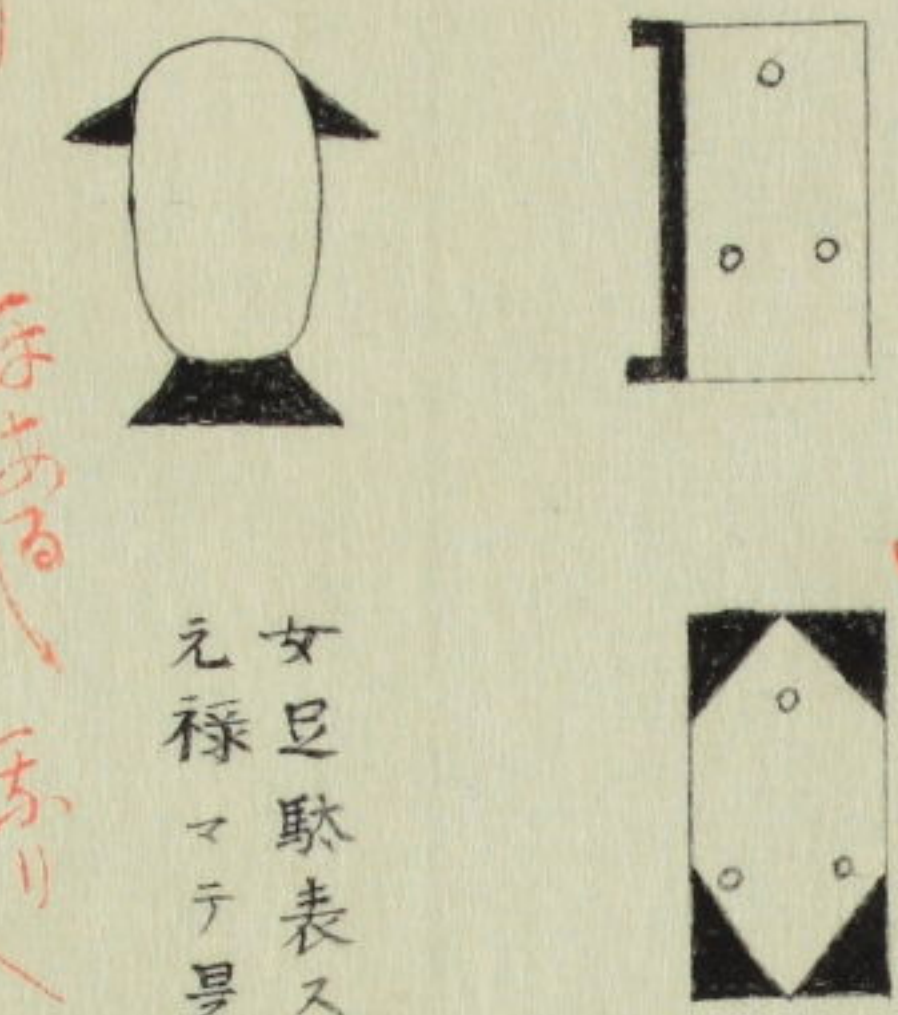
直直あるもも 仰仰るる 偽偽るる 地雪踏踏作りもも 上方より取取るる 是是をを 賣賣すす 小小のの 成成りり
寛保寛保よりより 地雪踏踏ととのの 稀稀ありあり 多多ありあり 高高直直ありあり
雪踏踏をを 元元照照降降町町 高高例例二二三三新新並並でで 又又人人形形河河西西例例小小丈丈 享保享保末
よりより 新新河河細細上上よりより 雪踏踏のの 尻尻がが 袷袷長長ありあり 出出付付よりより 也也
宝永宝永頃頃までまで 僧僧のの 雪踏踏表表はは 細細ふふよりより 裏裏皮皮付付表表へへ 着着はは ありあり
白白革革又又皮皮三三板板重重表表皮皮をを 漆漆ぬぬりり やや 或或ハハ 仰仰るる
是是をを 加加へへ んん 其其のの 多多とと 也也 武武士士一一医医者者ああれれ 是是をを 賣賣すす 小小のの ありあり 平平人人のの
不不用用をを ぐぐりり してして 小小のの 袷袷のの 古古くく 成成れれ 漆漆をを 賣賣すす 小小のの ありあり
しし 武武士士 新新河河よりより 表表毛毛のの 経経皮皮をを 付付鼻鼻緒緒もも 毛毛皮皮のの 雪踏踏行行りり 元元文文のの 頃頃
よりより 不不見見
女雪踏踏のの 宝永宝永遠遠みみ 向向くく 上方上方よりより 雪踏踏のの 上上出出てて 下下女女をを 櫛櫛
女女中中をを 切切りり のの 多多はは 雪踏踏をを ちちくく 赤赤緒緒のの 漆漆ぬぬりり ありあり
正徳正徳頃頃までまで 宝永宝永のの 多多はは 享保享保よりより 切切りり 鼻鼻緒緒のの 成成

元文（頃）系（頃）桑びろうどいゆる寛保より表付（頃）草履（頃）もある
 表せんも裏皮をつちかき（頃）あおせつて寛文の頃より寛政の頃より
 保の頃より高より表（頃）みか織（頃）り奥り表皮をへるを取るをゆをり陸
 地をまく女もくさるよりよきゆへ（頃）不道用（頃）小児の頃寛保の表細代：地
 たる（頃）草履（頃）出る小児のときもれあり
 宝永頃より高より草履（頃）り下結あり別高き履ふり結をお付するも
 此の頃正徳より皮をぬをの雪踏は表の歯をつちかきころ下結出（頃）
 けいねえころころ



貞享ヨリアル駒下駄ナリ路次厠等ニ用ユ杉ニテ
 大ブリニ作ルキレイナリ上方ヨリ下り地ニテハ不作

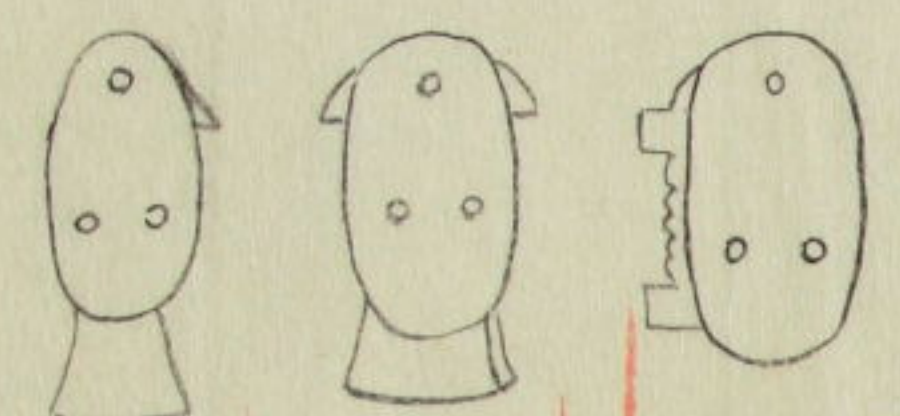
元禄頃ヨリ上方ヨリ下ル小児ノコマ下駄ナリ表
 下地スワウ漆上ウス漆ヌリ裏スミヌリ



女旦駄表スホウゾ
 元禄マテ是ヲ用ユ

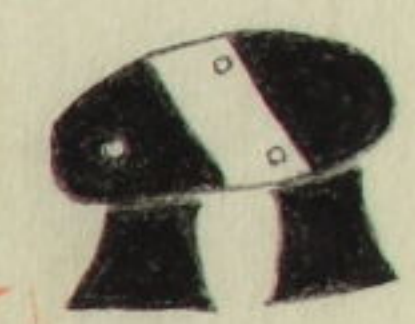
物好ニテ地タマゴネジ表ヘコマ下
 駄打付テハクモアリ

古来ヨリ下駄ハアル事ナリ地下駄桐（頃）作（頃）山下駄（頃）云アリ山（頃）
 作チ出ヌ下品ナリ



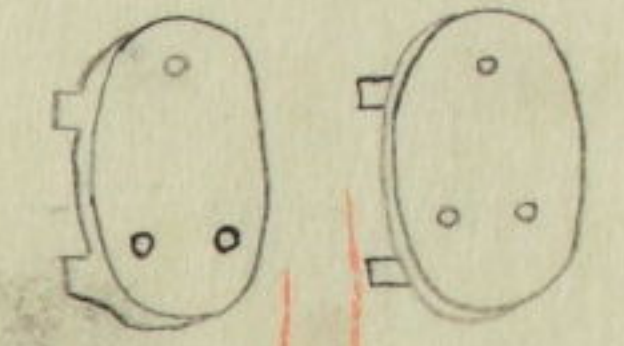
元禄の頃より地を作る桐下駄男女とも小まくと之とも下駄
 はひきものゆへ先づハ女のものあり
 宝永の比より下駄の歯を高くせらるるを推す女比五
 尼もく歯換り安
 歯ざり

正徳の頃 上方より下りの塗下駄馬あり



下駄 是ハ桑やあどへ密作り雨ふりて入るるき此の

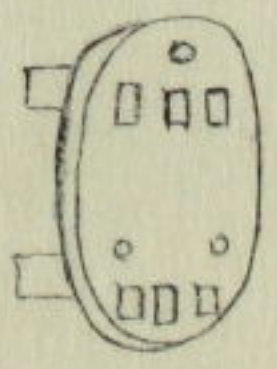
柳のありて作る丸下駄 享保頃より作る角下駄を



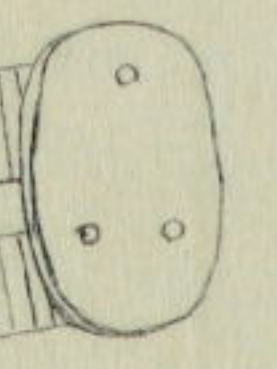
足駄も古来より是ことあり 貞享の頃 地足駄あり細工あり



表一歯を指物と 表相歯をき

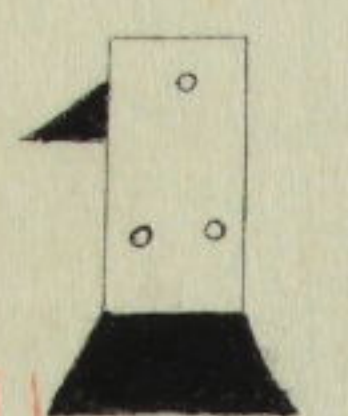


元禄より丸きもあり 下女あどむく



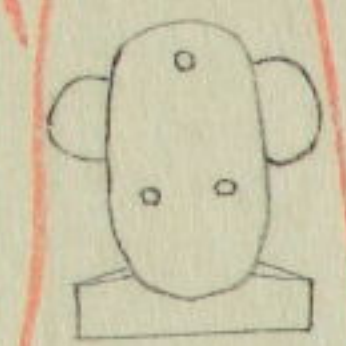
宝永の比より小田原町足駄として表相相のこころあり用歯を

宝永頃より上方免く此の塗下駄を作りて皆女下駄あり



歯をそろせり 表の方木塗あり馬赤青漆も有り歯を

日頃和泉町新道かぢありの足駄作りの上るりりげあつ下駄を名代



表相の正目歯ハ桎の木丸歯あり足駄ひくはきより

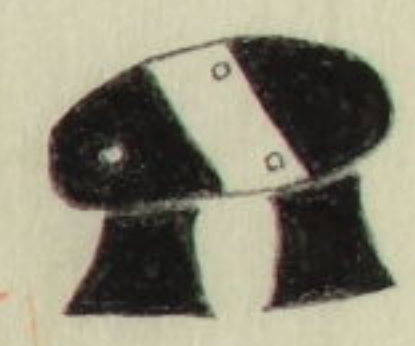
享保より下直ある塗下駄ありて作る是より俗医者武士あどむく

高官

く人の官宦あらでハ何れも下駄足駄を赤塗ししてけハ世上を

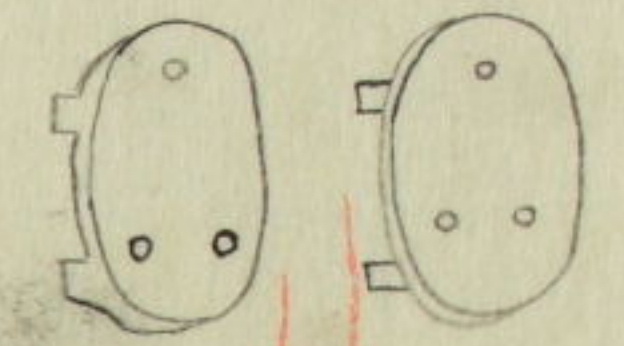
高官

正徳の頃 上方より下りの塗下駄 馬ゆり 有
歯大ふ替り



下駄 是ハ草やあどへ客取り 雨ふりて 久きとき比の
草あがりあり 古京下駄と云

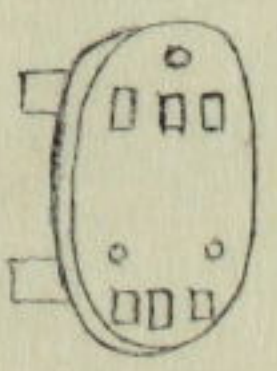
柳のあて作る 丸下駄 享保頃より 作る 角下駄を
歯せんせびはきす



足駄も古より 是ことあり 貞享頃 地足駄あり 細工あり

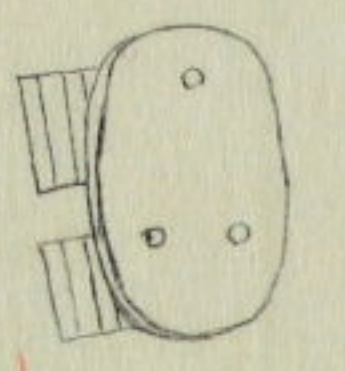


表一歯を指ぬき
表相 歯あき

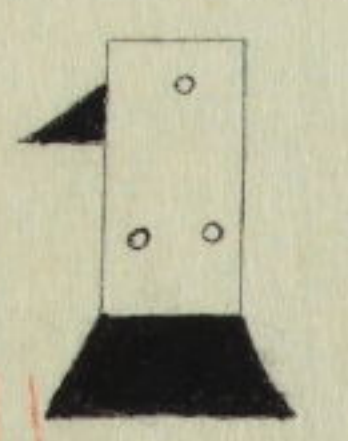


元禄より 丸きもあり
下女あどむく

宝永の比より 小田原町 足駄として 表修相のころ 馬あきを用 歯
裡の本あり 始て 何りあきを 後ふあきを 用

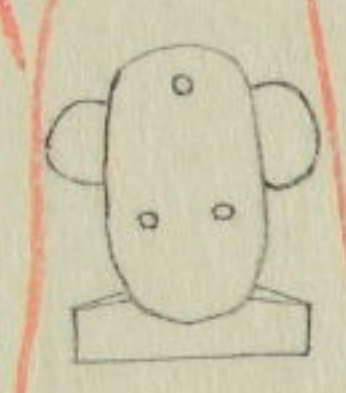


宝永頃より 上方免く 此 塗下駄を 作る 皆女下駄あり



歯をそろせたり 表の方 本塗あり 馬赤青漆も 何り 歯
馬ゆりあり

同頃 和泉町 新道か ちかちかの 足駄 作りの上る 何り げあがり 下駄を 名代
あり 正徳頃より 他町をも 知り 多く 役者のとき 物を作る あり



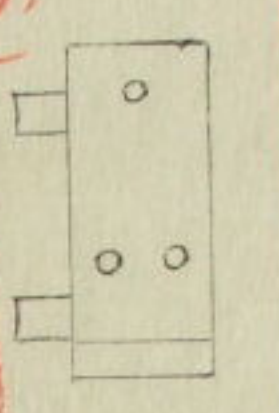
表相の 正目 歯ハ 裡の本 丸 歯あり 足駄 ひとく けはきす
後 役者の 下駄 あり 此 塗 赤塗 地 江戸 塗下駄の 始めハ 本
うも 然とも 平人ハ 用ひを

享保より 下直ある 塗下駄 あり 此 作る 是より 僧 医者 武士 あり 多く
女ハ かく べの あり 男ハ かく べの あり 唐あて 朱履 とも 馬ゆり 此の
く 人の 官 あり 下直 あり 下直 足駄 を 赤塗 あり けはき 此 世上 を 多く

高官

をきれあり寛保^頭よりより丈夫三注引多許子俳諧所^{つづ}れもよ
しからぬ人のほきも^{あり}

△屋よりべんごを^しを深漬^{あり}て^{その}漆を^はく^{女も}此^{あり}
享保年中上より柳を^{作り}齒^{あり}の^{きの}足^結大^はや^る

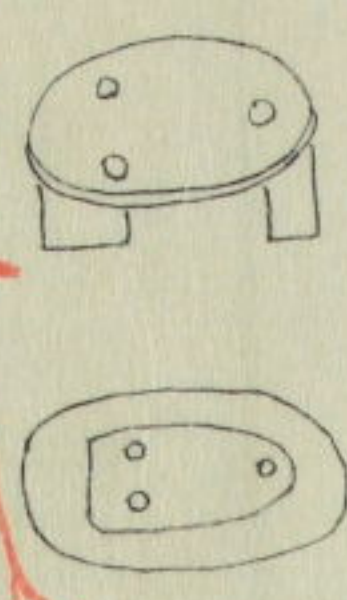


皆用 足^結の前後^こい
を^{あり}歯^{あり}
ッぞ

◇ 其頃地細工表^いの本^の足^結ハ
や^る齒^ハき^{あり}

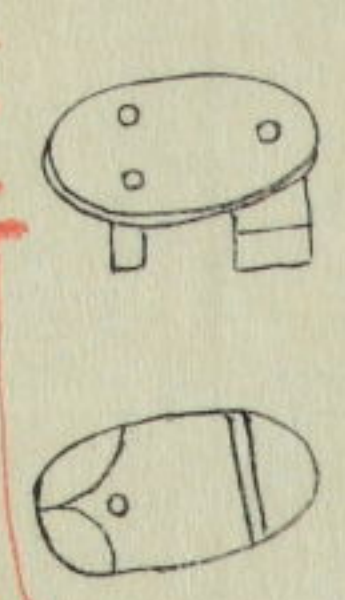
○貞享^頭頃までい茶^事心^のあ^るや^りと^あるも不^倉元^孫ころより^有る^氣也^一
見^て切^付ば^あを^け志^んと^も隨^身此^者上^を懸^んて^けん^家永^結
き^も此^の塗^結の^ほき^もを^もの^懸結^として^中心^結斗^ぬ
とき^{あり}正^徳頃^{より}け^りの^多き^一享^保末^{より}延^享よ^りと^り十五^年以^来武
士^出家^医師^平人^百姓^の代^小者^年老^者將^人等^のあ^るを^古き^革も^あ
緒^を巾^結足^結よ^をて^もく^るふ^い成^ぬし^も世^{の中}享^保より^次あり^く
下^困窮^して^身の^うつ^て奈^むる^べい^く後^世も^も道^理あり^き

三下



桐木^を作^る下^作あり^け巾^結多く^田舎^向少^元文^頃
こ^あい^づる

ニ下



前方^下結^と後^の足^結の^齒入^{あり}巾^結あり
用^の少^し寛^保頃^{より}み^る
但^又く^もち^のあ^るや^り

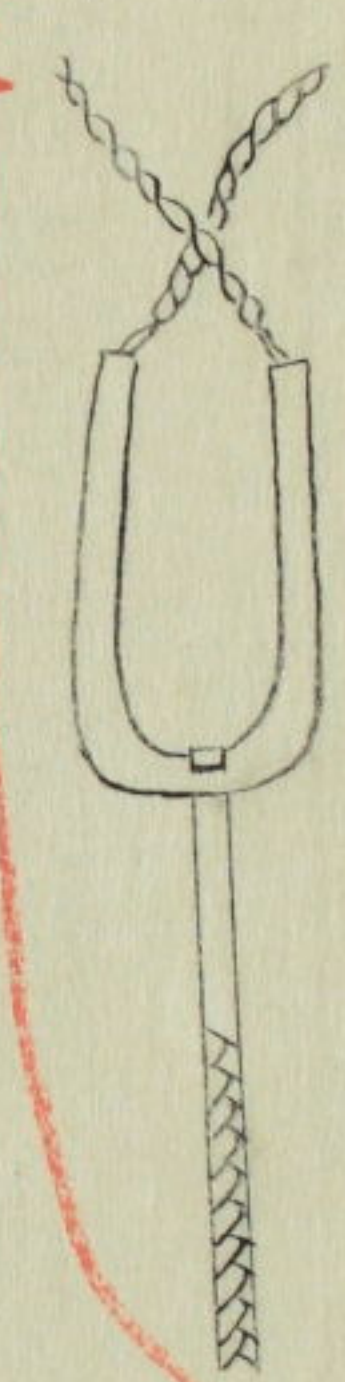
男女^塗下^結足^結とも^寛延^三年^八月^印信^止元^文比^焼相^をぬ^らい^漆を^は
き^下結^足結^はる^さひ^うて^伽羅^の如^し上^人ハ^不用
正^徳の^頃より^もろ^が町^越好^大下^結を^こら^る結^失あり^用心^{あり}長^考入^り
或^寸余^横五^寸他^のあ^きは^きり^のあり

下^結足^結の^鼻緒^昔ハ^のあ^き繩^をあ^いを^る女^ハ亦^結少^くり^てま^き
あり^後を^くり^こら^る物^を寛^文頃^の用^の貞^享頃^の繩^を
よ^しを^元福^もろ^こが^なる^ある^雪踏^を
鼻^緒を^たは^はる

紙の切れ端

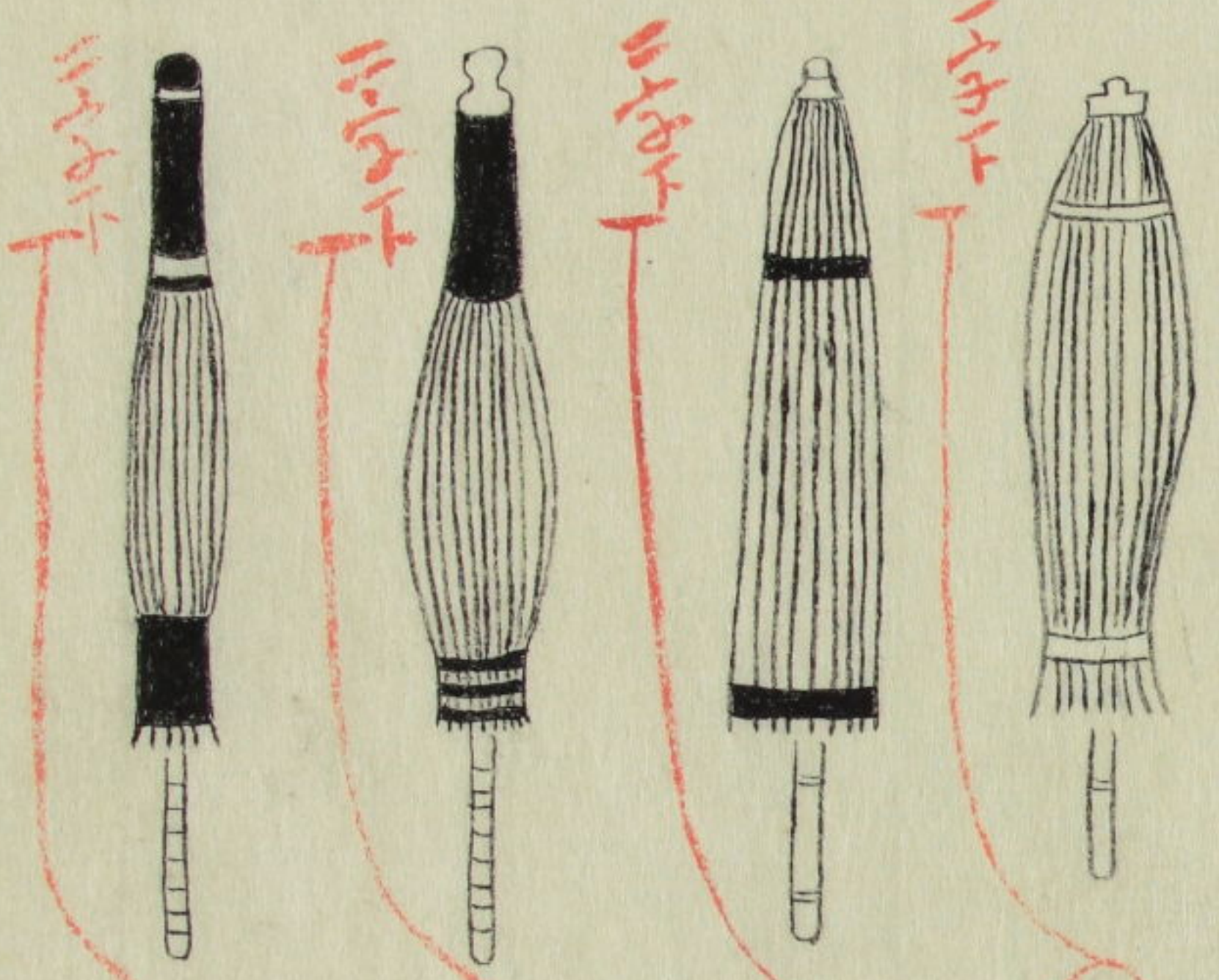
元禄よりかり草鼻緒の上下ある上は青白下は赤
はく人少く山田京町を流し舞臺にて年中陸地を
ごとくあれが舞臺のむきども鼻緒をせりばむき
くあらでいけく人まれあり

○室永の比草細工へ鼻緒を切らしてありが
或い新町或い芝踏せり作り出を元文は甚しく
直伝下直ふうう埃人初て買ひを
寛保元より前緒のとうめうう少を教



○室永の切付より平目ぬいあり切ぬきはと
先

○傘を古来より有るより天和の時まで大坂よりある傘を用大
馬倉の紐舟うきと云い名代也貞享の時より地を作る上忌あり



下り中厚紙を細工ぶとうありつよ
き糸せうぞあし竹あし削り丸き判
あり
下り女が少くぶら糸せうぞくあしを
花名がみえ蛇の目のよう小作る下作也
貞享より地のもみぢが西きやあり天上青
紙青とさ少く細く入り取糸せうぞく柄と老
元禄より蛇の目がき出る上青もき深くの
き厚く青とさせうぞくきぬ糸と通りろく
ろえ青とさ代金糸朱位

物取

女今ハるる^三後も^二くねり^一なり^二まぎ^一五巻の糸^三ぶん^二よく^一骨^三あ^二り^一る

正徳頃より次今ハり^ハり^ハがさの^ハま^ハく^ハり^ハて^ハね^ハの^ハま^ハき^ハよく^ハ作^ハり^ハも^ハし^ハみ^ハが

享保の頃^ハ紀^ハお^ハる^ハ今^ハり^ハる^ハま^ハく^ハ小^ハぢ^ハり^ハて^ハき^ハれ^ハい^ハり^ハ常^ハの^ハさ^ハり

元文^ハ頃^ハ今^ハの^ハゆ^ハき^ハや^ハや^ハを^ハか^ハり^ハて^ハ切^ハ者^ハの^ハ上^ハり^ハ出^ハと^ハく^ハぬ^ハき^ハを^ハし^ハて

地^ハも^ハ白^ハ張^ハ骨^ハみ^ハが^ハき^ハ花^ハ者^ハり^ハて^ハ常^ハり^ハぢ^ハり^ハあ^ハり^ハ直^ハ敷^ハり^ハる^ハり

不知^ハり^ハ不^ハ得^ハ也^ハ之^ハ白^ハ張^ハ蛇^ハの^ハ目^ハ内^ハ筋^ハを^ハき^ハぬ^ハ事^ハ享^ハ保^ハ頃^ハより^ハ始^ハり^ハ青^ハ衣^ハを^ハ着^ハる^ハ事^ハも^ハは^ハ頃^ハより^ハ始^ハり

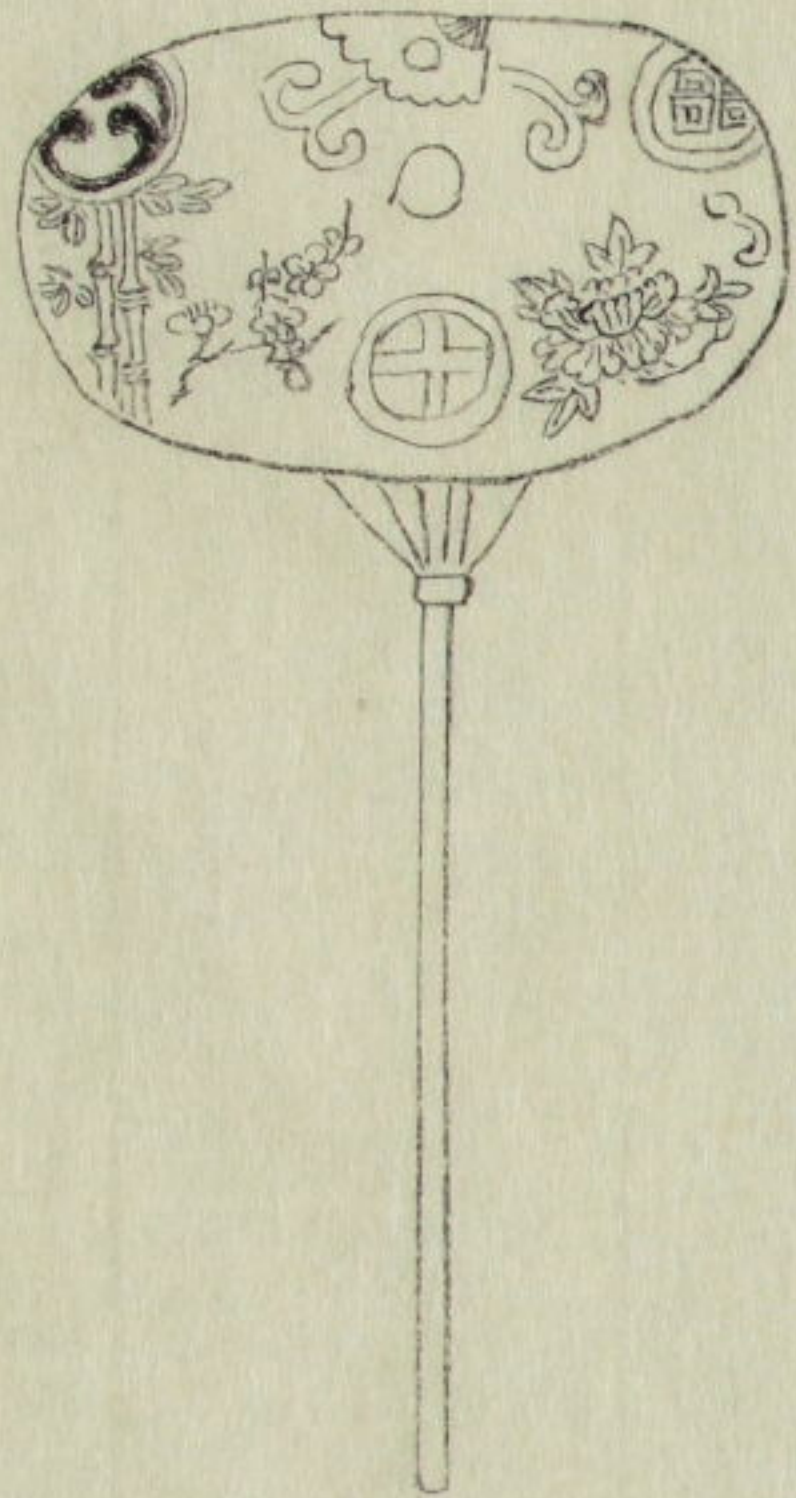
別行

小児の命も古来^ハい^ハり^ハ是^ハと^ハん^ハが^ハう^ハま^ハじ^ハの^ハ元^ハ禄^ハ頃^ハより^ハ是^ハ後^ハ者^ハの^ハ子^ハ供^ハ斗

日^ハ今^ハハ^ハ古^ハ来^ハの^ハ事^ハと^ハり^ハる^ハ小^ハ児^ハ日^ハ今^ハも^ハ天^ハ和^ハ頃^ハより^ハ中^ハ地^ハを^ハも^ハ作^ハる^ハ五^ハ巻^ハの^ハ糸

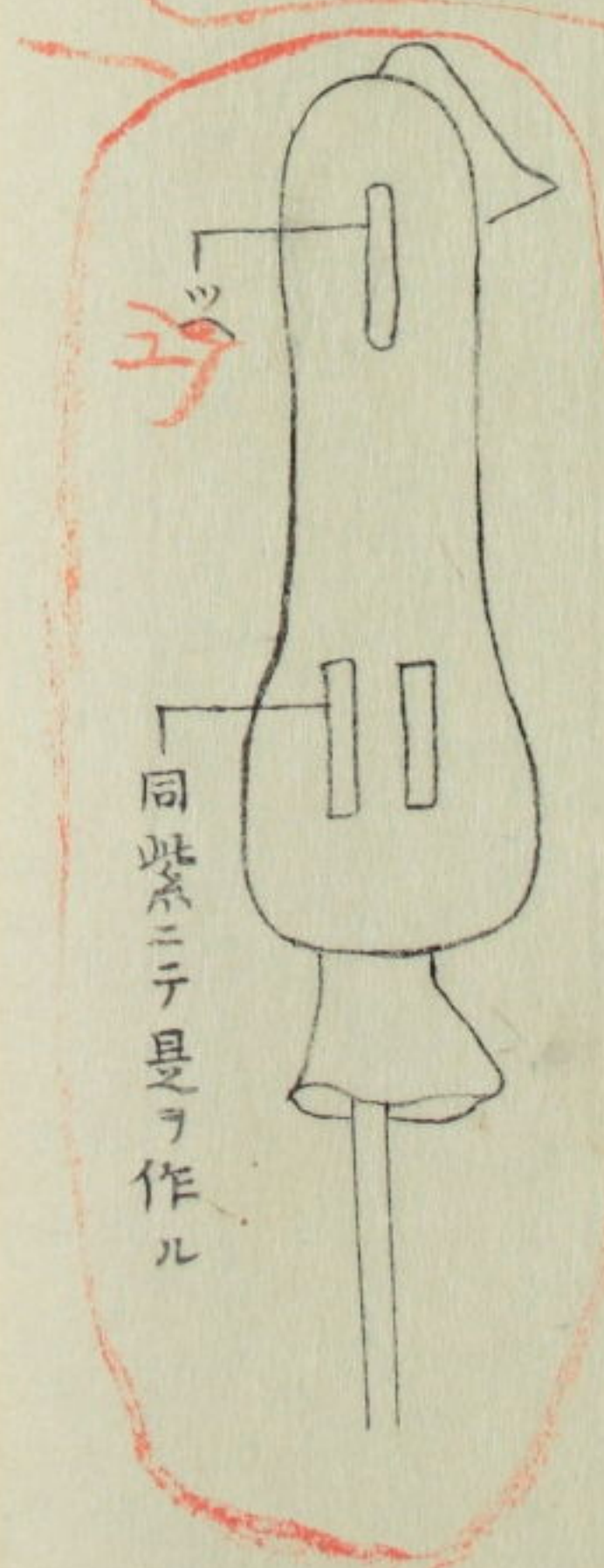
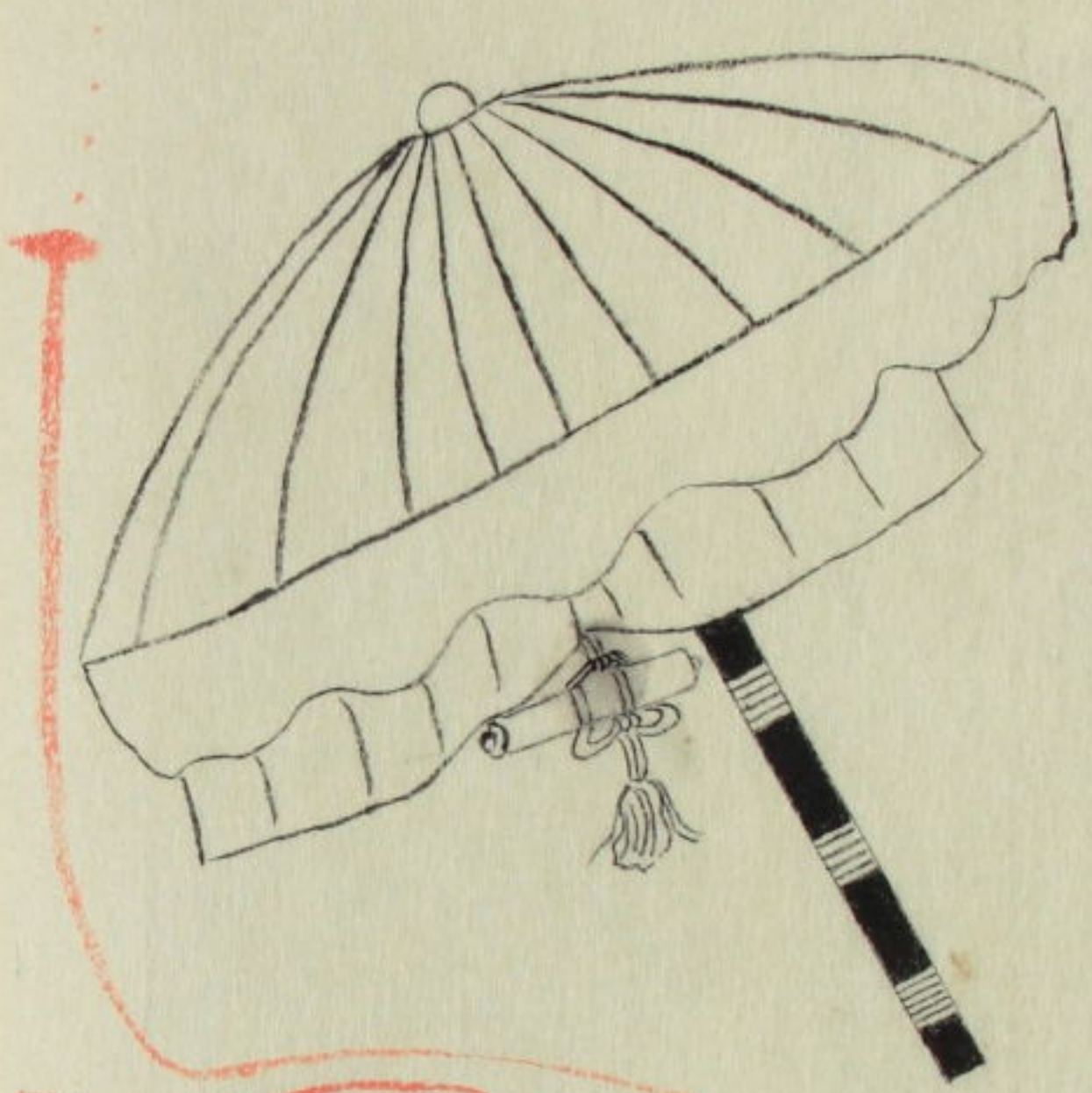
人^ハも^ハは^ハを^ハ倍^ハ懸^ハ者^ハれ^ハく^ハい^ハ上^ハり^ハま^ハる^ハ事^ハも^ハは^ハ頃^ハより^ハ始^ハり^ハる^ハ事^ハも^ハは^ハ頃^ハより^ハ始^ハり

今日^ハ今^ハハ^ハ婦^ハ人^ハハ^ハ限^ハり^ハき^ハう^ハ髪^ハの^ハま^ハを^ハい^ハと^ハ着^ハる^ハ事^ハも^ハは^ハ頃^ハより^ハ始^ハり^ハる^ハ事^ハも^ハは^ハ頃^ハより^ハ始^ハり



天和頃ヨリ
下ル日今

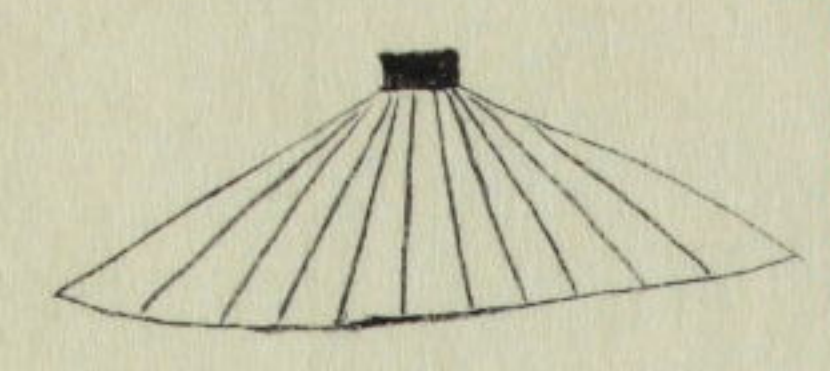
寛保の頃より指と日今皆青紙張也又小兒山王ハ幡明神天王等の御札ふ
 ねり子悟さを筆ハ坊丹漆の一色之他人さしそ子供を覆ふ之柄長一の
 き山の輪又ハキスラハリ内其輪をカサ等をつける△以金風今能れふ
 弒るもれり 絹を張リ 釘守ふくさ 余 別
 大人青紙の日本はさう宮入延二年己巳即信止再編宮延二年午月お
 てきびく 俵方らる 小兒斗用申す延三年より 日午ふるをり 退ふ



恭内今ハ常ニハ十二御規式の節用之
 少將以上用之 家柄 持十萬石以上の物

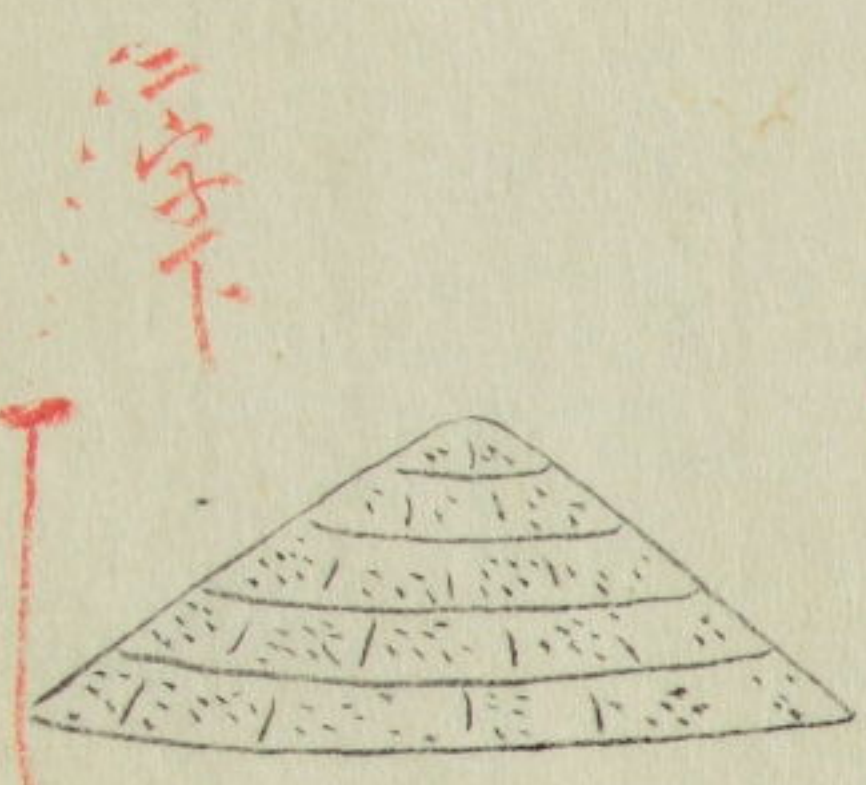
同紫ニテ是ヲ作ル

三下

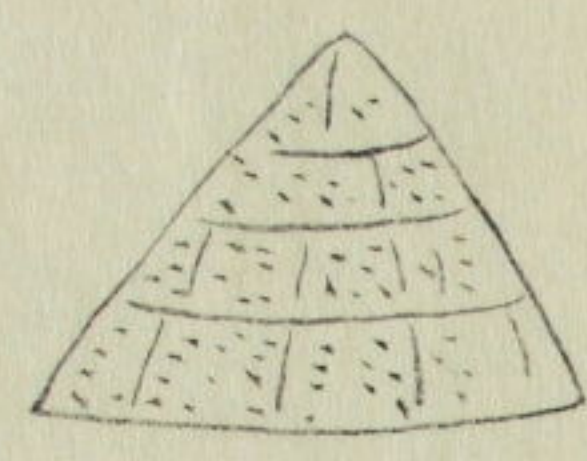


懐中傘 袖へ入ル 俄雨
 時用上享保頃出ル

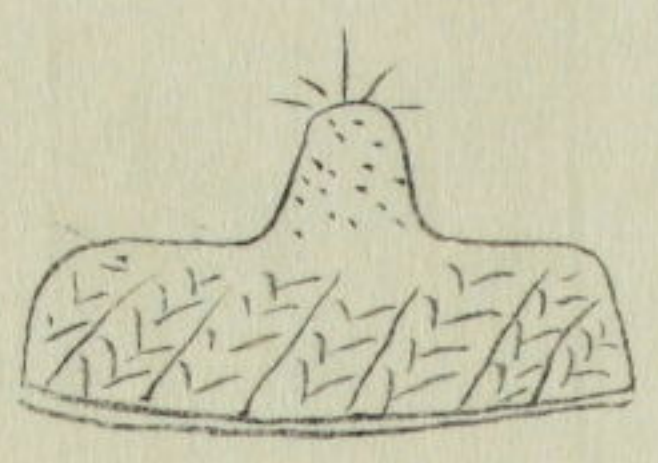
古来今ハ能枯きを良とを四ノ富の上へつをきり元福より今
 小定紋を添へ入延享保頃町人の不用武家或ハ医者斗あり
 蓑者古来より歌ふ雨ふりあみのをいと詠りぬ大名も蓑者
 けり然れば陣中ハみのを用とんてり蓑の上品ハ加賀を中一とを表へ
 糸のあみをそり風吹ふ是の心あちを法學觀言十二月十七日
 市有川向牛を蓑市古来より有ることあり
 慶長の頃も桐油合相けり大石供の末子合相親けり古来丸合



三文字下



三文字下



三文字下

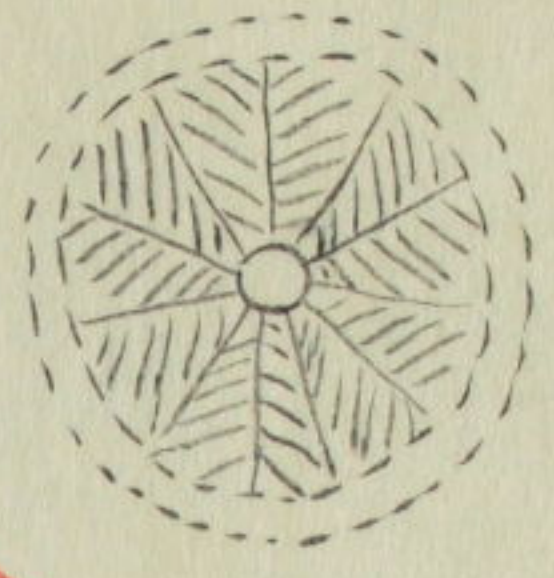
後大笠も極く
あり 四尺四五寸
さう 甚
雨笠



百重 陣笠 信長公の時作らる身
小車 具足を著し 頭小笠を冠す 粗兵
の具也 治世よりて 徳武家の類なる
箱に 享保中 町人四季とも 大笠の
弟 冠す 享保年中より 是は 細の火
消町 小笠をつとむ 信長公 是小者 甚
地 井を 細代 是 是
法を 深 深 深 止む

延宝の比より地を作るに 井皮の小方あり 是之井も
けし 日笠 雨笠 各用也

享保年中如此笠を作り 出を 細上を 雨のもらぬ 様
ふせり 所を 是の 志の 志の 志の 志の 志の 志の 志の 志の
たり 大笠あり 雨の用也



三文字下

檜笠 古来より 有 和州 大岸へ 入山 伏見を 冠す
こと 古来より 有 雨の 笠 日笠 各用也

一行 下

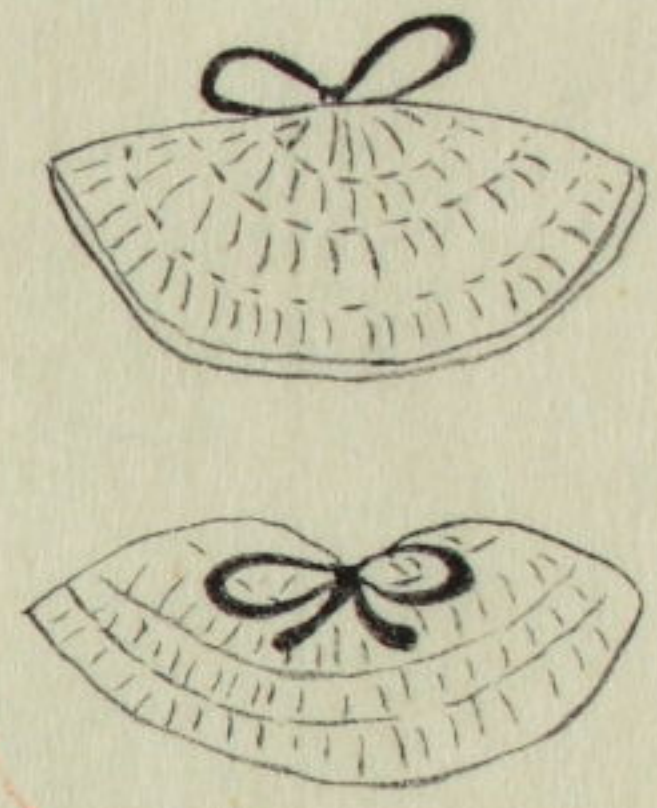
見ゆ 元
丸合羽 みの 異あり
赤合羽 青漆きぬ 桐油あり 寛永より 出
寛永の頃より 桐油の 紙 出あり
寛保の頃 申合羽と 厚 紙 単あり 小紋を 深 桐油を 引 細ふ 三
三
元
男笠の 奉 菅 笠を 冠す 是れども 張 笠 筒 笠 古 風 あり じん 中 と 云
元
笠 笠 を 用 也

二文字下

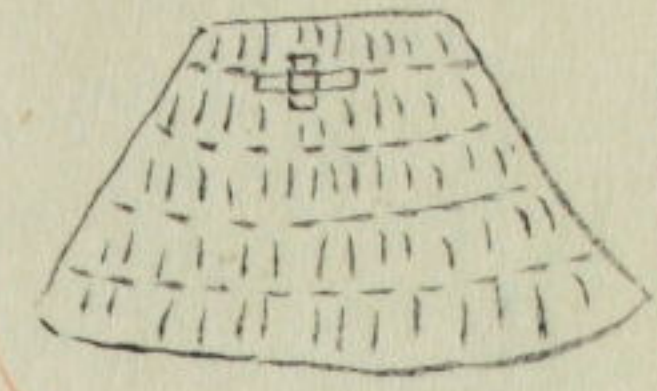
二文字下

○古来の男女とも編笠を冠り、寛ふちの余風、延宝天和より上方り笠のつて是より平笠を冠りたり
 延享頃より洗刷を浄らふ或は、**櫛**を冠りたり
 小用のつては、**櫛**を冠りたり

古来より是を**編**の**女**の**冠**なり或ハ洗刷のいも川通しと云ふ一文字と云延宝の頃までいぬき笠也



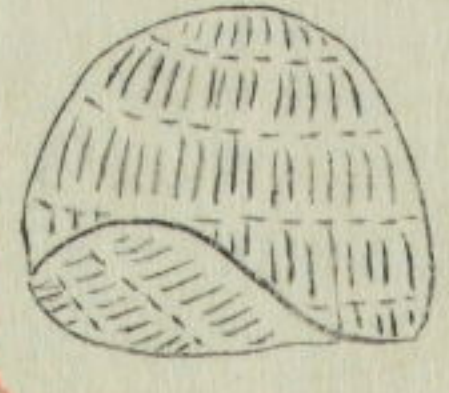
二文字下



二文字下

男のいぬきの**深**き**折**り**冠**なり男伊達風なり
 平人の折**冠**なり其のまじりあり

二文字下



小あみ笠わづき**冠**なり風車**冠**の子供笠あり
 陰持奴ハあり事もあり

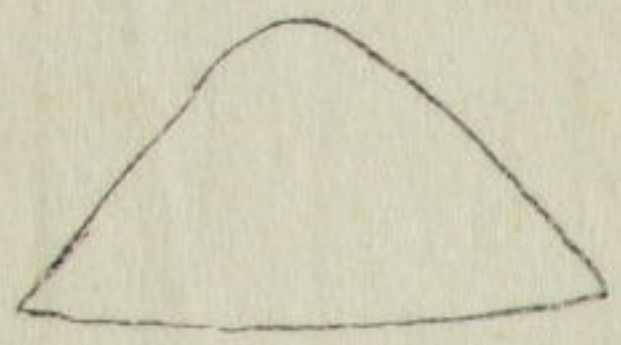
天和より武士熊谷笠を冠り引通し**紐**白**役**者古来の文字をうむる是より熊谷ふある享保年中より九き経をかくる医師武士斗あり町人の不用一ふまの紐川通しをかくる毘治より帷子より皆うむる熊谷ふありありあみ

二文字下



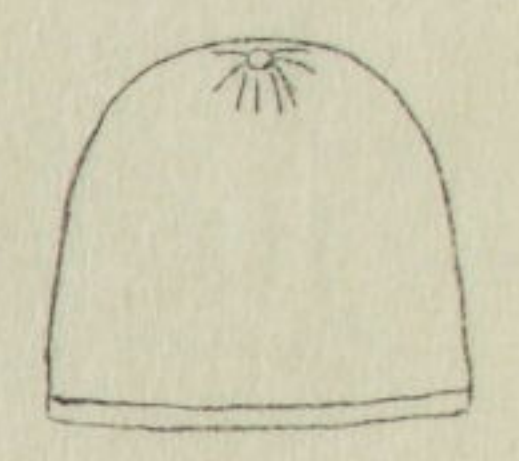
上総より出る**殿**中と云**菅**笠あり伊勢よりもある貞享よりは、女も是を用ゆ**福**女ハ紙を四角折て**く**くもへ何そ口を**かくす**正徳よりあり武家を定永**頃**なり

二文字下



くくし

二文字下



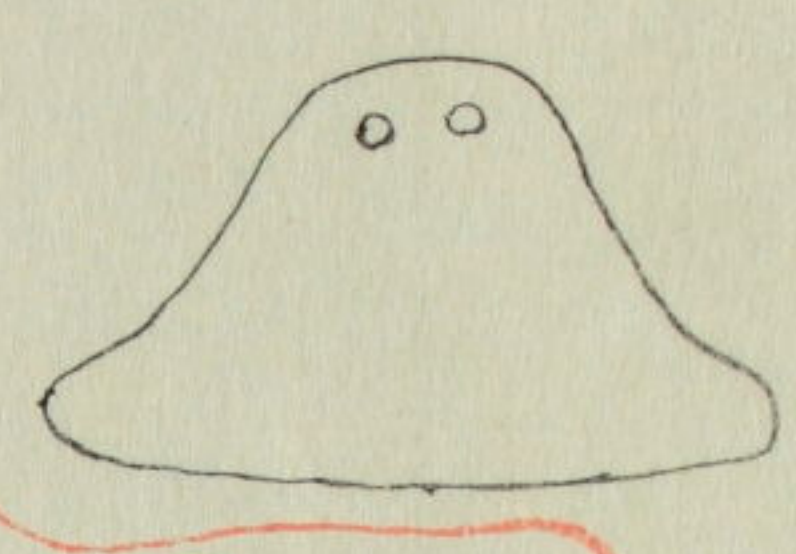
貞享の比より三夜笠とて形柳馬と少く形大落馬とて
も鼻をうごめやうふゆくある者多し
享保の末より道中笠か定む

三文字下



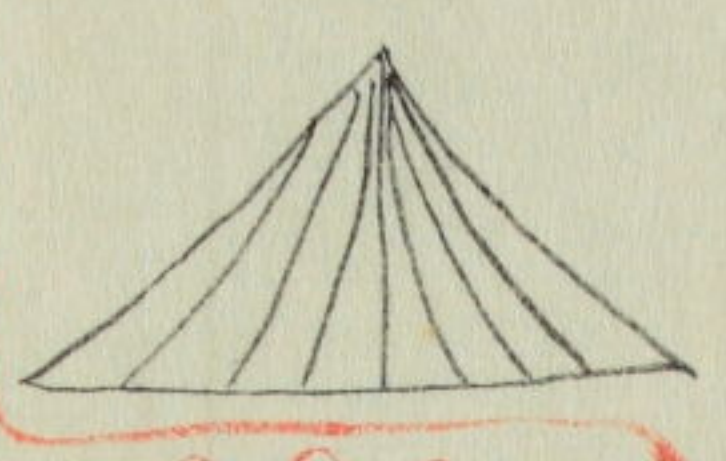
慶長より上方より下
の深き上方より下
傍の心也道心者ハ不許冠事

二文字下



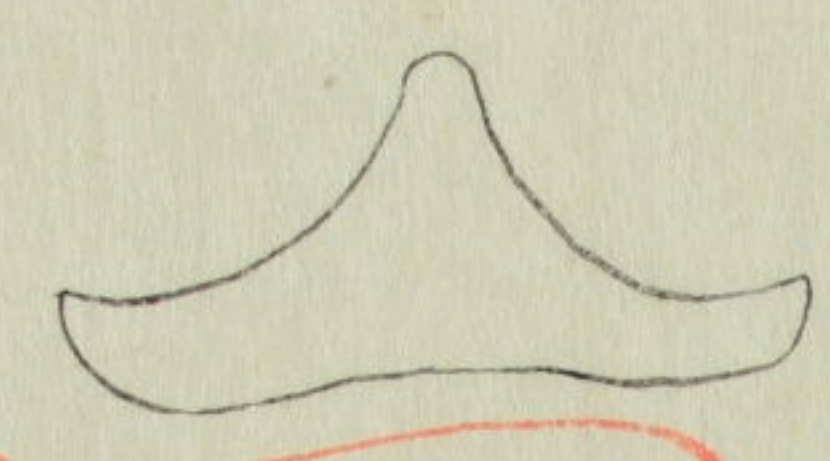
綱代笠古来より作り竹をあふくるあり但法を
き漆を止めあきも作り大方白あり傍のうむるもの
あり
天和のころより上方より作るあり

二文字下



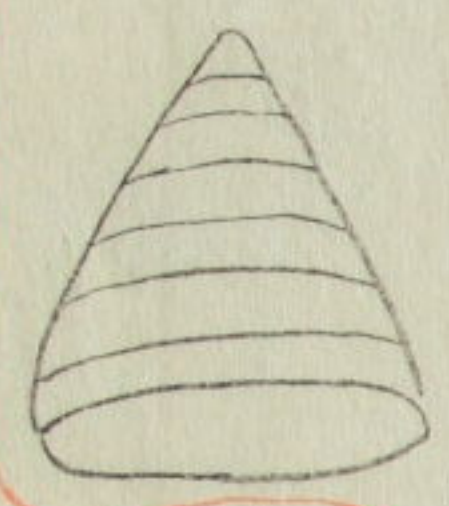
元文元年より徑本笠を杉形か作る平人の冠り也此とを
流澤止ぬ両面うてきれい多めなり思青
黄竹り上方より来る
同付と上方より綱代の杉あり白地多く又赤く流澤を
うきとめ平人くむる

二文字下



綱代をもちふちをみる
をそし柳小身尻馬とみか是あり柳細く流澤
流多し塔あり延享より
陪臣
既

二文字下



いぢく竹をいりりと云地を作る作りあり元文
より作る元と物あり
釣
釣



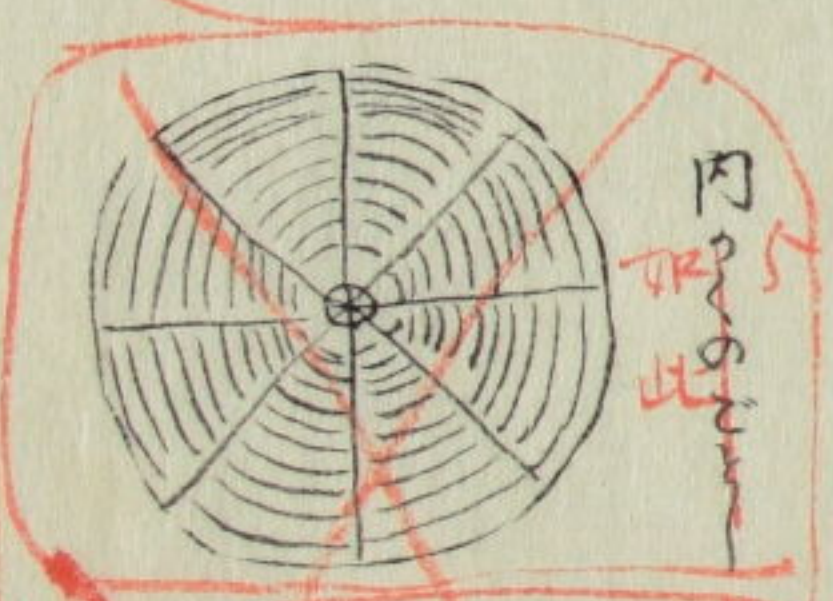
上方よりハチクサの杉形笠
 中細竹を三を押し上げて上の
 糸を思ひろくどらぎ糸ぬ
 い草保より地を仿り出さ
 上作ありぬのとめふはは



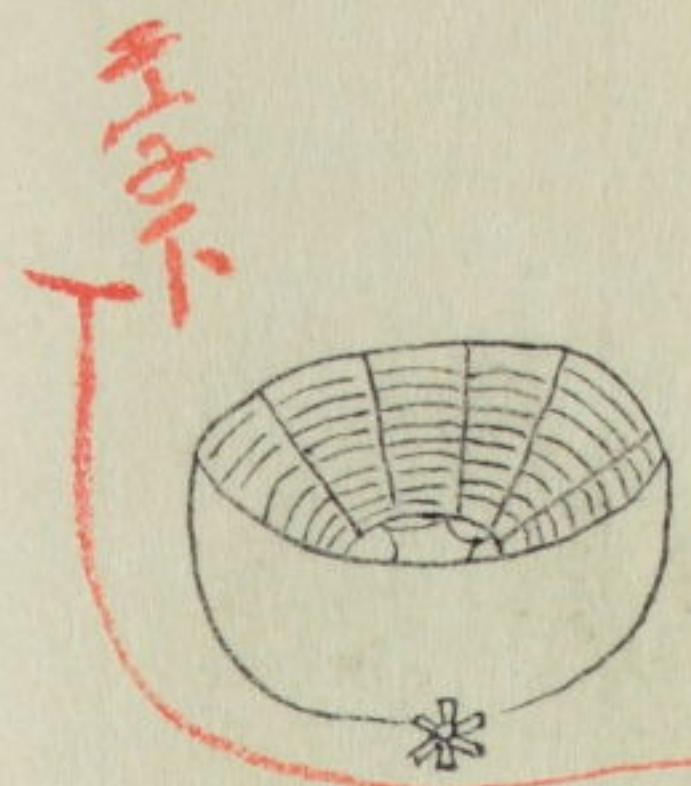
明暦より下ら笠むより若き女も
 因思ゆるはあふら女も元禄の
 の流黄志ら家のものとして笠と
 不見つたら笠あり



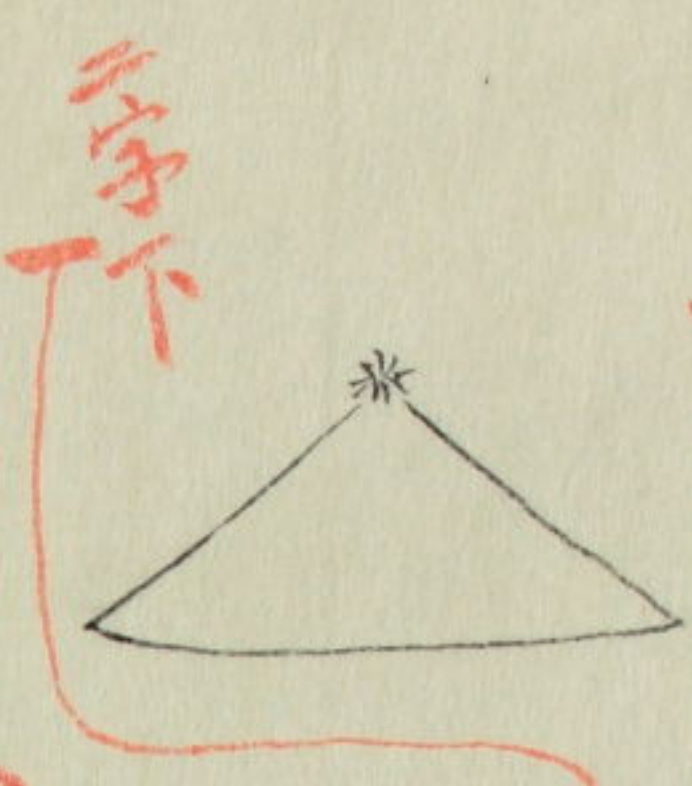
お小云經本のぬり笠寛永時代
 斗も小児笠のぬりやして内小
 きやうきつぎの模松粉色より
 あさぎのひも川通し上りて結
 時引通したり



上方下始
 正徳頃
 元文頃
 寛保頃
 但重六十四文
 代武文
 代重文
 四十五文
 廿四文
 三十文



寛永兼菱笠の内うちちふき
 正徳頃で菱ひも流黄のひも
 ともみふま草保笠にて大
 笠何て出る元文よりさか
 をうら馬ちりめん紅うら
 等あり



寛永より始り杉形にすぎ笠大
 ちる正徳正徳上笠出る結糸
 糸ぬい針金どの次ハ



天和の頃より加賀笠大名
 止めより寛永末よりふちを
 もむも天和の内をまげり半
 内一もよく結糸ぬいきれ
 糸

内此

但一冊より四冊文

上方より下り始る 代 二冊

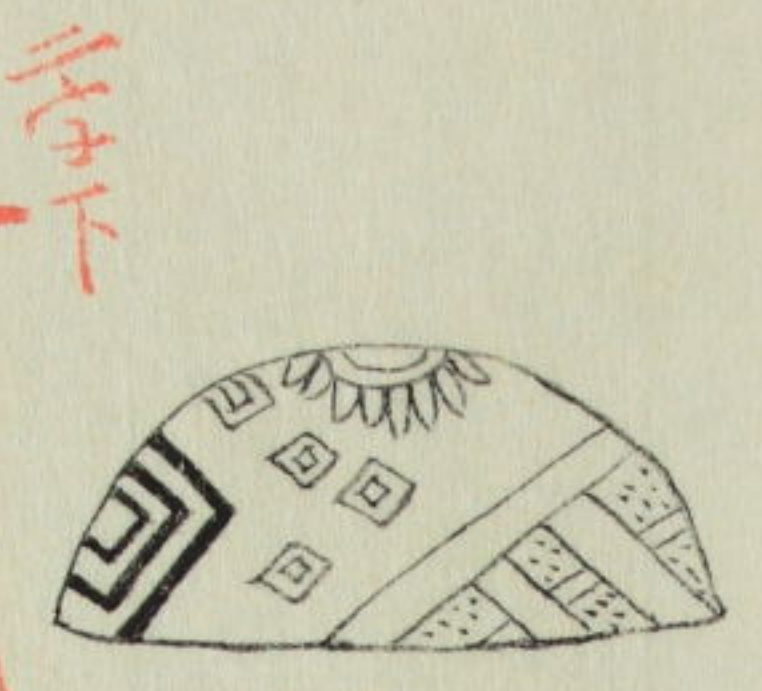
正徳頃 代 一冊

元文頃 代 四十五文

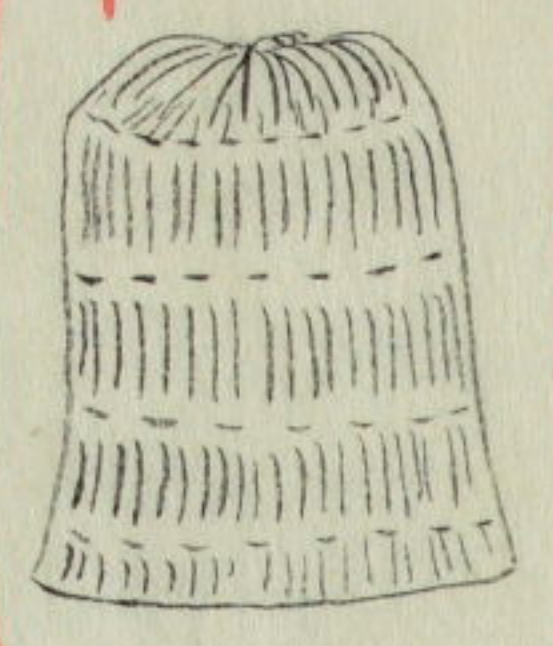
寛保頃 代 三十五文

三十二文

寛保比上方より始る花笠の丹緑青紫粉色を
る借の笠あつては笠の所なきありものあり



三寸下

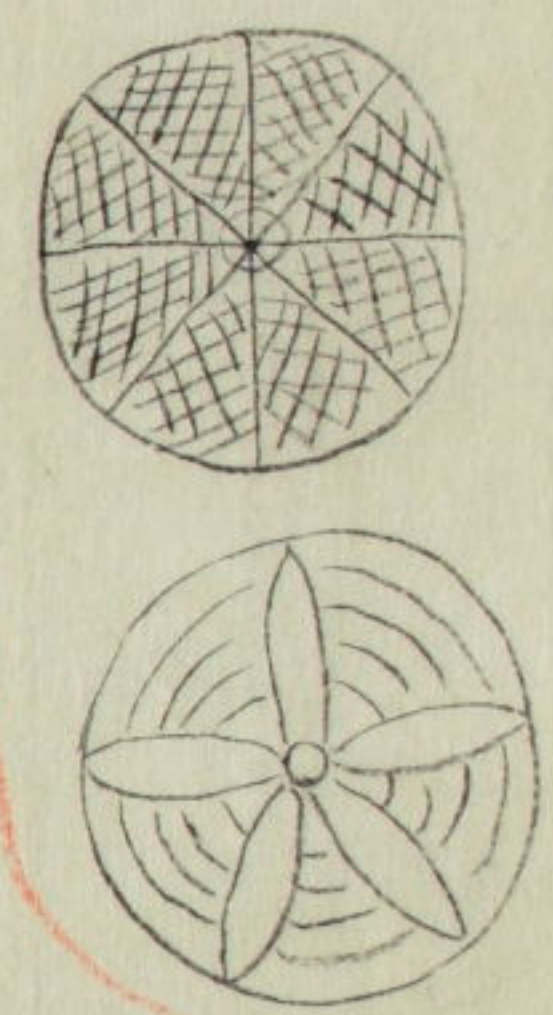


三寸下

こも借のあみ笠元禄頃より大ぶりを
寛保より小ぶりを深し藤竹のわらわら

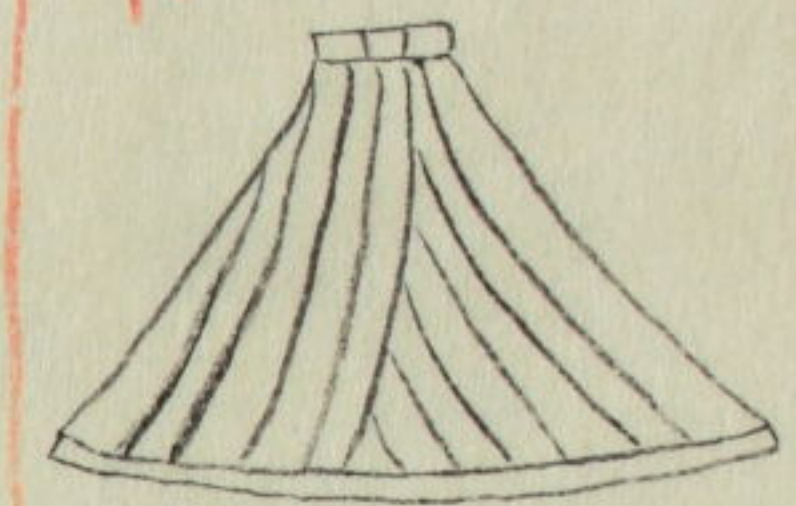
○笠の正徳の男袴を
紙をとよぎあひあつて
室の幅もろこしから
よりあみ細
から

竹笠出しこり地作百五十文 二層又好みよりて百文まで皆きぬ家ぬひあり



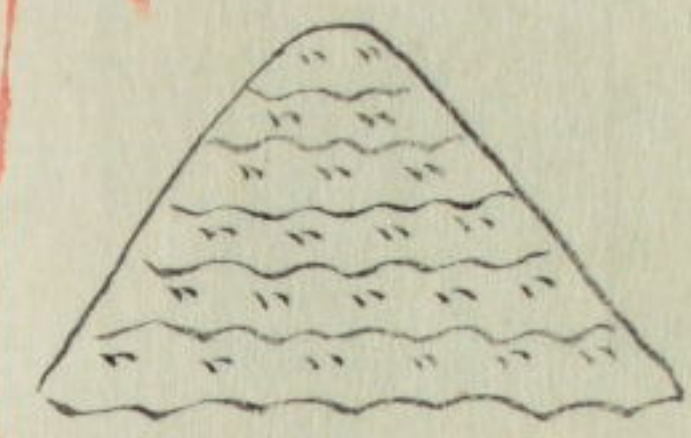
元文比より内の竹をくらくめ細工志ごとく
一延草より内の竹きくふぬるを上作あり

志こり竹笠履麻より出る元福の比せらわうり多し笠地
出ゆくかむものまねあり二層も五層も用ひてまきし
あり志の人の葉をさらし三層四層合せて作る志の人の葉の
間きり竹笠ふ作是びびんろうしの葉ありと云



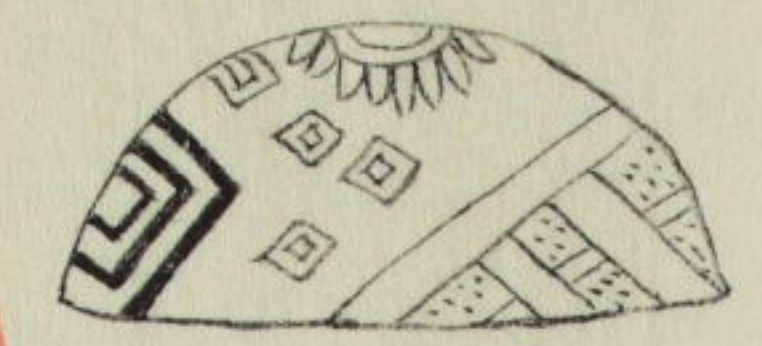
三子下

藤笠ふちをあらんで作る元文比藤細工さう人花生さし
さく紙ふちを作る此笠も作り多し若き武士匠師系
ど内坊を履多しあつたり上方すもむら細工より糸
くまやうをおく見事あり

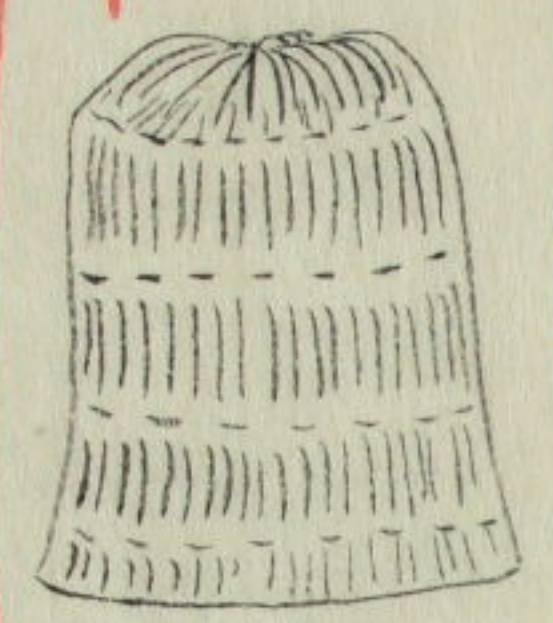


三子下

草保比上方より作る花笠ゆる丹緑青紫粉色を
する侍の笠あつたり笠の所りきありものあり



三子下



三子下

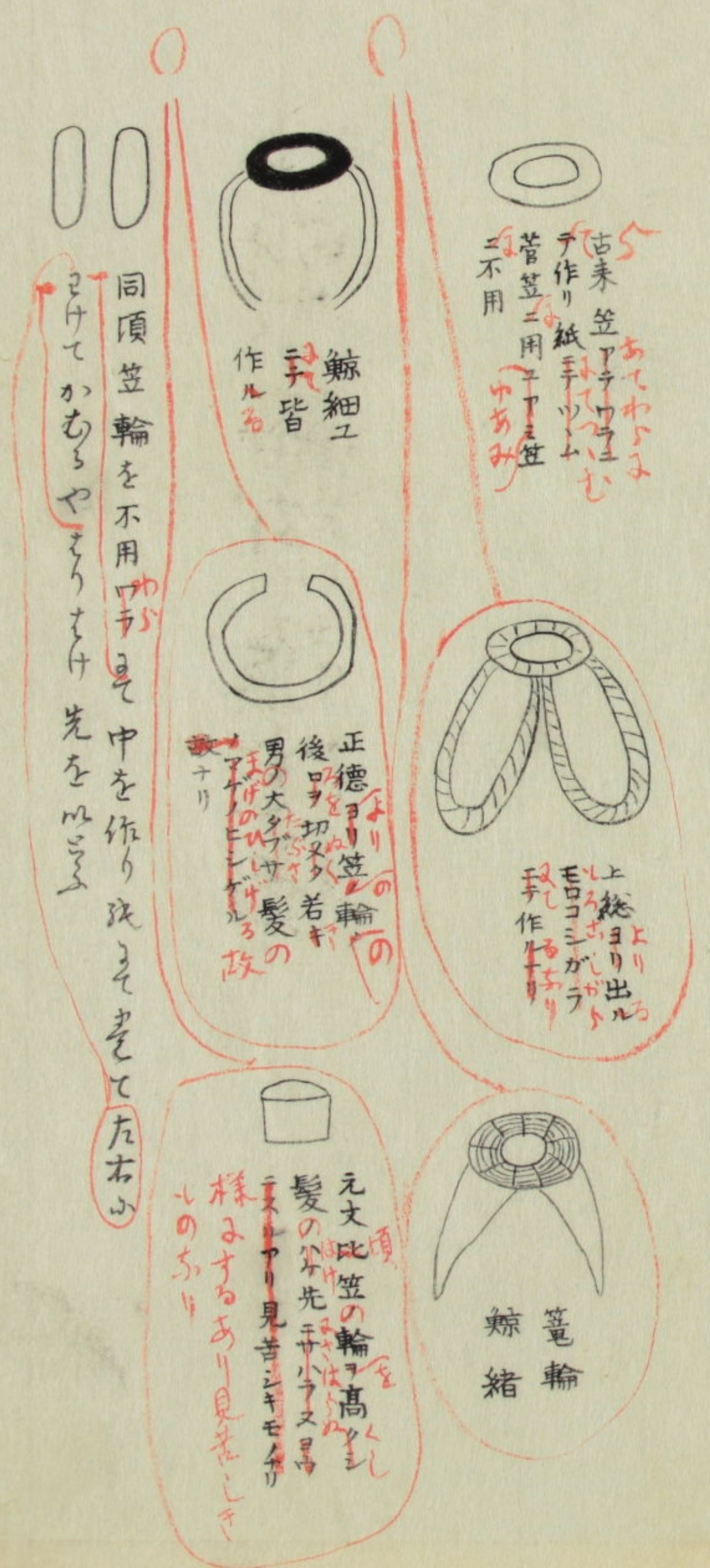
こも僧のあみ笠元禄比より大ぶらうき
草保よりあぶらうき深し藤笠のあつたりあり

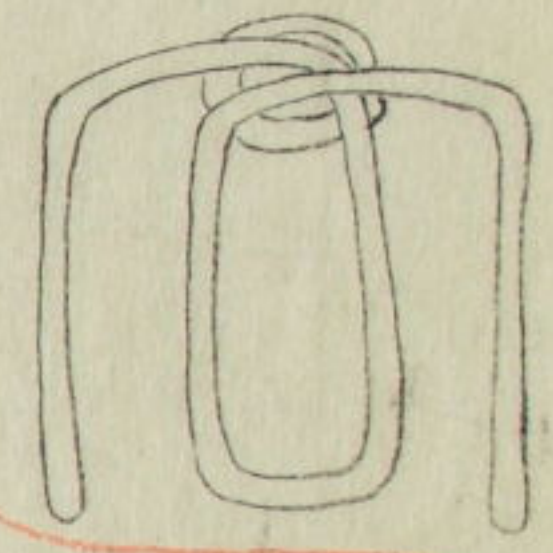
の笠ひもハ正徳の男好まはつらうをりゆめきの編笠も細くさう
おそゆる紙をとよをあひさむら万治末井の徳をさうりてさむら延
室の笠もろこしからん笠の輪の竹の竹て上端よりあそ是
さうおの笠輪のあそあふごらあり天木の頂上方よりもろこし
からん笠輪をせし貞享より元禄徳把のあそはしむをさうりて

左右二把を紐をきく寛闊男あらがひ不用元禄^結あらがひの半^バはら^バし^バの
 編りも花も少くも有るものを平^バはら^バと^バか^バる元禄より^結あ^バら^バね
 一の笠編をきく宝永^結は^結より^結草^結の^結細きを上方より^結下^結を^結き^結る者
 多し延宝^結通^結り^結或^結は^結お^結ろ^結り^結細^結井^結を^結き^結る^結こ^結ろ^結り^結飲^結世
^結思^結也^結麻^結を^結平^結々^結に^結し^結た^結る^結後^結も^結上^結品^結あり^結元^結禄^結比^結あり
 宝永より笠編を^結編^結り^結編^結を^結細^結く^結こ^結ろ^結り^結出^結を^結甚^結き^結る^結後^結三
 重^結編^結も^結こ^結ろ^結り^結多^結かり^結享^結保^結より^結笠^結編^結を^結緒^結幅^結廣^結く^結こ^結ろ^結り^結何^結を
 も^結鯨^結あり^結出^結を^結志^結う^結れ^結ども^結世^結上^結者^結と^結上^結品^結の^結不用^結而^結拒^結より^結上^結品^結を^結志
 願^結し^結編^結り^結こ^結ろ^結り^結多^結かり^結中^結の^結向^結へ^結文^結より^結笠^結編^結を^結緒^結の^結細^結き^結井^結を^結
 二^結重^結編^結より^結上^結品^結より^結下^結品^結と^結不用^結宝^結永^結迄^結大^結名^結の
 物^結を^結平^結人^結の^結白^結晒^結の^結笠^結編^結を^結信^結ず^結こ^結ろ^結り^結婚^結礼^結或^結は^結山^結王^結の^結婚^結礼^結に^結か^結ら^結る^結より
 お^結ろ^結り^結享^結保^結より^結志^結う^結り^結ん^結孫^結入^結り^結あ^結る^結こ^結ろ^結り^結
 笠^結の^結も^結古^結来^結の^結元^結禄^結より^結思^結ふ^結麻^結切^結裕^結と^結作^結る^結宝^結永^結より^結白^結晒

享保より志^結う^結り^結孫^結入^結り^結か^結ら^結る^結もの^結多^結し

延享三年六月山王の禮ふも^結り^結物^結好^結き^結始^結る^結花^結必^結之^結と^結必^結之^結
 何^結か^結り^結孫^結入^結り^結何^結り





寛延頃より笠輪の内丸くけ
ひも一筋ありて十字字ふり
て輪の方をせりてあごの
口へつけ後ろへつりあつた
を又あへ廻りあつてむすぶ
女あり男も思ひあつて志
多るもあつたり



寛延頃よりい
もを笠のさし
へけつるむ
人ともり

繪師帯刀

享保年中繪師帯刀を免れ、是ハ日光山へ入り細子糸山舟道中、

刀御免あり

是御用がり思へり然るも近頃常々帯刀を致し典樂の

町人をも仲入りたる故に帯刀を許さず各差をかゝり是を白柄細
と大山祇祓細とも云ひ男伊達を諸人難儀ふ及び一町中心勘定
盜賊等々の事予記に御蔵中のある事かまて多て是を思ふ事
被り伊達その町人帯刀の事御用近頃御用近被り伊達

改易

上野仁王門 焼失

宝曆六丙子四月廿日後及德院御斗出火の事帯刀御免あり

東叡山仁王門享保九子年三月二日焼失以後又恩門とある宝曆五
寅年御門を御免ふりて杖木山入始此等ある公儀出入用として杖
木をゆきあす杖木御免をゆるす是寛延四年有徳院様御廟の
石を夏が肥のより出を時節定方神尾美極も始て是をゆきせり

仁王門

御免傳小笠原伊豫守宝曆六子四月五日仁王門出来山門を再服侍者
暫出入を杖木を廿日御免して予記より往來を免れ三十三年

仁王門をくまじに及御免と

田向院

田向院の事あるは始に銅佛の如し佛を印して後不念仏堂を
建道心坊頼り此よりして思召の傍院より次舟小笠原島にて格
式を直り享保年中少くして香衣とあり終り

法忍が名字

宝曆四年戊戌月京師より法忍と云出家未だ諸人は是を今弘法と

法忍
 之常念能書して大字の名号を記さるり同五寅年三月五日より日
 月吾等して沙弥新堀端常念ちりて是を用帳を

南無阿弥陀佛

字の大小二三四五等幅三寸五分の二字天井へうけ阿
 弥の二字正面陀佛の二字を各々の上へうけきをうけり
 道連請合 〇同年夏 諸國道連請合の者 日布栴檀四丁目伊勢屋十多衛
 と申者新出 作らる此城享保年中も
 置をば 〇宝曆五寅八月廿五日見世再約形へ正直をば出みせを立是ハ享保の末
 り馬道之正徳仁なると云はばや本店名代あり

大明頭中

〇宝曆元年大坂より中村富十郎と云は女形つるを風を防ぐんあはちり
 めんを帽子を製する時のあき女形をかありり男もあきもの者



其時の人を大明頭中と云はる
 見らるき此あり

- 御取妻名
- 〇常憲院様御取立大名
 - 松平美濃守 十五万石
 - 松平右京大夫 七万石
 - 〇文昭院様御取立
 - 松平豊後守 七万石
 - 黒田豊前守 三万石
 - 松平右近将監 五万石
 - 加納遠江守 一万石
 - 〇有徳院様御取立
 - 間部越前守 五万石
 - 有馬兵庫頭 三万石
 - 松平右近将監 五万石
 - 加納遠江守 一万石
 - 是中ノ尻中紀所より仕供の面々大岡越前守 一万石

ト

○同子年二月初午のちり新燈六月祇園の新燈時新化物の繪
を書てそをつづつ小田

目はのり化物

目出交いそのは

大海の化物

刃物でいうぬわ

狛指さうぬわ

ちてゆゑ物

洞の化物

十

とらへ雨の出る
同うらふの人をあやまを

かりらるる

きれふみの音を出る

むこー八道

かろ合点の新ぬ

やろらん時ふ出る

一字

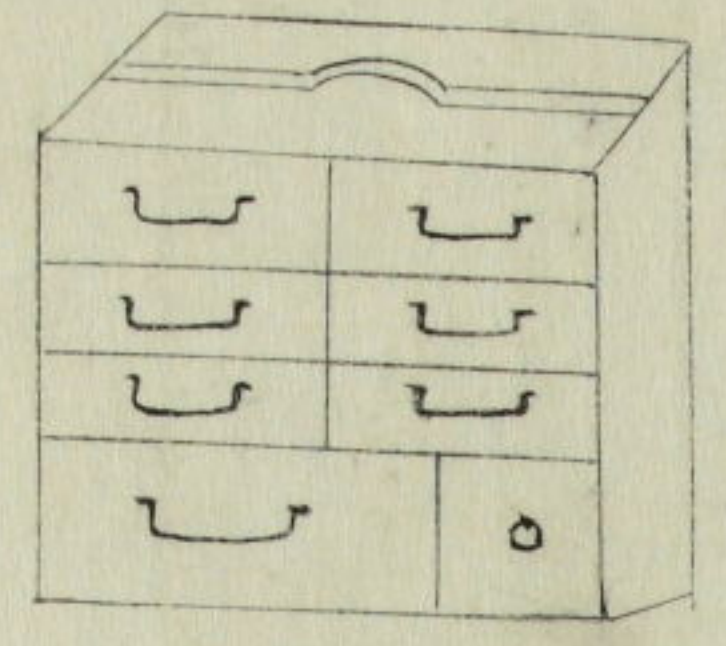
下

一字

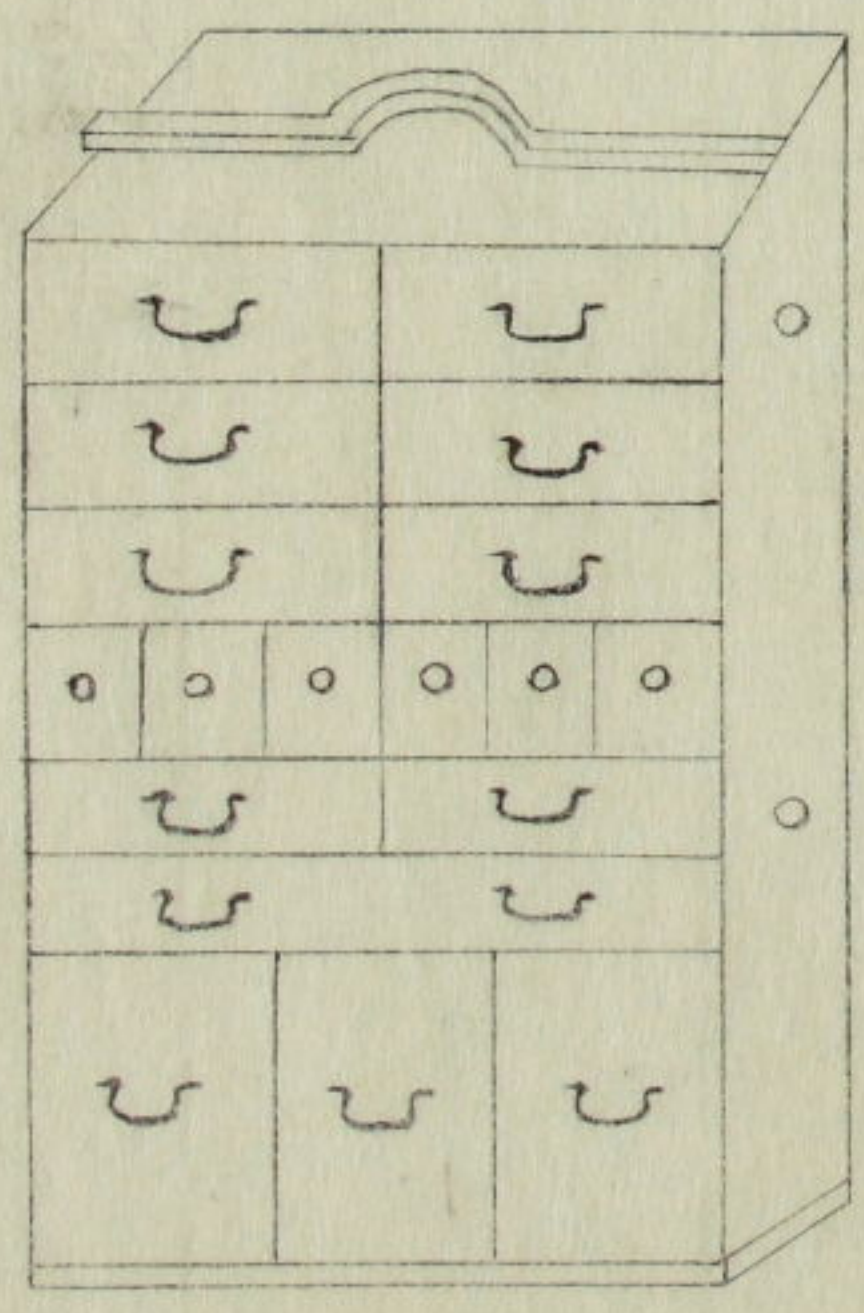
下

刺たをこ

○貞享年中迄刺多葉粉見世賣斗を世利うりあ一葉烟多を
洞くふあそ刻の然れともは敷き女中あそは類はや小深きをき
ら刺あをこやを名合はあをわらあをを洞のはり元禄年
中より刺たをこせり賣出る箱圖の如し



夫より宝永年中は至り
世利箱丁寧致対

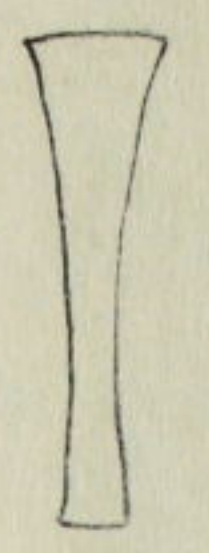


其後元文中祇園福町は叶屋と云刻多をこや出る十余人切子をこへり
つき前七出を江戸中を賣出らるは所よりうき始る

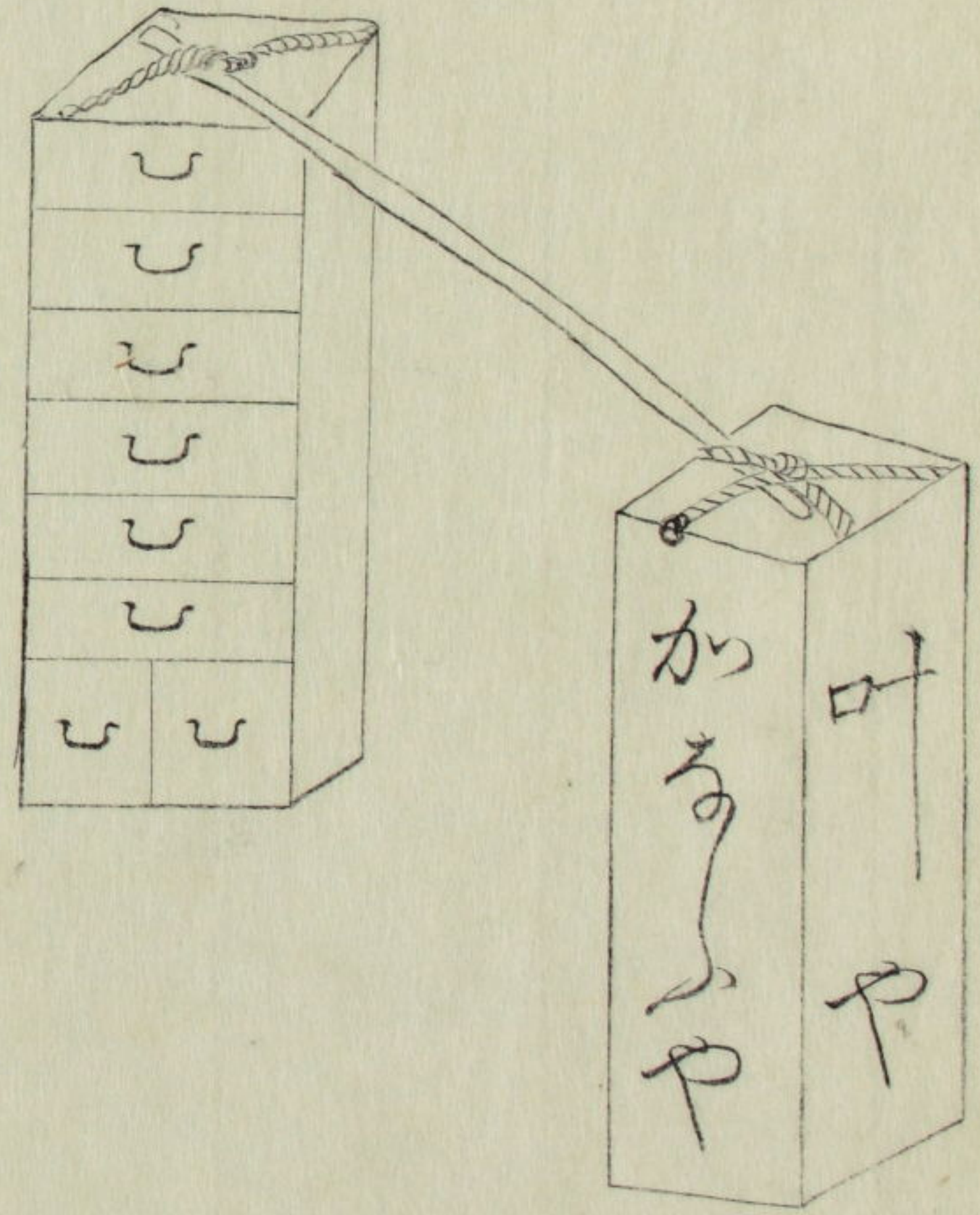
三つ上

宝曆年中ニ至てとて別多とや少あひはるる

三つ下の貞享年中

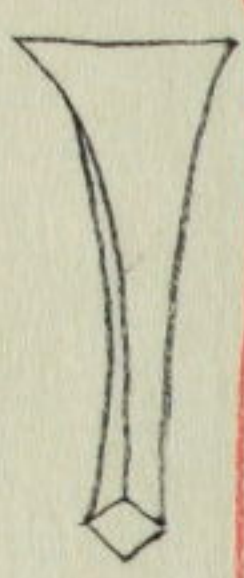


元禄より半々更古佐市外



少一太ふり小ある志うれども落くはいぢりと名付本の研角と作て
上とそ

延享年中より豊州流と申上方市此撥甚ぶとく大きくある



○宝曆六子五月京都より紙ノ端を引決を班を入るるのこころし

ある烟子入り代らぬ位大ふま

○同子八月朔より青屋町市村廻るる本控所森田勘弥是度

多し程言をばとむ是六宝永年中坂東又と申森田勘弥是度

とある別坂東又と申ハ廻るる本控所森田勘弥是度

とある例を以てはる森田屋本控所森田勘弥是度

○同最月形見世の節

浅草地と園十布と葉

五布カを深衣カを深衣カを深衣カの名称を深衣カ由来より述物カの改
を差居カへも内幕カ二進進物カと

○享保年中 吉宗公御代カ大名小名高を申書カの事無用カ
移カべき由被カ仰出カ

○宝曆五年の比カより江戸町カ男女煤カ色カの小袖カをやるはきりも帷子
もひとし何をもさカ竹あり女中カ五丁もさカと云カある五寸ぬん
も何同カは知りカらんちりカめん腰帯カはゆるカそ好カ三寸もよカさるぬ
も何何カ

八百屋お七が奉説

八百屋お七
加賀宰相殿の足輕カの山瀬三希多衛カと云者カ浪人カして右希多衛と
改丸カの中ぬち門カあふカ八百屋店カを出カ青物カ商賣カをいカひ子
あき事を愁カい思カ那カちカ駒カ上カ吉祥寺カ元法カの七面カ大明神カへ深カく祈
願カしてあみを還カふ佛カ力の推カしむカあカらカばカ妻カ妊カ婦カして女子カをも

うけ是カ偏カ七面カの加獲カありと云カ名カをお七カと付カりカ生付カさカうカくカる孫
あともカうカお七カ一解カをりカ因カりカ一症カ瘡カのあカりカしカとカりカ名カ白カり
りカ依カ之カ七面カへ申カれカのカあカ七カ小顔カを書カせ天和二年カを納カりカり
常カ在カ靈カ籠カ山カ法カ華カ寂カ才カ一カのカみカ字カのカ十一カと書カりカ是カをカ狂カ言カは
湯カ崎カかけカ松カ木カ梅カと申カたりカ然カるカふカ丸カ山カより出カ来カりカ希多衛
宅カ新カ成カふカ乃カ依カ之カ右カ希多衛カ山カ石カ川カ南カ縁カ心カ園カ高カきカ来カりカ新カ成カえ
急カ天カ四カ諸カ道カ具カ多カ新カ成カふカ乃カ依カ之カ右カ希多衛カ山カ石カ川カ南カ縁カ心カ園カ高カきカ来カりカ新カ成カえ
地カ内カのカ明カ察カもカ巧カまカばカ三人カともカ任カせカれカるカ希多衛カ山カ石カ川カ南カ縁カ心カ園カ高カきカ来カりカ新カ成カえ
べカとカ云カ彼カ空カ空カのカ恒カ也カをカ指カ示カ園カ高カきカ来カりカ新カ成カえ
住カ佐カ多カ衛カとカ云カ若カきカ人カうカりカ人カとカ云カ居カらカれカるカお七カとカ密カ通カして右希多衛
がカ恒カ也カをカ密カ通カして居カらカれカるカお七カとカ密カ通カして右希多衛
希多衛カお七カ二人カ引カ移カりカお七カのカ免カ角カ佐カ多カ衛カのカ事カ忘カぶカくカ園カ高カきカ来カりカ新カ成カえ
斗カありカくカ知カしカふカさカりカ耳カをカ以カてカ然カるカしてカ云カらカるカ事カも

田舎寺位牌
天和三年三月
五日と有此文
年月相違す也

勘ヶ田畏て退出有リ
か七親親
五^歳あり^かを^か吟^味せ^た事^也
是十五^歳あり^いと^よす^事也
として^その^まの^君と^すを^とり^おつ^れい^ふ事^也
十七^歳と^いひ^して^り不^地知^しと^いひ^しる^事也
い^お七^元來^事の^事を^かう^事は^かし^る事^也
を^しり^しる^事は^かし^る事^也
十一^歳と^いひ^しる^事は^かし^る事^也
び^陰も^その^もを^なし^る事^也
方^もも^おの^思ひ^もな^しる^事也
之^帝諸^在同^罪を^なし^る事^也
山田依^き傳^をて^正徳^年中^に被^詔出^せり^也

お七が紋は丸の内封文に
山^の代^の命^を
お七が紋は丸の内封文に

○金城重^なり^地の^地名^給高^くと^して^之の^を金^箔を^焼
付^りあり^張減^を同^部の^張流^しの^銅を^も志^んち^りと^して^も松^脂を

○^重仁^の祝^ふ吉^水安^をも^焼く^事を^源照^と云^ふ人^五宗^坊門^丸丸^丸
ふ^事に^入り^しる^事は^かし^る事^也
衣^を穿^きて^出る^事は^かし^る事^也
名^目を^えり^しる^事は^かし^る事^也

○^心禪^寺の^門の^札に^立春^大吉^此四^文字^表裏^あり^し
○^宝曆^五庚^十二^月大^坂川^の淺^く或^は流^船出^入不^自由^有り^し

地並他國船入の海船石砂を以て懐ひ中旨石砂之儀大
小不依兼之月三時申之儀出方也
川内子所積積の旬簿多々仲横仕の儀大坂川に來る船は
出せり申事

軍書講釈
町講釈

諸君の如き空船出入の事ハ
所積積の儀申出致人
江戸石河小會所
軍書講釈の始ハ高松法平といふ人鷹居の以
右平記の儀申を多々しとぞ町講釈の始ハ法左といふ者也
御門の側より集りし人々を
講ぜりといふ

下字一
法左といふ京師の人あり大勢巧て江戸府に來り三四年経ひしれども不
叶ふより再び京師の事を耻ありて其儀講釈あると云ふ者
稱くく群集ししものなり
以て高松の今御舟より移りて四代ありといふ思ひ傳福寺
と云天台宗の馬場河田丁目の移りあり

風呂屋

下字一

○風呂屋の始ハ河内國の始の法見所御門御夢法の宮中今の常盤
橋の所の外(又内)の水茶屋を去つらいたる人あり勤勞の武家方に京都
遊漢の始あれハ御門多々つといふは又ハ丸の内御事あれハ長屋の儀
所の櫛を喰さんといふ五人三人おつれて彼等處へ來り終るを喰り
清く金らまの儀ありしころ或人の侍の曰ふを湯あみせたり
身神不淨の思ふ儀湯あみしきも何れも然ると云ふ
お力て彼等の上風をしと己が宿所へ風呂を之諸人を入らせりま
粉をそく女を遊きつたりハ事一統の儀ありま湯倉河岸也
く風呂屋の始ありといふ

髪結

○髪結の始ハ室永の比り里見家浪人存ハ陣幕を執りし儀の末或ハ

平家物語
評判作者

昔あど一結付百姓の故を結て海世とを是の何由をも構はるる人通り
つらむを見くけても事あり 勢を結成の長後屋は小かつくそ好に
戸の始末羽根の成業印也 是も幕をもちて結びしうそは是を
又ぞうと云今も上総房がより 勢を結多く出づる里見家の浪人あれば
あり 老年もやと西一河の就田地を求めたり又如斯是は上総房が今
かかいらんといふ
○世に平家物語の評判由井正雪作ありといふ 其 増上 所化廓然が
若くそをば廓然持物のまあるに 劍法早業ふ熟ししう正雪減持
引 少あふ時出 和泉が舟を引く時 平家物語評判の者
板を引込 廓然馬上より 巧 愚智ある奴系うか我心を尽
しては書を綴る 愚名を 科あり人氣のちうし
むう所ゆして 是流もあ 天あるか 命なきう形とて 大か歎息しして 通
きりと成書よんといふ

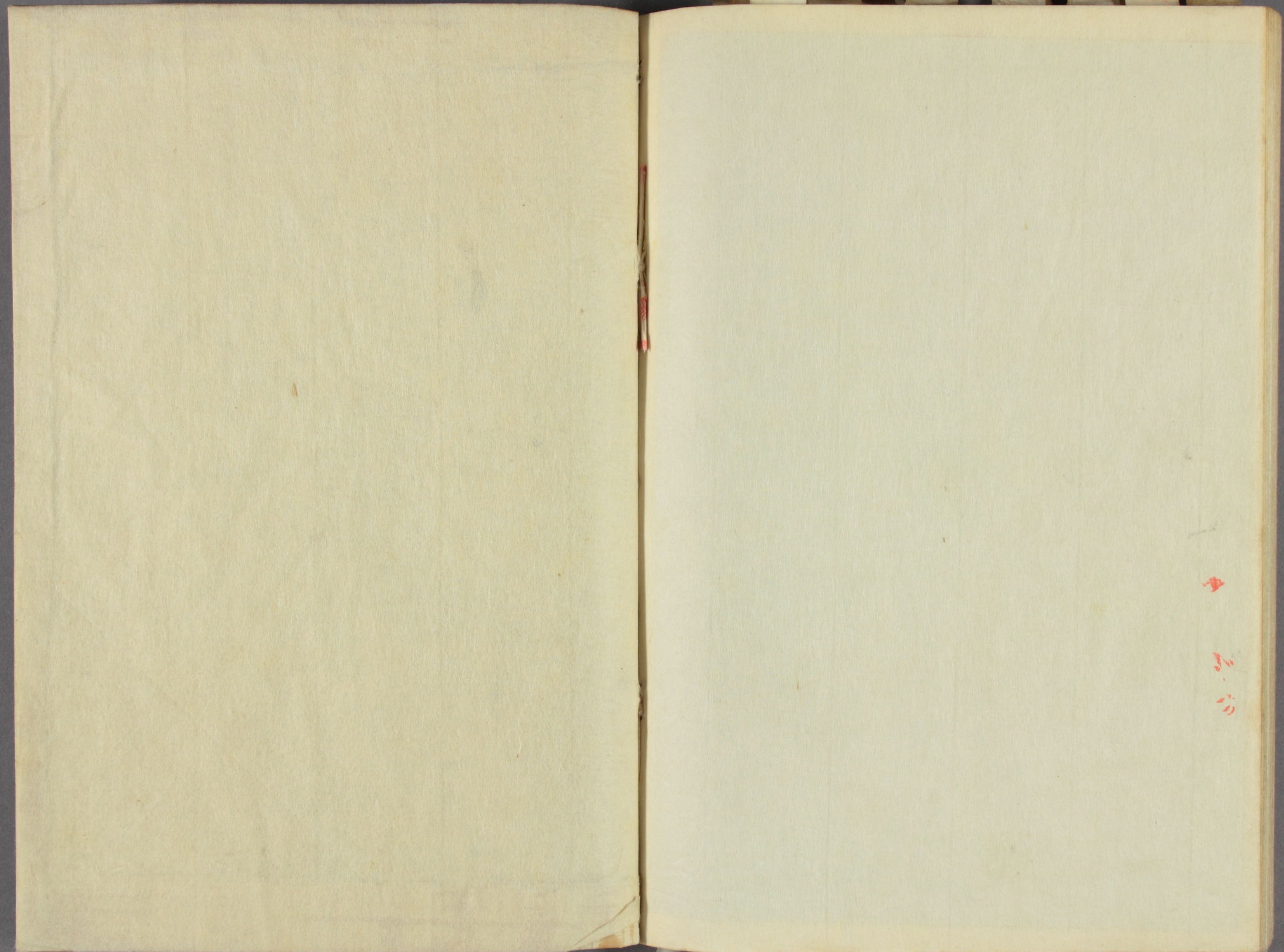
正雪印字松雪あり 松の字をまゝうして 塔人面を書ふ正の
字を用ひしうといふ

干時明治十九年晩秋

筆者

妻木頼徳





Handwritten text on a small paper slip at the top of the book, partially obscured by the pages. The text is written in red ink and appears to be in a cursive or calligraphic style, possibly containing a date or a name.

Handwritten text on a small paper slip at the bottom of the book, partially obscured by the pages. The text is written in red ink and appears to be in a cursive or calligraphic style, possibly containing a date or a name.

